生命を語る

第三巻

池田大作

潮出版社

著者近

生命を語る　第三巻　目次

生と死〈1〉……7
さまざまな死生観　9
——ある対話を終えて
死後の運命　28
——永存か消滅か
生と死〈2〉……45
不生不滅の法則　47
「方便現涅槃」とは　56
「本有の生死」について　65
宇宙と生命……83
宇宙に生命は存在するか　85

原始地球での出来事 103
人類誕生の条件 …… 125
進化論について 127
人類誕生の条件 143
永遠の生命〈1〉 …… 165
「有情」から「非情」へ 167
死と生命の「我」 190
永遠の生命〈2〉 …… 209
転生の秘密を解く 211
人生観への反映 238

生命を語る　第三巻

池田大作

生と死〈1〉

さまざまな死生観——ある対話を終えて

——英国の世界的な歴史学者であり哲学者でもあるトインビー博士と会長との対談は、昨年（一九七二年）と今年（一九七三年）との二回分を合わせますと、延々数十時間にもおよんだと聞いていますが、やはり、歴史観とか文明論などが、おもな内容だったのでしょうか。

池田　博士は、生涯をかけたまったくユニークな文明論によって、人類の足跡と歴史の流転に新しい光りを投げ入れた当代最高峰の碩学（せきがく）です。のみならず、政治、経済、文学、哲学、宗教から、性の問題とかレジャーの問題に至るまでのあらゆる分野に、鋭い洞察眼をもっておられる。二十一世紀への道を探り、光りを照らすため、こうしたあらゆる事柄について、心ゆくまで話し合うこと

ができたと思う。

――生命に関しても、種々議論されましたでしょうか。

池田　生命論は、きわめて重要な論題の一つでした。全魂を傾けてディスカッションしました。精神と身体との関係とか、意識と深層心理の関連とか、運命や宿命についての本質的な掘り下げ、それから、愛、良心、慈悲、欲望、エゴイズムなどが話題にのぼった。

また、博士の提唱されている高等宗教の必要性や、宇宙の背後に存在する「究極の精神的実在」についての思索とか、他の天体にも生物が存在するかどうかなどについても、意見を交しました。

――会長と大森実氏との「直撃インタビュー」のタイトルが『革命と生と死』ですが、そのなかで、たしかつぎのような意味のことが、会長の発言にありました。

それは、昨年の博士と会長との対談――ちょうど一年前の五月でしたが――についての感想を、博士が通訳に漏らした言葉を引いたところです。つまり

「こんなに共通点があるのであれば、これは対話ではない。お互いの一致点に向かう論議になった」と。

池田　私も同じ感慨をいだくことができました。しかも、今年の対話で、その思いはさらに強まったようです。

――生命論のなかでも、根本的な論題はやはり、死後の生命がどうなるかとか、生命は永遠か否かといったことだと思います。死は、この瞬間にも私の生命に襲ってくるかもしれません。どんなに財力があり名声を得ても、死だけは逃れるすべはないわけです。たとえ、私が死を忘れようと努めても、また一時期忘れ去ったとしても、死のほうはけっして私を忘れようとはしないからです。何が執念深いといっても、死ほど粘り強くつきまとうものはありません。なにしろ、どんな場合にでも打率十割ですから――。

池田　日蓮大聖人の御書にも「先臨終の事を習うて後に他事を習うべし」とある。生と死は、人間にとってもっとも古い、しかも根源的な謎であり、古今東西のあらゆる哲学と宗教の中心課題です。ゆえに、生と死を解明しない生命

の探索は、画竜点睛を欠くことだけはたしかでしょう。

私たちは、ともすれば、他人の死を眼前にしても、自分だけは例外であるような錯覚にとらわれがちです。しかし、誰人たりとも、死だけは避けられない。実存主義者ハイデッガーは「人間は死への存在である」とし、また「人は生まれた瞬間に死するに十分な年をとっている」と述べている。逃れられない生死の運命を真正面から見据え、死への思索を通して、より人間らしい生活を送ろうとする一人の哲人の苦闘がうかがわれる言葉です。

――死を自覚するところに、人間としての所以(ゆえん)があり、さらには特権があるとも考えられますね。

池田　人間の自我のみが、死を自覚し、それを見据えての生を享受しうるのです。他の生物は、私たちと同じように死すべき存在でありながらも、そのあまりにも厳粛な事実を自覚することもなく生涯を閉じる。このような意味からすれば、死の自覚は、たしかに人間の特権といってもよい。だが人は、特権を与えられるとともに、それと引きかえに死への恐怖も引き受けなければならな

いようだね。死ぬことの覚知は、そのまま死の恐怖を呼び起こすからです。

――私自身の生命の内奥にも、意識するとしないにかかわらず、死への恐れが、絶えずうずいています。

池田　その恐れから目をそらすのではなく、念々に死と対決し、それを乗り越える努力を断じてやめないとする勇気と決意が、ひるがえって私たちの生をいろどり、実り豊かなものにするのだと思う。事実、人間の歴史を飾ったありとあらゆる哲学も、各種の宗教も、そして科学さえもが、その発生の基底部に、生を思索し死を克服しようとする幾多の先哲の、血と汗の結晶を組み込んでいると考えられないだろうか。

――死との対決が哲学の始まりだとされていますし、科学のほとんどの分野は、文字どおり、生をできるだけ引き延ばす学問です。ですから、科学の発展を促す原動力の中核には、私たちの心にうずく死への恐怖が流れているといえないこともありません。

池田　運命との対決から科学が生まれ、医術の進展がもたらされる。その結

晶が人びとの生を守り日々の生活をいろどるわけだね。

――でも、医術でどれほど生を延ばしても、人間が一個の生命体であるかぎり、無限に死を遠ざけることは不可能です。医学的常識からしますと、私たちの身体のあらゆる細胞は古くなると再生されますが、脳細胞だけは交代がきかないとされています。したがって脳細胞の寿命が、純粋に生物学的にみた人間の寿命の限界ということになるのですが、それによると百歳からせいぜい百二十五歳までといわれます。そのころになると、どのように拒否してみても死を迎え入れなければならないわけです。もちろんこの数字は現代の医学水準におけるものですが――。

池田　科学や医術は、生を守り、ある程度は死を引き延ばしえても、死そのものの解決にはなりえないということだね。

――死の解明は、あくまで宗教とか哲学の課題だと思われます。

池田　これは数か月前の新聞にも報道されたことだが、アメリカの著名な人類学者R・ソレッキー教授が、中近東のイラクでネアンデルタール人(注1)の遺跡を

発掘したときのレポートがあった。ネアンデルタール人は、学者たちのあいだでは、現在の私たちの直接の祖先であるか否かについては意見が分かれているそうだが、ともかく、十数万年前の人類の一員であったことに間違いはない。

その遺跡を発掘していたとき、ソレッキー教授は、墓のまわりに大昔の花粉が置かれているのに気づいたというのだね。それもどうやら、当時の人びとが、仲間の死に臨んで墓を造り、その周囲を、菊とかスミレの花などで飾ったらしい。

――温かい心情がにじみ出ていますね。ところで、死者を花で取り巻くことに、どのような意味が込められていたのでしょうか。

池田　教授は「花をめでた人びと」と呼んでいたが、このネアンデルタール人に、すでに永生の信仰といったものが定着していたという。つまり、人間生命は死とともに消滅してしまうのではない。ソレッキー教授の表現を借りれば「天」という実在に帰ると信じていたわけだ。もちろん、具体的にどのような概念をもっていたのか知るよしもないことだが、ともかくネアンデルタール人は、生命の永存への何んらかの観念、信念をもっていたのでしょう。もし、私

見を許してもらえば、十数万年も以前に地球上に生息していた人びとの胸奥にも、宇宙と大自然に脈動する根源的な実在の姿が映し出されていたのではないだろうか。まあ、この問題は、人類の誕生を促す進化の歩みを追跡するところで、もう一度、詳しく考えてみたいと思う。

――それにしても、人類は、そうした遙かな遠い昔から、生命の永存を信じ、彼らなりの信仰をいだいていたという発見は、まことに興味深い事実ですね。

池田　野に咲く花の供養は死者への愛情であり、契りであり、また祝福の表現でしょう。そしてその優雅な振舞いの基盤には、永生の信念が深い根をおろしていたのです。

――時代がずっとくだりまして、私たちが普通に原始人と呼んでいる人びとのころになりますと――この原始人とは生物学的には私たちとまったく同じホモ・サピエンスですが――世界中のいたるところに「マナ」という力を信じる死生観が見受けられます。「マナ」というのは、原始時代の人類が、自然と

万物のなかに見いだしたものであり、一種の生命力とでもいいあらわせそうな力を意味しています。当時の人びとは、生と死の現象を、「マナ」が増進し、強まるのが生であり、逆に弱くなっていくのが死であると理解していたようです。

池田　四季が移り、天体の運行が繰り返される。万物の力強い律動に合わせて、人の生命も、死によって大地に帰り、生と共に再び地上に現われ出る。生から死、そして再び生への蘇りを、原始の人びとは、ごくあたりまえの出来事として信じていたのだね。「マナ」は、すべての生き物が、生死を流転する内在的な活力を指し示していると考えられる。

このような生と死の理解は、たしかに単純であり、素朴な概念にすぎないかもしれない。しかし、素朴さのなかに光る真実のきらめきに盲目であることは許されないでしょう。ここでも、人類の英知は、森羅万象にみなぎる〝血潮〟を、そのまま自己のものとして感じ取っていたのではないだろうか。

――「マナ」信仰よりもう少し後期になりますと、学者たちが「アニミズ

救済の途が残された霊魂の至るところであるともいう。

――「最後の審判」という思想もありますね。

池田　キリスト教でいうこの世の最後の時がくると、死せる霊魂はすべて復活し、生きている人間の「たましい」も含めて「最後の審判」が行なわれるとしています。つまり、キリスト教も、生命は死んでのち生まれ変わるとするが、それは、ただ、このときの一回に限られるのです。そして、再生した生命は永遠に存続すると説かれている。

イスラム教にも同じパターンの信仰がみられるね。最後の日には、すべての死者が三つの組に分けられる。選ばれた霊魂は神の玉座近くに召されて特別の栄誉にあずかれる。その次のグループは、天国のようなところに至り、最後の組は灼熱の地獄に陥る、というわけです。

――ゾロアスター教(注2)にも、死の直後にうける「たましい」の裁きと、もう一つ、すべての人びとを裁く最終的な審判が説かれています。

池田　いま列挙した三つの宗教、つまり、キリスト教、イスラム教、ゾロア

スター教は、すべて、東アジアは別にして、今日の世界に大きい影響を与えてきた宗教です。これに、これらのうちキリスト教、イスラム教の母体であるユダヤ教を加えて、これらの宗教を並べてみると、非常に類似した点が目につく。

一つには、私たちの生命は母の胎内に宿る瞬間に、神によって創られるということです。二番目には、死とともに肉体が崩れ去っても、「たましい」は永遠に生きつづける。第三の共通項は、この世の終わりに、一回だけ、すべての生命が生き返り、それぞれの神による裁きをうける――ほぼ、こういった主張点ですね。

――私、会長とカレルギー伯の『文明――西と東』の対談を読みましたが、そのなかで、つぎのようなカレルギー伯の言葉が鮮明に残っています。それは、東洋人と西洋の人びとの死生観を絶妙な譬喩を用いて説明されていた個所です。たしか、「東洋人にとって、この人生というのは、本の一ページである。終わって次をめくると、新たな人生が始まる。ところが、ヨーロッパの人びとにとって人生は一冊の本のようなもので、終わればそれでおしまいだ」との発言で

す。

キリスト教にしても、他の西洋の宗教にしても、この一回限りの人生をどのように生きたかによって、死後の行き先がすべて決定され、その状態が未来永遠に続くと説くのですから、西洋人にとって、人生はやはり一冊の本でしょう。

池田　唯物論者たちの考えも、一冊の本にたとえられそうだね。だが、西洋の宗教では、死後も生命は存続すると主張しているのに対して、唯物論者は、死後の生命を完全に否定する。死に際して、生命は存続するのか、それともうたかたのごとく消え去ってしまうのか――ここに、宗教を信じる者と、唯物的思考に走る人びととの根本的な相違点があるといえよう。

だが、生命の消滅論についてはあとまわしにすることにして、東洋の宗教に少しばかり耳を傾けてみよう。さて、東洋の宗教というと、代表的なものは仏教であり、そしてヒンズー教だね。このなかで、特に仏教については、あとでじっくり検討することにして、ここでは、ヒンズー教も含めて東洋的死生観の特徴をあげてみてはどうだろうか。

す。

キリスト教にしても、他の西洋の宗教にしても、この一回限りの人生をどのように生きたかによって、死後の行き先がすべて決定され、その状態が未来永遠に続くと説くのですから、西洋人にとって、人生はやはり一冊の本でしょう。

池田　唯物論者たちの考えも、一冊の本にたとえられそうだね。だが、西洋の宗教では、死後も生命は存続すると主張しているのに対して、唯物論者は、死後の生命を完全に否定する。死に際して、生命は存続するのか、それともうたかたのごとく消え去ってしまうのか――ここに、宗教を信じる者と、唯物的思考に走る人びととの根本的な相違点があるといえよう。

だが、生命の消滅論についてはあとまわしにすることにして、東洋の宗教に少しばかり耳を傾けてみよう。さて、東洋の宗教というと、代表的なものは仏教であり、そしてヒンズー教だね。このなかで、特に仏教については、あとでじっくり検討することにして、ここでは、ヒンズー教も含めて東洋的死生観の特徴をあげてみてはどうだろうか。

――先ほどまとめられた西洋の宗教の共通点を参考にしながら、それと対比していきますと、やはりもっとも顕著な特徴は「輪廻」説ですね。

池田　私たちの生命は、死を境に無に帰してしまうのではなく、生と死を繰り返しつつ、かぎりなく続いていくとする考え方です。人間生命は、神の創造するものでも、この世に姿を現わした時点で初めて形成されるものでもない。永劫の昔から生死流転を繰り返し、無限の未来へと連続していくのが、生命の実相であるということになりましょう。

カレルギー伯のたとえにもあるように、現在の生というものは、ちょうど、本の一ページに相当します。しかも、生命の書物には、始めもなければ終わりもありません。いくらページをめくっても、多種多様の人生模様が永遠に繰り広げられていくのであって、生と死に終着駅はないのです。いいかえるならば、生死の道程は、永劫の長きにわたって連続していくのです。

――それから、東洋の思想には、「業」(注3)つまり「カルマ」という発想があるのも特徴的ですね。

池田　「業」の考え方をもたらすのは、生命内在の因果律です。西洋の宗教が、現在の運命を神の意志によるとし、死後の運命を神の裁きにゆだねるのに対して、東洋の死生観では、人間生命における幸とか不幸とかを、その人の生命の変転のなかにおきた因果の法則としてとらえるのです。

とくに仏教においては、現世に遭遇する苦と楽の本質的な原因を、この人生の始まった時を突き抜けて、無限の過去を探り、さらには、現在の行為のおよぼす影響性を、かぎりない未来にまで追跡していく。こうした仏教の基本理念を、天台大師は『法華玄義』のなかで、明快に「今我が疾苦は皆過去に由る、今生の修禅は報将来に在り」と記しています。

――たとえば、私がいま、この世の地獄ともいうべき苦悩を味わっているとします。それも、産声をあげてからずっと、苦しみの底をはいまわるような人生だったとします。西洋の宗教からしますと、私は神によってつくられたのですから、こんな私の人生をもたらした神なるものをうらむほかはないわけです。神とはなんと冷酷なものだろうか、と――。

池田　しかし、地獄を引き起こす根本的な原因が、とりもなおさず、自己の生命そのものに内在している事実に眼を開くと、この苦しみの因をみずからの責任として引き受け、それを打ち破りつつ、不動の幸福境涯をつかみとろうとする勇気がわきおこってくる。未来に託する希望の星が、無明の闇を貫いて輝き始めるのではないだろうか。少なくとも現代の私たちにとって、神に自己をゆだねる生き方よりは東洋の思想のほうが、納得のいく考え方だと思えます。トインビー博士も、東洋の宗教のほうが合理的でもあるし、人間本来の宿命、運命を十二分に説明しうるといわれていた。

――キリスト教、イスラム教、仏教などは、博士の分類では高等宗教に入りますね。

池田　そのとおりです。博士は、大宇宙に生と死のリズムを奏でる不滅の実在――それを、宇宙の背後に存在する「究極の精神的実在」と名づけているが――その実在に迫り、なんらかの形でふれようとする宗教を指して、高等宗教と呼んでいます。高等宗教は、すべて、宇宙と生命との本源に肉薄しようとす

る姿勢を保っているからこそ、説き方は違っても、一つの合意点に達することができたのでしょう。そこには、細部では違いがあっても、生命の永存性への共通の観念があります。

いや、高等宗教のみならず、ネアンデルタールの太古から、「マナ」信仰とか「アニミズム」をも含めて、あらゆる宗教の基底部には、生命の永存性への信念が深く根を張っている。宗教のなかには、迷信に近いものもあるし、呪術と化したものもある。また、高等宗教といえども、真実とは似ても似つかぬ空想とか、幻想の世界を描き出している部分もある。だが、それらの変形や歪曲にあっても、なおかつ、生命の〝永遠性〟だけは、百万年とも、二百五十万年を越すともいわれる人類の心の奥を流れ続けてきた不変の信念といえるのではあるまいか。

博士は、高等宗教のなかに、究極の実在へと肉薄する先哲の英知を見抜いておられる。その究極の実在を、私たちの言葉で「宇宙生命」と置き替えれば、あらゆる宗教の眼は宇宙本源の生命へと開かれていったのではないかと、私は

主張したいのです。つまり、人類の英知は、死との対決を通じて、宇宙生命の根源に迫り、万物の光輝あるリズムを織りなす宇宙本源の実在にともなう永遠性をつかみとったのだと思うのです。

――しかし、それが、宗教によって、死後の運命についての種々の異説を生じたのは、どうしてでしょうか。

池田　その疑問も当然ですね。この点に関して、博士は重大な発言をされました。それは、高等宗教はすべて、仏法用語での「空」に突き当たっている、との意味でした。また、博士の提唱される「究極の精神的実在」も、「空」の次元にあると考えられているようです。

――「空」としての人間生命と宇宙そのものとのあり方を、どのようにとらえるかによって、各宗教の説き方も違ってくるのですね。

池田　すべての宗教は「空」の状態においてダイナミックに律動する不滅の実在にと迫っていった。そこから、あらゆる生命的存在の永遠性だけはつかみとることができたのです。だが、具体的に、いかなる状態で永存するのかとな

ると、千差万別の食い違いをみせている。とすると、私たちがこれから解明していかなければならない問題の焦点もはっきりしてくるのではないだろうか。

――「空」における生命を直視することです。「空」の概念こそが、生と死の実相を正しく解明するための唯一の鍵だと思われます。

死後の運命――永存か消滅か

――京都大学の田中美知太郎名誉教授の著書の一つに『人生論風に』と題した論文があります。論文というより、軽妙なタッチで書かれた随筆集と呼んだほうが適当かもしれませんが、そのなかに「輪廻」説についての氏の意見が記されています。

田中名誉教授は、あらためて紹介するまでもなく、ギリシャ哲学の第一人者ですが、私が非常に面白く読んだのは、ギリシャのピュタゴラス派の説く輪廻転生の話です。そこに、一つの寓話が出てきます。あるとき、ピュタゴラスが道を歩いていると、小犬がいじめられていました。すると、彼は次のように叫んだというのです。「やめろ、なぐってはいけない。これはきっとわたしの友

人のたましいにちがいない。なき声をきいていると、私にはそれがわかるのだ」と——。

——本当にわかるのですかね。

——まあ、それはともかくとして、田中氏のあげられる、もう一つの説話をあげてみますと、それはギリシャの喜劇作品の一つですが、借金を返さない男が法廷に呼び出されました。裁判官の鋭い追及に対して、その男は胸をはって答えたというのです。「金をかりたときの人間と、現在の自分はまったくの別人だから、いま借金をかえす理由はどこにもない」と自己弁護したのです。

池田　なるほど。一面の真理をついているね。よく、赤ん坊のころの写真を見せられて、これが同一人かと驚くことがある。こんなに愛らしい顔をしていても、大人になるとずいぶんひねくれてくるものだと——(笑い)。

——親しい友人でも、小学生のころの写真を出されて、どこにいるかを捜すとなると、困惑することもあります。

池田　性格なども、小さいころの面影を残している部分はあったとしても、

やはり、違ってくる。特に、生死におよぶ経験をくぐりぬけると、人の性分とか性質までが、同一人物とは思えないほど一変してしまう場合も少なくはないでしょう。こうした側面からいえば、借金を返そうとしない男の理屈は、筋が通っているようでもある。借金をした自己はすでになく、返済の義務を負うのは借金をした自己である。現在の自分は別人だから、裁判にかけられるのは見当違いだ、と居直ったのだね。

――でも、私たちは、姿、形こそ変化しても、過去の自分と現在の自己が、同一の人間であることを自覚し、また信じています。本気で、一瞬前の自分と、この瞬間の私が、まったく別の人間であると信じている人はいないでしょう。そうしますと、過去と現在の自分の間の数々の相違と変化にもかかわらず、そこに持続し、変化しなかったものが、なにかなければならない。いいかえると、自己同一性を保証するものがなければならない。そこから、田中氏は、一種の「たましい」の不滅を考えなければ、生命の同一性は理解しがたいと結論されるのです。

池田　田中氏のいわれる「たましい」とは、仏法でいう「如是相」と「如是性」に対する「如是体」という考え方と軌を一にするようです。つまり、変化相にとらわれず、変化に即してあらわれる生命の主体的実在ということで、それを見抜かれている点は、注目に値すると思われる。

――さて、ここに、最初にあげました輪廻説との関わり合いが出てくるわけです。少し長いのですが、田中氏の考えを忠実にあらわしたいので、引用してみることにします。

「輪廻転生説では『たましい』の同一性と持続性が考えられるわけであって、ただ犬から人間に生れ変わるときに、『レーテー』（忘却）の水をのまされるので、記憶の上では何のつながりもないように思われるだけだと説明される。赤ん坊のわたしと現在のわたしの間だって、記憶の連続性があるとはいえない。その間の連続性と同一性を保証するものは何なのか。霊魂不滅の説というと現在のわれわれは、これまた真面目に取り上げることを恥とするかも知れない。しかし赤ん坊と現在の自分とをつなぐ何ものかを信ずることは、む

かしの人が『たましい』の不滅を信じた事情と、どれだけの違いがあるのか疑問である」

と述べられています。ここに出てくる「たましい」という言葉を、生命の「我」と置き替えると、私たちの主張ともほぼ一致するのではないでしょうか。

池田　見事な論法です。人間は誕生以前の記憶を持ち合わせていないから、現代の人びとは、私たちの生命は母の胎内で初めて生じたものであると考えがちでしょう。しかし、田中氏の論法を借りると、それは赤ん坊のころと現在の自分の同一性を否定するにも等しいといえる。

少なくとも、小さいころの自分と今の自分が、同じ生命主体であると信ずるならば、自己の生命が、生と死を繰り返しつつ連続していくのだという説は軽軽しく否定したり、また、嘲笑することはできないわけです。

――しかし唯物論者たちは、生命の永続などまったくのナンセンスだと笑うにちがいありません。また、知識人にも、たとえ死後の生命を否定しないまでも、みずからはそれを信じようとはしない人がいるでしょう。信じたくない

のかもしれないのです。

最近、中野好夫氏の随想を読んだのですが、そこには「私自身の願いといえば、できることなら肉体をもった私の、この世での生命が終るとき、霊魂もいっしょに消滅してくれるなら、どんなにうれしいことか、心からそれを願っている」とありました。

池田　自己の消滅を願う人もいれば、逆に、死に臨んでも死にきれない怨念を抱えて生きざるをえない庶民もけっして少なくはない。しかし、個人の願望はそれとして、私たちの生命が朝日に照らされた露のごとく消えていくという、いかなる根拠があるのだろうか。

――そのあとに「といって、むろん、私には、死後の生存を否定する絶対の証拠があるわけではない。多分は私の考える通りに肉体細胞の死の瞬間に、私の霊魂もまたいっさい無に帰し、ひどくサバサバした話になるのだろうと、ひそかに高をくくっているが、さればとて、私の願いがそのまま実現するともかぎらない」と記されているのです。

池田　中野氏ばかりではなく、死後の生命の存続を否定する根拠などというものは、ほとんど見いだしえないのではないかとさえ思われる。現代人は、死とともに生命が消滅することを、自明の理のように思いがちだが、これほど大きな錯覚もないでしょう。この私たちの生命が、無に帰することを前提にして、死の恐怖におびえる人もいるし、また、現世の苦から逃れるために一挙に死を選ぼうとする人もいる。ところが、少し精密に考えると、前提そのものがまったくの幻想だったりする。

さて、生命の消滅を主張する人びとからは、なるほど、各種の理由というか、証拠に似たものが示されています。実にさまざまな主張がなされているが、私なりにまとめてみると、ほぼ、次のようになるのではないかと思う。

一つは、各種の体験にもとづくものです。体験といっても、死そのものを経験するわけではない。死の近くまでいって、死の影をみたと信じている人びとの話とか、手術室で麻酔をかけられたときの状況から、死を類推しようとするのだね。

二番目には、肉体が崩壊し、簡単な化合物とか、元素にまで分解してしまうことから、私たちの生命が断絶したと考えるのです。

第三番目の論拠は、唯物論者が金科玉条の武器として振りまわす理論だが、彼らも、人間生命は、精神と肉体との統合体であると考える。だが、精神の働きといえども、物質の運動、つまり、肉体の活動から生じるのだから――これは、唯物論者の主張だが――、肉体の崩壊は同時に、精神の消滅を引き起こすというのです。

このほかにも、いろいろとあげることもできるだろうが、ここでは、これら主要な論拠を検討してみるにとどめたい。

――死の影をかいまみたと称するのは、絶望の淵をさまよい、九死に一生を得た人とか、海や山で遭難して、ようやく生き返ったような人とか、大手術を苦闘の末に乗り越えた人たちです。これらの人びとの体験は、各人各様ですが、一つだけ実例をあげてみますと、『ビルマの竪琴』の著者でもある竹山道雄氏の「死について」という論題で書かれたものがあります。小学校六年生の

とき、大怪我をして失神し、そのあと、クロロホルムの全身麻酔をかけての大手術が行なわれます。

「鼻と口にマスクをして、その上にクロロホルムを一滴ずつたらしてゆくのだが、つき刺すような嘔吐をもよおすような強い匂いがしみこむ。（中略）命ぜられるままに『一つ――、二つ――』と声をだして唱えていると、頭蓋骨の中が一面に波立って、その中にきしむような音と打つ音とがきこえる。それが高まって、ついにもう頭の中がやぶれるかと思うときに、急に弱くなって『ああ、いま自分は眠ってゆくな』と感じる。そして混沌たる渦の中にひきこまれて、ついに知覚が消えてしまう」

との描写がなされています。こうした意識の喪失をもって、竹山氏は死そのものと判断するのです。

池田　眠りに陥っていくような実感はたしかに死の影をみたといいうるかもしれないだろう。しかし、それを「死」と同じだと結論するのは、いささか早計にすぎないだろうか。私たちの「我」は、意識へとあらわれつつも、それを

含んで広大な無意識の領域をつかさどる生命の主体的実在だからです。生から死へ近づいていったとする体験が出たところで、私も、一つの実例をあげてみることにしよう。

トインビー博士の編さんによる『死について』と題した論文集がある。イギリスの一流の学者が名を連ねる、きわめて意欲的な論文集だが、そのなかに、超心理学者、ロザリンド・ヘイウッド氏の「死に対する態度――夢その他の『肉体離脱』体験にかんがみて」という文章が載せられている。そのなかで一つの体験として、医師であり解剖学の教授でもあった故ゲッデス卿の講演を取り上げて論じられている。

その体験というのは、ゲッデス教授が重病にかかって、脈搏も呼吸もまったく数えられなくなったときのことです。彼は、どのような場合にも意識が朦朧(もうろう)としたことはなかったと念を押してから話を進めている。こんな内容だったと記憶している。――病(やまい)の極限で、突如、意識が分かれていくのに気づいたという。ちょうど、私たちが、種々の夢を見ていて、その夢を見ている自分を、

「ああ、私はいま夢を見ているな」と実感しているもう一人の自己を意識することがある。こわい夢だと、早くさめてほしいと願うのだが、こんな場合にかぎって悪夢は延々と続いていく。夢を見ていることを熟知しながら、喜んだり、苦しんだり、悲しんだりする自分――それを自己意識といえよう。学者たちは、自我の分裂とか、分離とかいっているが、このような状態を思い出しながら、聞いてもらうとわかりやすいでしょう。

教授は、話の都合上、意識を二つの種類に分けている。一つの意識は、肉体にともなう意識で、もう一つの意識は、それを察知し、実感している自己意識です。私たちが、健全な生を営んでいるときには、この二つの意識は融合し、一体となって躍動している。

――でも、胃痛などが襲ってきますと、痛みにともなう意識と、「ああ、私はいま、胃が痛いのだ」と感じている心が分かれることがありますね。

池田　それでも、一般には、この二つの心が、まったく分離してしまうことはないでしょう。ところが、教授の体験によると、肉体にともなう意識が分裂

しはじめるのだね。心臓とか、肝臓とか、大脳とか、こういった各種の臓器や組織そのものに密着した意識が、バラバラになっていくのに気づいたという。この気づくほうの心は、肉体に即した意識の崩壊に気づきながら、そのまま、より大きな生命の流れのなかに融けこんでいくようであった、と教授は述懐している。

こうした体験を「肉体離脱」体験というのだが、それらをふまえて、ヘイウッド氏は、「この体験がひょっとして死は消滅に通ずるのではなく、より広い生命に通ずるのだということを示している可能性があるのだろうか」と言っているのです。謙虚な表現の仕方だが、この学者は、〝より大きな生命〟への流入というか、融合を心の底から信じていたようだね。

――そうした故ゲッデス教授の話を聞きますと、麻酔とか、頭を打って失神したとか、といった意識喪失の経験からのみ、死の事実を想像しては、大きな誤りを犯しかねないことがわかりますね。

池田　ちょうど、ぐっすり眠りこんでいる場合と同様に、意識が、一時的に

消失したように思えるときにも、その意識――つまり、私たちの心――のすべてが無に帰したのではないのです。むしろ、意識が生命の奥へと沈んでいって、宇宙の源流と融けあっていくのだと考えるのが自然ではないだろうか。

――「肉体離脱」体験からしても、先ほど、会長の示された、生命が断絶するとする二番目の根拠も、絶対のものとはいえないことがわかります。

池田　肉体は、終局的には元素にまで崩れ去ってしまうだろう。だが、それをもって、私たちの生命的主体そのものが消滅し、生が断絶するときめつけることはできないでしょう。田中氏が、輪廻説とか、一種の「たましい」の不滅などを持ち出されているのも、このあたりの深い思索にもとづくものであろうと、私には推測されるのです。

――唯物論者たちの最後の論拠には、生命に対する理解の仕方に独特なものがあるようです。つまり、物質の運動――特殊な形での運動かもしれませんが――が、意識を発生させ、精神作用を生むということです。

池田　物質の運動といっても、具体的に精神活動に関わるのは、大脳皮質を

はじめとする脳細胞だが、もし、脳細胞が意識を生みだすとすれば、唯物論を信奉する人びとの主張も、ある程度、うなずけるというものでしょう。肉体的な基盤を失うと同時に、意識もまた消失してしまうと考えられないこともありません。

だが、仏法の色心不二の考え方によれば、脳細胞と精神作用や意識の働きは、密接不可分の関係にあるのだが、それはけっして、脳細胞の働きが意識を生むというのではないのです。たしかに、脳細胞の精密無比な活動なくして、意識の微妙な営みをあらわすことはできない。しかし、それは、脳から意識が発生するからではなくして、意識とか、心の働きが顕在化する肉体の場が脳細胞であると考えたいのです。

――いま、脳と意識の関連性においても、再びベルグソンが見直されてきていると聞きますが――。

池田　真理に肉薄した人の学説は、いかなる反発があっても、また、一時的に人びとの心から離れることがあっても、かならず、時代をこえ、民族をこえ

て、よみがえってくるものです。周知のように、ベルグソンも、唯物論者の主張を理路整然と打ち破っているが、「心と身体」と題する講演からの見事なたとえを取り上げることにしたい。

この生の哲学者は、脳と意識の関係を、洋服かけと洋服の例を引いて説明している。洋服かけといっても、彼がひきあいにだすのは、洋服をかける釘だが、それでは現代感覚に合わないかもしれないので、ハンガーといいかえて述べていくことにしよう。さて、洋服がハンガーにかかっているとしよう。ハンガーが落ちれば、洋服も落ちる。ハンガーが動くと服も揺れる。だが、あたりまえのことだが、ハンガーと洋服は同じものだとはいえないね。だから、ハンガーをどのように詳しく調べても、洋服そのものを知ることはできないでしょう。洋服の大きさとか、生地の種類とか、どんな形をしているかを知ろうとすれば、ハンガーではなく、洋服そのものを調査する必要があるだろうね。

脳細胞と意識の関係もこれと同じで、ハンガーを脳細胞とし、洋服を意識とすると、意識はたしかに脳にかかっている。しかし、脳細胞だけをどのように

調べても、意識の内容まではわからない。また、ハンガーから洋服が生まれたのではないように、脳細胞から意識が発生したのでもないのです。

――でも、ハンガーに釘でもでているとと、洋服に穴があきますね。

池田　だから、細胞が傷つけられると、種々の精神障害をおこしたり、異常をきたすのです。さらには、死によって、脳細胞が分解してしまうと、意識は、その発現の場を失うわけです。しかし、それでも意識と無意識層まで含んだ生命の全体が消滅してしまうのではない。あくまで、顕在化の場がなくなっただけであって、さまざまな心の働きは、生命そのものの内奥に宇宙生命との妙なる共鳴をかなでつつ、脈動していると考えざるをえないわけです。

――以上で、死とともに生命は消失するとする三つの根拠を、ことごとくくつがえしたことになりそうです。しかも、唯物論者がかかげる論点に即して、かえって生命の存続とか、連続性までも立証できたと思います。

池田　ベルグソンも、「心と身体」の講演で、前述したような脳と意識の関係を詳述したのち、心は脳の働きへとあらわれつつもそこからあふれているの

だから「心が、死後も生き残るということは、ありうることとなり、肯定する人ではなくて、今度は否定する人がそれを証明する義務を負うことになる」と結論しているね。

さて、それはともかく、生命がどのような状態で存続するかとなれば、あらゆる高等宗教がゆきついたところの「空」をさぐらなければならないわけですが、少なくとも、本章での話し合いだけからでも、死後の生命の謎を解く鍵は宗教に秘められているという事実だけは、すべての現代人に、声を大にして主張しなければなるまい。たとえ、どのように頑迷な唯物論者に対しても、一歩もひるんだり、惑ったりする必要はない。何故ならば、これだけの生命連続の論拠をかかげた以上は、今度は私たちではなく、唯物論者のほうが生の断絶を立証する義務を負っているのだから——。

生と死〈2〉

不生不滅の法則

――昭和四十六年の夏、『人間は死んだらどうなるか』という本が出て、識者のあいだに反響を巻き起こしました。これは阪大名誉教授の岡部金次郎博士が、長年の蘊蓄をかたむけ、心血をそそいで書きつづけたエッセイ集で、今もかなり広く読まれています。

池田　どちらかといえば、学者らしくない明快な表題ですね（笑い）。人びとが関心をいだかずにはいられないような単刀直入さがあるね。

――朝日新聞の夕刊の一面に「今日の問題」というコラムがあります。そこでも、近年めずらしい、ユニークな書として紹介されていました。実は私も、コラムの内容に啓発されて読んだ一人です。

池田　うむ。私も読んだが、すがすがしい文章で、しかも、いたるところに、ダイヤモンドの光沢にも比すべき独創豊かな発想がちりばめられていたのを、鮮明に心にとどめている。

――岡部博士の論文は、昭和四十八年六月号の『大白蓮華』にも「人間における生と死」という文が載せられていましたね。この論文も、興味深く読んだのですが、その後半の部分に、仏教に説く「三世の生命」に触れたところがあります。驚いたことに――考えようによっては、あたりまえのことかもしれませんが――博士の生死観と仏教の所説には、非常に多くの共通点があるのです。

池田　岡部博士は、科学者だから、とうぜん、思索の出発点には、現代科学の考え方を踏まえておられる。たしか博士は、論文のなかで、推理科学という言葉を使われていたが、物理学の精髄から出発した、生死についての推理の歩みが、仏教とほとんど一致するまでに合流するにいたったのでしょうね。

――非常に重要な幾つかの点で、博士の推理と仏法の哲理が、きわめて共

通していると思われます。生と死に直接関連する問題では、まず、死によって生命はけっして滅びないという主張があげられています。

池田　生命が死をこえて存続するということは、ほとんどすべての宗教に共通する主張です。この同じ信念が、本来なら否定的と思われる物理学者の思索の結論となっているというところに、新鮮な意味を感ぜずにはいられない。

――博士は主張の根拠として、これは物理学をはじめとする現代科学の、もっとも基本的な原理の一つですが、エネルギーの不生不滅の法則を提示しています。つまり、物理の世界では、電気のエネルギーが熱に変わったり、位置のエネルギーが運動エネルギーに交換したりすることは、常にみられます。でも、無から突如としてエネルギーが生じることもありませんし、いま存在するエネルギーが忽然と消えることもありません。ただ、姿を変えるにすぎないわけです。これが、エネルギーの不生不滅の法則ですね。

――これは、いってみれば〝鉄則〟といってもよい。もし、この鉄則が破れると、おもしろい事件が起きることになります。たとえば、電熱器やテレビ

や電気洗濯機などを、どれだけ多く使用しても、電気代はいつもゼロということもありえます。なにもないところから電気のエネルギーが無尽蔵に発生するのですから、電力会社も料金の取り立てに困り果てるにちがいありません（笑い）。こういう珍事が起きてくれると、私たちもずいぶん助かるのですが、そういうことは絶対に起こりえない。そのかわり、魚の片面が焼けたところで電気やガスのエネルギーがストライキを起こして突然消え去ってしまうこともない。もちろん、そんなことが起こったら文句を言っていく相手がありません。なにしろ相手にすべきものは、電力会社もガス会社もままならぬ〝無〟なのですから——。

池田　ともかく、物質の世界において、無から有、有から無への転換がありえないのは、大宇宙に実在する厳然たる法則の一つとして、現代科学が立証ずみの真理だね。

——物理的なエネルギーは、不生不滅です。とすれば、この法則が私たちの生命にもあてはまらないであろうか、と岡部博士は推理するのです。生命と

いえども一個の存在物である以上、これにも宇宙の法則の一つである不生不滅という原理を適用してみることは、無理がないどころか、むしろ当然のように思われるのです。

池田　きわめて常識的で、しかも妥当な推理のはこび方だと思う。生命的存在も、それをエネルギーの脈動としてとらえれば、無生の物質に物理的エネルギーがみなぎるように、生命ある実在には生命エネルギーの〝血潮〟が流れていよう。そして、私たちの生命体が色心兼備の当体である以上、生命エネルギーを構成するのは、身体的エネルギーと心的エネルギーの二者であると考えられる。こうしたエネルギーの脈動にも不生不滅の鉄則が適用されるのではないか、というわけだね。

――ここまでですと、私たちでも、少し思索すれば行き着けるのではないかという気がしないでもないのですが、その後の展開が非常に興味深いですね。博士は、魂の核という言葉を使っているのですが、これは、前章で話題にのぼりました田中美知太郎氏の〝たましい〟と同じような概念と考えられます。

さて、博士によれば、私たちの生は魂の核が活性状態にあるときであり、死とはそれが非活性状態になったときであるにすぎないというのです。活性状態という言葉は、物理用語からの転用でしょうが、具体的な生命の働き――つまり、手や足を動かしたり、頭を働かせたり、おいしいものを食べたり、恋をしたりといった、生きていることのあかしのような活動ですが――それらを発現している状態をさします。今度は、死とともに、こうした働きが潜伏してしまう。潜伏するだけですから、けっしてなくなったのではないわけです。表面からみると無に帰したように思われても、生を営む能力はちゃんとそなわっている。この状態を非活性状態と名づけ、それが死であるというのです。

池田　私たちのいままで使ってきた表現だと、活性状態というのは、生命活動の顕現であり顕在化である。そして、すべての生の働きの冥伏した状態は非活性ということになるだろう。さて、一度は潜伏した生命活動も、非活性になるだけで、なくなるのではないとすると、再び、活性状態に戻ると考えられそうだね。

――ええ。魂の核が、条件に応じて活性状態になったり非活性状態になったりして、際限なく繰り返すというのです。

池田　ここまでくると、仏法に明かされる生死輪廻の法に近いようです。博士が三世の生命に着目されるのも、深い思索の当然の結果であるといえるのではなかろうか。

生と死が連続することの一つの科学的な推理による仮説が出たところで、きわめてわかりやすい例を考えてみよう。これは譬喩的にとってもらいたいのだが、私たちはいま、窓の外をぬらす雨が地上に落ちて大地に吸い込まれ、あるいは地下水となり、あるいはせせらぎをつくって川に流れ込み、やがては海へとそそがれていくプロセスを、自分の目で確かめることができる。途中で見失うことがあるかもしれないが、ともかく、雨としての水も、小川の水も、すべて同じ液体であり、流れゆく姿を見ることができる。ところが、その水が蒸発して水蒸気になると、液体としての姿は失われる。現代の人びとは、科学の知識があるから、気化して姿を変えても、水の本性に変わりはないことを理解し

ている。だから海とか大地から蒸発して天空に雲となって浮かんでも、それは水の変化相の一つだと知っている。その雲が雨となり再び大地に帰ってくる。水の場合、液体としての水も、気化した水蒸気も、ともにその本性は化学式でいえば H_2O であり、二つの変化相であることを理解しえて初めて、空と海と大地を結ぶ、壮大な循環を納得することができるのです。

この例からいって、液体としての水の姿を生の姿、水蒸気の相を死の相としてみよう。どちらも H_2O です。気化したからといって、H_2O が分離して H が二つと O とになってしまうようなことはほとんどない。水蒸気も H_2O です。それでありながら、液体と気体の区別はある。私たちの生命も、その本性をたもったままで、生と死の二つの相を示すのです。しかも、水の循環のように、生と死を繰り返しつづけるのだというふうに考えられないだろうか。

――私たちにわかりやすい、それでありながら、生死の本質をあらわにした譬喩ですね。

池田　ところで、岡部氏の思考に戻るが、博士は、その物理学の学識に、独

創的な推理を加えて、過去、現在、未来にわたって有為転変をなしゆく生命の姿にまで、考察を加えている。

一方、いまを去ること三千年の昔、釈尊は、宇宙と生命を律するすべての法、あらゆる生命存在の生と死の実相を、推理ではなく宗教的な直観智で、ストレートに照らしだしたのです。その仏の英知が浮かび上がらせた生死流転の姿とは、いったいどのようなものであったか――この点に話題を進めていくことにしてはどうだろうか。

「方便現涅槃」とは

――釈迦が悟りを求めて出家し、修行の道に入った動機というのは「四門遊観」(注4)として有名ですが、人生の生、老、病、死を見つめたところにあったようです。このエピソードは、釈迦が人生の根源的な苦悩に焦点を当て、それをどう解決するか――そこに出家の根本動機があったことをうかがわせますが、私は特にそのなかでも、死の解決のために釈迦は悟りを求めたのではないかと思っています。

池田　それは間違いないでしょう。「老」というのは、一生のうちの衰退期にあたる。老いることによって、顔形に張りを失って醜くなったり、肉体的にも衰えて苦痛を感じるようになる。しかし、それらは「老」の根本的な苦痛で

はない。むしろ従属的なものです。人が「老」を恐れ、苦しむのは、それが死への過程として実感されるからではないだろうか。「病」も同じだと思う。病気には肉体的苦痛をともなう。それが苦であることにはちがいないが、より根本的には、しばしば病は死の直接原因となるからこそ、大きな悩みとして受け取られているのです。

後に、人生の苦として「四苦」とか「八苦」(注5)という概念が用いられるようになるが、「生」「老」「病」「死」の「四苦」は、最後の「死」の苦にすべて集約されるといえるね。もっとも、この「四苦」に「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五盛陰苦」が加わった「八苦」のほうは、日常生活におけるさまざまな不幸の実感が加わっていてニュアンスは異なるが、大なり小なり、その淵源として、人間、また森羅万象は無常なものであり、いつかは死ななければならないという死苦がかかわっていることはたしかなようだ。

――仏教には、なにか逃避的、厭世的な宗教として受け取られるようなムードがあるのも、そうしたところに遠因があるのかもしれませんね、釈迦の出

発が、そもそも死への直視にあったのですから……。

池田　そう考えることもできるね。しかし、このことは実は、大変な勇気ある行為なのです。生あるものはすべて、本能的に死を恐れる。とくに意識の発達した人間は、自分が生という状態をやめるとき、そのかなたにいったいどんな世界があるのかと考えることに、いいようのない恐怖を感じる。そして、不死ということに強い憧憬の念をいだかずにいられない。古来、富と権力を手に入れた王侯が、最後に求めたのは不死の薬であり、庶民もまた、そうした薬を手に入れたり、あるいはそういった理想郷に行けることを夢見たりしたのも、このためです。

――現在、アメリカなどでは、不治の病で倒れた人が、みずからを冷凍にして長期間保存し、その病気の治療法と、冷凍人間を蘇生させる方法が発見されるまで待つなどという人もいるそうです。これなども、一種の不死への挑戦ともいえますね。

池田　生への執着がいかに強いか――考えさせられる話ですね。ともかく、

人間、いかに寿命を延ばしたといっても、それは借金の返済を延ばしているようなもので、いつかは清算しなければならないのは事実です。そのことがいやおうなく分かったとき、人は次に、たとえ肉体は滅んでも魂は不滅ではないかとか、別の世界へ行くことができるのではないかという考えをいだこうとする。多くの宗教が来世の実在を説いているのも、人間のこの願望を反映した面もあるようだね。

仏教のなかにも西方十万億土という、死後の別世界を設けているものがあるが、これはあくまでも人々を誘引するための経説であって、釈迦の真意は、これらすべての執着をうちやぶり、死を直視し、その本質を見究めるところにあったと私はみたい。釈迦は、死にたくない、死を受け入れたくない、死を見つめたくないという、人間本来の本能のようなものを乗り越えて、偉大なる勇気をもって、人生の苦の相、真実相を受け入れた。そしてそのうえで、生と死の本質に対し、思索に思索を重ねたのだろう。

仏法は永遠の生命を説くけれども、それはけっして、安易に民衆の不死への

願望を受け入れた理論ではない。諸行無常(注6)や、苦集滅道(注7)という教えは、人間が避けたがる人生の苦の相を、そのまま如実にさらけだして見せているのだと思う。空想的仮説で真実を糊塗(こと)するのではなく、冷徹な眼で真実を凝視した。生あるものはかならず死ぬ。この大前提をそのまま認めたのだね。ではなぜ死ぬのか。死と生とはまったくかけ離れた存在なのか。それとも密接な関係にあるのか。生命はどのような流れがあるのか。勇気と忍耐と冷静さをもって、釈迦はみずからの生命に光りを当て、その真実相を悟ろうとした。そうして得た悟りが、永遠の生命だったのです。

――釈迦がいかなる悟りを得たかについて述べた言葉は、会長の『私の釈尊観』にも引用されています。

「かくしてわれは種々の過去の生涯を想い起こした。すなわち『一つの生涯、二つの生涯、三つの生涯、四つの生涯、五つの生涯、十の生涯、二十の生涯、三十の生涯、四十の生涯、五十の生涯、百の生涯、千の生涯、百千の生涯を、幾多の宇宙成立期、幾多の宇宙破壊期、宇宙成立破壊期を。われはそこにおい

て、これこれの名であり、これこれの姓であり、これこれの種姓であり、これこれの食をとり、これこれの苦楽を感受し、これこれの死にかたをした。そこで死んで、かしこに生まれた』と」――この経文によると、釈迦が悟ったものは、明らかに、永遠に常住するこの生命の実相であったといえます。

池田　生とか死とか、一方を絶対的なものと考えてそれに執着したり、一方を無視して避けようとしたりするのは誤った考えである。生と死を、人間生命は本然のうちにもっている。生と死を交互に繰り返しながら、人間生命は雄大なうねりをもって永遠に流れている――このことを、みずからの生命の奔流のなかに釈迦はみた。それはもはや、生に執着するがゆえに打ち立てられた霊魂不滅のごとき思想ではなく、厳然たる、一個の生命を貫く因果の法則を見きわめたうえでの永遠の生命観である。この永遠の生命観に立って、死というものを意義づけるならば、死はむしろ生のためのものであるということになる。あたかも、眠りが次の目覚めのための休息であるようなものです。

――『法華経』に説かれる「方便現涅槃」の考え方ですね。

池田　そうです。死は生のための方便である。生をより輝かせるためのものであり、生こそ生命の活動の本態であるという考えですね。もちろん、方便といっても、「ウソも方便」というのはウソであって（笑い）、あくまでも真実であることに変わりはない。死を無視しようということでもないのです。ただ、生と死とは相対立した絶対的なものではなく、死はむしろ、生の従属物的な存在として位置づけられるというのが「方便現涅槃」ということになるでしょうね。

――この「方便現涅槃」という原理のうえに立てば、人生に対する姿勢はかえって、徹底した「生の謳歌」になりますね。しかもそれは、死を避け、それに目をそむけながら生を貪ろうとするのではなく、死の本質を知り、しかもそのうえで、生をうたいあげていく。つまり「衆生所遊楽」――人びとが人生を楽しんでいくようになる。

池田　そう。したがって、仏教の本質は、いたずらな悲観主義、厭世観でもなければ、根拠のない楽天主義でもない。人生の苦を直視し、そこから逃避す

るのでなく、むしろ徹底的に取り組んだ末に到達した、生の歓喜の思想だといってもよい。苦しみから逃避して、真実の喜びはない。人が目をそむけ、逃避しようとしている苦しみを如実に知見し、それに勇敢に挑戦し乗り越えてこそ初めて、金剛不壊の、尽きることなき歓喜が込み上げてくるのです。このことはまた、虚偽、虚構のうえに立った喜びは永続するものではなく、苦しくとも、真実を直視するところから、悟りは生まれることも教えている。

――ところで、この「方便現涅槃」という原理は、釈迦の画期的な悟達ですが、それでもなお、生と死とを完璧に説き尽くした原理とはいえないと思います。生き方を教えるうえから説いたような気がするのです。方便現涅槃自体が方便であるような感じさえします（笑い）。

池田　そう。日蓮大聖人の生死のとらえ方は、この釈迦の説き方より一歩深く、生死不二と断言されている。『御義口伝』には「生死を見て厭離（えんり）するを迷と云い始覚と云うなりさて本有の生死と知見するを悟と云い本覚と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時本有の生死本有の退出と開覚する

なり、又云く無も有も生も死も若退(にゃくたい)も若出も在世も滅後も悉く本有常住の振舞なり」とある。

死は、生のための方便でもなければ、仮りのものでもない。生も死もともに、本来本有(ほんぬ)のものであり、「一心の妙用」なのです。いちおう釈迦の悟達も、死はけっして忌避の対象でもなければ、いたずらに恐怖におびえるべきものではないことを示した意義はある。しかし、日蓮大聖人のこの生死の把握の仕方こそ、生命の本来の流転の姿をより明確にあらわしているものなのです。私たちはようやく、この大聖人の仏法の生死観に入る段階へきたようだ。

「本有の生死」について

――私、不思議に思うのですが、釈迦仏法では、なぜ死を「方便」であり、仮りのものとして説いているのでしょうか。

池田　それには数々の理由があると思う。たとえば、釈迦は、自分の教え自体が、死の準備のためにあるのではなく、豊かにして充実した生を享受することに本意があると力説したかったのかもしれない。だが、ここでは、本筋にそって、生命探索の角度から述べてみよう。

先ほども詳述したように、釈迦の悟達は、私たちの生命が繰り広げる生と死のドラマを、あたかも太陽の光のごとく照らし出したと推測される。そこには、誕生後まもなく生の活動を断たれる生命体もあろうし、また、長寿を全うし、

安らかな眠りに入っていく生命体もある。さらに、今度は、死を中心にしてみると、ひとたび生から死にいたった生命的存在のなかには、瞬時にして、再び生の胎動を始めるものもある。それに対して、永遠の眠りというわけではないが、かぎりない時が移っても、死の眠りから容易にさめようとしないものもあるでしょう。

――その眠りが安らぎだといいのですが、ちょうど悪夢にうなされるような、地獄の責め苦の連続であったとすれば、これほど苦しい、いやなことはありませんね。

池田　それでも、悠久の時の流れのうちには、いつかは生の状態に変わるときがくるものです。ともかく、個々の生命体の生死変転の姿のみに焦点を合わせるかぎりは、やはり、死は生のエネルギーをたくわえるための手段であり、いわばある意味での休息のときと映るのではないだろうか。

こうした生と死の連続を示唆するための一つの譬喩として、覚醒と睡眠のリズムが引き合いに出される。この場合、覚醒は生で睡眠が死ということになる

のは、いうまでもない。われわれは、疲労を、数時間の眠りによって、色心ともに活力を生き生きとよみがえらせることができる。しかもここで大事なことは、眠りの数時間をはさんで、その前後の自己が、かならず同一人物であって変わることはないという点です。

――熟睡しますと、意識は完全に中断します。にもかかわらず、眠るまえの自分と目覚めたときの自己とは同一である。これは、自明の理ですね。もし、意識が途切れているあいだに、他人の自我と入れ替わっていたなどということが起きれば、安心して眠ることもできないでしょう。朝起きて、目をこすりながら、昨夜の自分といまの自分は、はたして同じだろうかとか、朝食をつくっている女性は、はたして昨夜の妻と同一人物だろうか(笑い)などと確かめてみなければならないとしたら、想像しただけでもゾッとしますね。

池田　ところで私たちは、だれでも、ほぼ二十四時間の周期で、覚醒と睡眠のリズムを繰り返している。これと同じように生命も、生から死、そして死から生へとよみがえる、このリズムをくり返しているということが、推し測れる

でしょう。むろん、この場合も、死をはさんでの前後の生を享受するのは、同一の生命主体なのです。そして、死の役割りを、目覚めに対する眠りの役目と同じように考えるとするならば、「死は生の方便」と説かざるをえないのではなかろうか。

――よくわかりました。ところで、最近の学説によりますと、たしかに、眠ることによって疲労もとれますし、バイタリティも回復します。これは、まぎれもない事実ではある。しかし、眠りはただ覚醒のためだけにあるのではない。眠りには、もっと積極的な役割りがあるというのです。

私たちは、眠っているとき、さまざまな夢を見ますが、精神分析の立ち場の人たちによると、その夢は、いままで満たされなかった欲求とか願望のあらわれだというのです。たとえば、よくいわれる例にある人に怒りとかうらみの感情をいだいていたとします。でも、現実社会では、このうらみをはらすことができない。夢が代用品としての役割りをして、夢のなかで、なんらかの方法でうらみをはらしたとします。すると、目覚めがすこぶるさわやかになる。心の

なかの〝しこり〟がすっととれて、うらみの心などきれいさっぱりと忘れてしまったような顔をして、当の相手とつきあっている。心が、夢を見ることによって浄化されるというのです。

それから、目覚めの状態よりも、眠りの状態とか、意識がぼんやりしている状態のほうが、よい考えが浮かんできて、いままで精魂をかたむけても解けなかったような課題に、一種の直観がひらめくこともあります。このあたりの事情を、鳥取大学の大熊輝雄教授は、次のように説明しています。「夢というものは、素直な自我のあらわれです。願望にしても、悩みごとにしても、普段は押えられている意識が、正直に出てくるわけです。ですから、ある場合には、覚醒時よりも能率のよい思考や創造ができることもあります」というのです。

このような事例から考えますと、覚醒が「主」で、睡眠が「従」であるというのではなく、両者はともに、欠くことのできない生命の基本活動であるとさえいえるのではないでしょうか。

池田　なるほど。だが、科学者たちは、どうして眠りと覚醒とがともに、生

命活動のうえで同等の地位を占めていると気づいたのだろうか。

――直接的には、逆説睡眠の研究からですが、最初は、眠りとか目覚めとかの表層的な現象にとらわれていたのが、こういった研究を通して、それだけでは説明しきれないことが、次々と明かされるようになったわけです。このあとは、権威者の言葉を引き合いに出したほうが説得力があると思いますので、徳島大学の松本淳治教授の言葉を引用してみます。

「こうした覚醒と睡眠は、意識の連続的な流れの変化としてとらえられます。この意識状態の変化のうえに、脳のさまざまな他の働きと結びついた人間としての精神活動、生命活動が成り立っているわけです」とあります。この文章における意識の流れとは、当然、無意識をも含んでいます。

池田　要するに、眠りも、覚醒も、同じ一つの連続した生命の流れの、異なった二つの働きであり、様相であるといえるでしょう。

さて、本筋に戻って、生と死の問題だが、個々の生命体の繰り広げる生死のドラマを凝視しつつも、さらに深く、宇宙生命の奥底まで悟達の光りで照らし

出した大哲学が、日蓮大聖人の仏法だったといえるのではないか。

――つまり、釈迦の知恵は、生と死の様相を映し出すことができたにしても、その底流に厳然と実在する〝不滅の当体〟を明確に提示することはしなかった。それに対し――。

池田　もちろん、釈迦も、その奥底にある実在を予知し、それを覚知することが仏法の極説であることは教えた。だが、少なくとも言葉のうえでは、その実在を明確に示すことはなかった。根源の実在としての生命の流れは、潮のうねりのように、万物の奥底からわきおこり、生と死のリズムをかなでながら、無限の過去から悠久の未来を指して進んでいく。私たちの生命の「我」も、瞬間瞬間の変化をあらわしながらも、大自然の流れに竿さして、永久流動の旅を続けていくのです。あるときは生きることの喜びをかみしめ、ある場合は死の安らぎに身をいこわせる。生の歓喜も死の休息も――といっても、生命主体によっては、生の悩みも死の苦しみもと表現せざるをえないこともあるが――ともかく、生死ともに、永劫の歴史を刻む生命流の、異なった二つの働きであり、

様相であるということになるのです。

しかも、すべての個々の生命の流れは、宇宙本源の実在に融合しており、あらゆる存在者をはぐくむ大潮流と、一体にして不二の関係にある。この万物の脈動を奏でる宇宙生命の潮流を仏法は「妙法」と説いたのです。そして、すべての存在者の奥底には妙法の慈悲の力が流れ込んでいるということができましょう。日蓮大聖人の仏法では、生と死とを、本有常住の生命の「我」が現出する変化相であり、「本有の生」であり、「本有の死」であると定義するのです。

――先ほどの『御義口伝』の文がそれを述べているわけですね。大聖人の仏法の生死観が、徐々に全体像をあらわしてきたようです。そこで日蓮大聖人の『三世諸仏総勘文教相廃立』（略して『総勘文抄』ともいう）の次の御文から、さらに討議を進めていきたいと思います。

「生と死と二つの理は生死の夢の理なり妄想なり顚倒なり本覚の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや、劫火にも焼けず水災にも朽ちず剣刀にも切られず弓箭

にも射られず芥子の中に入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に満つれども虚空も広からず心法も狭からず」

とあります。この御文も、さまざまな論点から考察することができますが、生と死という問題に角度を限定して考えてみたいと思います。ところで、ここに「心法」とあるのは、私たちの生命の本質をさしていわれているととってよいでしょうか。

池田　「心法」とは、いわゆる非情の無生物や草木も含めて、すべての生き物の奥底にあってその存在を支える、宇宙根源の当体を意味しているでしょう。したがって、生といい、死といっても、万物の確たる実体として常住する「妙法」の本然的な営みの二つの相にほかならないのです。

――いまの説明で、本有とみる生死のあり方が明確にされたと思います。つまり「心法」としての宇宙生命が永遠不滅の実在であるがゆえに、それが流入し連動する私たちの生命自体もまた、生死ともに「本有」であり、「常住」であると――。

池田　そのとおりだね。だが、「本有」と「常住」の意味を、もう少し分析しておこう。「本有」とは、もともと有るということで、けっして、なにかによって作られたものではないとの意味合いを含んでいる。

――神による創造説などは、この観点からすると、完全に否定されますね。

池田　地球上に生命と名のつくものが発生したのは、ほぼ三十億年ぐらい以前といわれ、人類の誕生は、百万年とも二百五十万年とも推定されている。だが、それらの時をもって、初めて生命が誕生したと考えるのも、まだ、現象にとらわれた浅い認識にすぎない。また、人類の出現をもって、はじめて人間生命の「我」が形成されたと考えるのも正しくない。まあ、ここのところは、次章以後のディスカッションにゆだねるとしよう。

次に、「常住」ということだが、すべての生命主体は、この宇宙のなかにあって、常に本然的なリズムをかなでつつ、生と死の〝生命劇〟を演じているのであって、消えてなくなるのでもなければ、どこかへ行ってしまうということもない、との意味でしょう。

――そうしますと、生死の連鎖が途切れるということは、けっしてありえないわけですね。

池田　生の終わりに死がおとずれ、その死が新たなる生へと引き継がれていく。生死は輪廻し、生命の旅路に到着すべき終わりはない。このように、本有常住だから、人間の「我」においては、卵子の受精をもって一個の生命が発生し、死はその消滅であると考えるのも、死を永遠の眠りとして、その領域にいたった生命個体が再び生を得ることはないと想像するのも、あるいはまた、この宇宙の脈動の外に、「黄泉（よみ）の国」を憶測するのも、すべては妄想であり夢のようなものであるといいうるのです。

――具体的な問題になりますが、たとえば、私が生きることに疲れ果てて、その悩みから抜け出るために、自殺という手段に訴えたとします。あるいは、殺伐たる世の中ですから、推理小説なみに〝殺し屋〟をやとって、自分自身を殺害したとします。そこまでいかなくても、安楽死を依頼することもできるかもしれません。こういった場合、死は苦しみからの救いにはなりえないのでし

ようか。

池田　『総勘文抄』にも「劫火にも焼けず水災にも朽ちず剣刀にも切られず弓箭にも射られず」と書かれています。ここのところは〝心法〟の性質を解明された部分だが、私たちの生命そのものは、この世界を焼き尽くす劫火をもってしても、日本列島を沈没させるに十分な濁流が押し寄せても、刀でナマスのように切り刻んでも、数百本の矢を射込んでも、断じて消滅させることはできない、とも拝せるでしょう。いかなる物理的手段をもってしても、根源なるものを壊すことは望みえないのです。ありとあらゆる生命は、「本有」であるがゆえに〝不生〟であり、「常住」であるがゆえに〝不滅〟なのです。岡部博士の表現を借りるならば、物理的エネルギーとか、身体エネルギーとか、心的エネルギーとかの、すべての活動力の源泉をなす宇宙生命のエネルギーそのものが、不生不滅の鉄則に貫かれているということです。

このように人間生命の「我」と、そこにみなぎる生命エネルギーが、不生であり、不滅であり、不壊であるとすれば、その生命がうけなければならない苦

は、死によって終わるものではないといわなければならない。かえって、死は、楽と喜びの扉ではなく、地獄の門を押し開くことにもなりかねない場合もあることを記憶にとどめておく必要があるのです。

――そこで、もう一つだけ疑問を解いておきたいのですが、『総勘文抄』の引用した最後の部分に「芥子の中に入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に満つれども虚空も広からず心法も狭からず」とあります。つまり、生命の本質は、芥子粒のごとき極小のものの中に入れても、芥子が広がったり心法が縮まったりするようなことはない。逆に、虚空に遍満させても、虚空が広過ぎるということもなければ、心法が狭過ぎるということもない――こういった解釈になりますが、当然、こうした〝心法〟の特質、存在のあり方は〝空〟の概念をもって考えなければなりません。

むろん〝心法〟は、空間的な概念だけではとらえきれない実在であり、時空観をも超越した妙なる実体であるとの意味でしょうが、この文章を拝しますと、その本質は時空をこえたものでありながら、時間空間の現象世界の領域へと吹

き出してくるのだという仰せのように思われます。ともすれば、私たちは、宇宙の源流といい、生命の内奥といい、それらを〝空〟としてとらえるとき、きわめて静寂な、深い海の底のような感覚で受け止めがちですが、そうではなくて〝空〟としての実在も、生命エネルギーの動きに満ちている――こういう実感をもつことが、真実に近いのではないかと思うのですが――。

池田　人はよく死の静けさと表現するが、より正確には、その死もまた、生と同じく無限の変化に富んだものと考えるべきでしょう。なぜならば、私たちの生を支え、色心を維持し、はぐくみゆく根源なるものは、同時に死の営みをも支えているからです。

――いま「死の営み」という言葉を使われましたが、そうしますと、死は休息であり、苦も楽もなにもない静けさそのものと考えるのは、錯覚であるということになりますね。

池田　私たちの日常生活は、数奇な運命の糸がからみあっているものです。これを〝生の営み〟と表現すれば、死にも独自の営みがあり、もし譬喩的な表

現を許してもらえば、死せるものとしての生活があるのではなかろうか。むろん、安らかな死をエンジョイしている主体も少なくはない。だが、ちょうど、夢にも快いさわやかな性質のものもあれば、悪夢にうなされつづけて、たっぷりと眠りの恐怖を味わわされることもあるのと同じです。恐怖、不安、悲惨、そして、魂の中心部まで凍りつくようなおののきが、これでもか、これでもかと、執念深く追いかけてくるような死の営みも、ありうると考えるべきです。

私たちの周囲には、各種の電波が流れている。世界中の国々からの、千変万化の種々相を示す電波が、あたかも虚空にとけこんだように流れきて、流れ去る。それらの電波には、聞く人の心をなごませる名曲が託されていることもある。あるいはジャズをかなでるそれや、魂のふるさとへと人の心を誘う民謡のこともある。爆笑を巻き起こすコメディアンのジョークがのっている電波もあるし、陰々としたうらみ声を響かせる波長も存在するであろう。だが、これらの電波は、互いに排除することもなければ、重なり合うこともない。名曲の背中にジャズがのっかり、そのうえにうらみ声がしがみついていたなどというこ

とはない。両腕に民謡とジョークを抱えているとなれば、まるで怪談だね。

――たしかに、さまざまな波長の電波が空間にとけいって、それを私たちの肉眼では見いだすことはできません。

池田　しかし、受信機をセットしたり、テレビのチャンネルを回すと、あざやかな映像が映し出され、言葉や音楽が聞く人の耳をうつ。受信装置をセットしなければ、それは目に見ることも、耳で聞くこともできないが、電波が実在していることは間違いない。

この実例を参考にしてもらえばわかりやすいと思うのだが、たとえ死の状態を示す生命といえども、苦や楽や悲しみ、喜びを感じつつ、そこに脈動していることは疑いない。つまり、悩み苦しむ「我」もあれば、歓喜のリズムのままに流動する「我」もある。この世だけではあきたらぬとみえて、死の領域に入ってまでも、貪欲の炎に焼き尽くされるものもいるでしょう。こうした、万物の基底部をなす〝心法〟に支えられつつも、生とはまた異なったあり方での死の営みを、「本有の死」というのではなかろうか。

繰り返すようだが、私たちの生命は、生と死のいずれの相をあらわす場合にも、宇宙生命にどっしりと根をおろしている。地獄の生の奥深く、仏界の生命が息づくように、地獄の死の底流にも「妙法」のエネルギーがうずまいている。そしてまた、「妙法」に支えられながらも、三悪道を脱しきれない生の営みがあるように、宇宙源流の活力をくみとれず苦界に沈む死の主体も、厳として存在する。このような実相を、厳父の慈悲をたたえた仏の直観智は、あざやかに照らし出しているのです。それはまさしく、生きとし生けるものの生命淵源への仏の洞察智の照射であり、死せる営みへの覚者の差し伸べる救済の手ではなかったろうか。

生者には生けるものとしての営みがあり、死には死のあり方があると、私は言った。生に「本有の生」があれば、死にも「本有の死」があった。生者に差し伸べられた仏の手は、そのまま死せる当体への救いになりうるのであろうか。それとも、智者の心には、「本有の死」に特有な、苦悩を解脱する手段が用意されているのであろうか。私たちの生命論も、永劫に流動する生死の輪廻に立

ち至った以上は、「本有の生」と「本有の死」のあり方の相違と共通の分野を、さらに深く、そして詳細に考察してみなければならないようだ。

宇宙と生命

宇宙に生命は存在するか

池田　私たちのこの対話も、永遠にくり返される生死の輪廻、「本有の生死」という問題にまで立ち至ったわけだが、そうなると、当然これは、単に地球という一個の天体の範囲では論究しつくせなくなってくる。地球はまだ数十億年の歴史しかもたない星だし、未来も永遠に存在することはありえない。爆発する太陽によって呑み尽くされるか、内部から崩壊するか、あるいはまったく他の要因によるかは予測できないけれども、時間的に有限の存在であることは明らかだ。したがって、この地球上での生存に限った論究では、いくら生命は永遠につづいていくといってもほんとうの永遠論にはならない。

そこで本章では少し話題を広げて、この広い宇宙空間に生命をもった存在が

どれほどの範囲で認められるか、また実在は確認できないにしても、その可能性がどの程度あるのか、さらに、地球上において生命が発生したのはどういう推移によるのか――こういったことを考察しておこうと思う。そうでなければ「永遠の生命」といっても、裏付けも何もない抽象論になってしまうからです。

――この広大な宇宙空間に、地球のほかにも生命が存在するのか、それとも地球だけにしかないのか。このことは古くから論争の焦点になってきました。自然科学の発達、とくに天文学の進歩によって、地球や、それが属している太陽系、太陽系の属する銀河系宇宙が、大宇宙のどこにでもあるような普通の天体であることがわかって、他の天体にも生物が存在しうるという議論が盛んに出てきました。

生命を構成する有機物質――これは従来、無機物質からは生成されないと考えられていたのですが、それも実験室内で簡単なものなら作り出せるようになった。そうなると、生命の誕生ということも、宇宙のどこででも起こり得るのではないかということも考えられるわけです。一方、やはり、生命はそんなに

広範囲には存在しない、じつは地球にしか存在しないのではないか、という考えも、有力に残っています。このことは後に論点となってきますが、ひとまず、他の天体に生物が存在する可能性があるのかどうか、またあるとすれば、どのような生物と考えられるか――この問題に入ってみたいと思います。

――そのことで、非常に重要な報告が最近なされました。それはアメリカのポナンペルマ博士らが発表したものですが、核酸の構成要素の一つであるピリミジン類(注8)を隕石のなかから発見したというのです。この核酸というのは遺伝をつかさどる働きをもっていて、生命を形作る重要な部分品といってよいものです。もちろん隕石のなかから発見したといっても、隕石が地球に落ちてから入り込んだものだとすれば意味がない。ところが発見されたピリミジン類は実験室内では作りにくい上、地球上の生物が持っている種類のピリミジン類に、これと同じものはまったく発見されなかったところから、これは地球以外のどこかに存在したことが、ほぼ決定的になったわけです。

ところで、生命を作り出す要素として、核酸ともう一つ、蛋白質があります。

この二つがそろえば生命の発生する素地はできたといってもよいのですが、この蛋白質の主構成要素であるアミノ酸が、これも隕石のなかからポナンペルマ博士らによって発見されています。四年前のことです。しかもこのアミノ酸も、光学的性質からいって、地球上の生物にはほとんどない種類のものであることから、これも隕石にもともとくっついていたものであると結論しています。核酸と蛋白質の原材料がそろったことによって、これで少なくとも生命を生み出す素地は、地球以外の天体にも現実にあるということがいえるわけです。

池田　興味深い報告だね。もちろん、それをもって簡単に生命が宇宙のどこにでもあると結論するのは早過ぎる。たしかに、地球に飛び込んできた隕石のなかから発見されたということは、かなり広範囲に生命の原材料のようなものがそろっていると考えることはできるでしょう。地球に飛び込んでくる隕石は、宇宙空間に存在する、そうした物体の数に比しても、きわめて限られているし、そのなかにさえすでに核酸やアミノ酸が発見されるのだから――と考えれば、そう解釈できる。しかしそれが太陽系に限ったことなのか、それとも太陽系以

外の世界にもみられるのかという問題もある。太陽系のなかではなにかの拍子で核酸やアミノ酸ができ、そのうち地球では都合よく生命体にまで育った。他の惑星などでは条件が悪くて地球のようにはいかなかった。その残骸が隕石でみられるものだ、と考えられないこともない。

もしそうだとしたら、太陽系外ではやはり生命が合成されるのは困難であろうという推測も一概に否定できない。ただ、ポナンペルマ博士らが発見したものを根拠にした限りでは、生命のもととなるような物質が生み出されたのは太陽系のみにおいてであると考える根拠は薄弱になってくる。私は、生命の素といえるようなものは、太陽系に限らず、もっと広範囲に存在すると推測するほうが適切なように思う。それから二番目に気をつけなければならないことは、核酸やアミノ酸が存在していても、それが生命存在にまで結晶するような条件の星が、どれほど存在するかということだね。

――その点を確かめることは、非常にむずかしいですね。ただ、どんな条件の星がいいかはあげることができます。まず、星といっても地球から観測さ

れるような恒星は、太陽と同じ超高温の世界ですから、生命は生きられません。したがって惑星に限られます。しかもその惑星はいろんな点で安定した状態になければいけないわけです。軌道が不安定であれば温度も一定しないし、生命活動には適していません。そうしたところから、二重星や多重星(注9)の恒星のもとでは安定した惑星をもてないといえます。太陽系のように単一の恒星であることが必要です。しかもその惑星自体も、大気や水は生命体のために欠かせない条件ですから、それを逃がさないためには、ある程度の大きさがなければなりません。生命発生のための条件はかなり厳しいといえます。

――その前に、どれくらいの恒星が惑星をもっているかということですが、惑星はみずからの力では光りませんから、それ自体を観測することはできません。しかし、恒星の動きをきわめて精密に測定することによって、その星のまわりを回る隠れた星が推測できるわけです。もちろん最も近い恒星でさえ五、六光年もはなれているのですから、現在の観測技術で、恒星の微妙な動きをもれなく測定するのは難しいことです。したがって、ごく一部分しか明らかにさ

れていませんが、たとえばバーナード星(注10)という星では、太陽系の木星ぐらいの惑星が存在するのではないかといわれていますし、他の恒星でも惑星をもっているのではないかと予測されているものがあります。

また、数多くの恒星のなかで単一の恒星というのはけっして珍しい存在ではなく、むしろこちらの方が普通であることが明らかにされていますから、単一の恒星でしかも惑星をもつものは、きわめて広い範囲で存在しうると考えられます。しかし、あとの条件というのは、もうほとんど観測不可能ですから、たくさんの星のなかではそうした条件の星も多く含まれているにちがいないと予測するしかありません。

池田　したがって、数の算出の仕方も学者によってずいぶん違うね。たとえば、百万個の恒星に一個は、そうした条件をそなえた惑星をもつだろうと想像する学者もいる。そうすると、銀河系のなかだけでも約十万個になるわけだ。また学者によっては十億の星のうち一個の割り合いだろうとする学者もいる。そうすると銀河系のなかには約百個の生命の存在する星があることになる。な

かにはこれらよりもっと多めに見積もる学者もいるし、逆に、そのような星はほとんどないと考える人もいる。条件が抽象的で、それを算定する基礎資料が不足しているのだから、決めようとすること自体、無理なのかもしれない。ただ、原理的には太陽系や地球は、けっして特殊な星ではなく、広い宇宙にそれに似た星が少なからず存在しうることは予想していいだろうね。

ところで、混同してはならないことがもう一つある。というのは、条件が整うということと、生命が発生するということは、また別だということです。条件が整っていても、生命が発生するまでに、相当の時間がかかるという点も考えなければならない。

――これは確率という問題と関連してきます。たとえばサイコロの目は六つある。そのうち「1」が出る確率は六分の一です。だからといって、六回に一回はいつも正確に出るというのではなく、平均の問題にすぎません。まして何回目に出るかということは絶対にわからないわけです。一回目に出るかもしれないし、六回目、あるいは二十回目ぐらいにようやく出ることさえもありま

す。ところで生命誕生の条件をサイコロの目になぞらえていうと、サイコロの目は幾つあるかということは、現在決定されていないわけです。ところが現実には「1」が出た。つまり生命が発生した。サイコロの目が少ないとわかっていれば、何回に一回かは「1」が出ることはわかりますから、なるほどと理解できる。しかし、ひょっとしたら何百億、何千億の目があるサイコロで――もちろん、そんなサイコロはないでしょうけれども(笑い)、そのサイコロから「1」が出たのかもしれない。そうすると「1」が出たということはきわめてまれなことであるわけです。

――生命の発生に要する平均時間が、その星の誕生からたとえば十数億年とすると、地球においてはきわめて平均的な確率で生命が発生したといえるし、数億年ぐらいだとすると、地球においてはむしろ遅めに生命が発生したのだということになります。しかし、平均所要時間が何十億年だとすると、きわめてまれな確率の早さで出現したということになるわけですね。ちょうど、エイッと振ったサイコロが、一回で「1」と出たようなものです(笑い)。

池田　とすると、そうした計算も、生命発生の条件と、現実の生命発生との関連を調べるためには重要な作業になるわけだ。それはともかく、こうしたさまざまな条件を慎重に考えていかなければ結論を下すことはできない問題だが、宇宙空間のなかに、地球のように生命発生にはきわめて好都合な条件を備えた惑星がおそらく何億とあるだろうということは、今日の天文学者の、かなり共通した見解となっている。

これに関連する考え方として、仏法では、三世十方の仏土観を説いている。すなわち、時間的にも過去久遠から未来永劫にわたって、そして空間的にも十方、すなわち三次元的方向のあらゆる広がりのなかで、仏、衆生、国土が存在するという着想をもっている。日蓮大聖人の御書のなかでも『大夫志殿御返事』には「三千大千世界と申すは東西南北・一須弥山・六欲梵天を一四天下とな づく、百億の須弥山・四州等を小千と云う、小千の千を中千と云う、中千の千を大千と申す」とある。この三千大千世界の考え方はすでに話し合ったが、この壮大な宇宙観にせよ、三世十方の仏土観にせよ、現在われわれがいる世界

だけが唯一の世界ではない、あらゆるところ、あらゆる時代にも、人びとの住む世界はあるし、またあったのだと説いている。しかも、その国土にそれぞれ仏がいて、その国土に住む衆生の苦しみを救い、生命の真実の尊さを教えていく法を厳然と説いていくことを教えている。仏法はけっして閉鎖的なものではなく、世界に広がり、さらにいえば、全宇宙的広がりをもった教えであることを示しているともいえる。この仏法の思想からすれば、宇宙のあらゆるところに生命発生の契機が存在し、また生命が発生している星が数多くあるといっても、けっして不思議ではないのです。

――ここで次に、では宇宙に生物が存在するとしても、どのような形で存在するかということを少し考えてみたいと思います。小説の分野のなかに空想科学小説、つまりSF小説というのがあり、そこではタコのような形をした火星人が地球を襲撃してきたり、怪獣がわがもの顔に星を支配している姿が描かれています。テレビでもさまざまな宇宙人が出てきますね。あのような宇宙人が現実に存在しうるのだろうかということなんですが……。

池田　現実に地球以外の天体にいかなる生命が存在するかもまだ確認されていないのだし、将来もその接触の可能性は、星と星との距離からいってきわめて少ないと予想される。したがって想像の世界で話を進める以外にないけれども、一般的に描かれているものも一部の非科学的、荒唐無稽なものを除いては、ある程度、科学の成果を根拠にして描かれているようだ。

火星人なども、現在では否定されているけれども、重力の関係などからいって、もし高度に発達を遂げた生命が存在するとしたら、あのような形をしているという可能性はあるね。何でも人間の形に似ていなければならない必要はない。地球上でさえも、実にさまざまな姿をした生物がいるし、歴史的にも存在したのだから……。高等生物といえば地球人に似ているはずだと決めつけるのは、偏狭な発想といわなければならない。ただ、現在の人間の姿が、知的発達を遂げるうえで非常に都合のよい合理的なものであることはいえるね。まずやはり、高度に発達した頭脳をもつことが必要だし、その神経中枢は外部から厳重に守られなければならない。しかもそれは体の他の部分より負担をうけない

す。月の表面で宇宙飛行士がウサギのようにとびはねているのがテレビでも報道されましたが、あれは月の重力が地球の約六分の一という小さいものだからです。地球と条件がほとんど同じでも、重力が小さい星だったとすると、ひょろ長い生物が多いことが考えられますし、もし重力が大きいとすると、身体を支えるためにがっちりした骨格を必要とするでしょう。それに膚の色、感覚器官の形、大きさ等、もうそれは千差万別だと思われます。宇宙は広大であり、ともに複雑きわまりないわけですから、どんな宇宙人がいてもおかしくない。真っ赤な膚をした宇宙人も考えられますし、手足の指の数や毛髪などまったく違うことがありえます。大気が少し薄いというだけで、肺の形状も変わり、それにつれて内臓が変わってくることも十分に考えられるからです。

――それに、これはもっと異質の世界になりますが、地球型の生命とまったく違う生命も存在しうるということです。というのは、私たち人類、そしてあらゆる生物の身体は蛋白分子によってなっている。ところが生命を形成するのは、蛋白によらなくてはならないということはないのです。蛋白分子のかわ

(2)メタン＝脂質　(3)アンモニア＝蛋白　(4)水＝蛋白　(5)硫黄＝炭化弗素　(6)硫黄＝弗化シリコン、の六種類が可能な生命のバリエーションだと推測しています。

池田　そのうち「水＝蛋白」型生命が地球における生命だということになるわけだね。ところでこの生命を考えてみると、水素はほとんど絶対零度に近い温度でようやく液体になるのだし、逆に硫黄は数百度という高温で液体になる。とすると、地球のような温度でなくても、極低温の世界や高温の星でも生命は形成される可能性があることになるね。どのような環境のもとでも、私たちからみれば八熱地獄や八寒地獄(注11)と思われるようなところでも、そこで生命が活動をし、喜怒哀楽さえ感じていることがありうるわけだ。いずれにせよ、宇宙の、生命を生み出す範囲の広さはかなりのものがあるといわねばならない。このような観点からすると、地球を標準にした先ほどの計算も考え直さなくてはならなくなる。といっても、蛋白分子は宇宙に存在する元素の割り合いからいっても、きわめて普遍的なものだから、それを標準にするのはけっして間違いはな

いのだけれども……。

――弗化シリコンといいますと、原材料は珪素であって、いままでの炭素とはぜんぜん違ってきますね。岩石などはこの珪素が主成分ですけれども、これが生命のもとだと考えると、なんだか岩が動いているような生命を想像してしまうのですが、もちろんゴムのように柔軟な組織をもつ生命となるのでしょう。岩石みたいな外見で、実は生物だったということも考えられます。

ところで、このように組織がまったく違う生物となりますと、もし地球人と将来、接触するようなことがあったとして、はたして相互に理解しあえるものでしょうか。感覚、ものの考え方はもちろん違うでしょうし、物理・化学的にいっても、一方の生物の大気が他方の生物にとっては猛毒となることだってある。そうすると、たとえ相まみえても離れざるをえなくなる。事実、SF小説のなかにはこうした遭遇を扱ったものもあります。なんでもかんでも他の星を侵略しようとするインベーダーのようなものもないとはいえない。そこまでいかなくても、たとえば、芸術や政治、文学など、理解するまでには至らないも

のがあると考えられるのですが……。

池田　たしかに、いままで考えてきたように、宇宙にはさまざまな生物が存在すると考えられる。体の組織それ自体が違うのだから、考え方もおのずからまったく違うだろう。私たちが美しいと思うものでも、他の生物にとっては奇妙至極かもしれない。そういった面で相互の交流は簡単にはいかないでしょう。

人間と同等の高度な精神機能をもった生物がいたとして、まず考えられるのは、自然科学系統における交流です。数学、物理学、化学などは、やはり共通のものがあるはずです。それらを媒介として第一歩の接触が行なわれるかもしれない。現実にオズマ計画というのは、数学の法則を送って反応をみようとしたものだ。しかし、そこから先は難しい。人文科学や社会科学の分野は、よほど似かよった生物でないと理解はできないと思う。

――宇宙人との接触を考えれば、地球人同士というのははるかに互いに理解のしやすい仲間といえます。この点からも人類は、もっともっと真剣に理解しあわなければならないと思います。

さて、私たちが、地球における生物の発生と進化の様相をさぐるにあたって、誰人たりとも否定できない一つの事実がある。それは私たちの周囲には、隣人あり、動物あり、草木あり、肉眼ではとらえることもできない微生物が充満しているということです。これらの生物はどこから来たのか、どうして生まれでたのかということが大きい疑問として出てくる。

――地球にどうやって生命が発生したかということをめぐって、考えられる原因は、次の二つのうち、いずれかになります。一つは、地球以外の他の天体からとびこんできたということ、二番目には、この地球の歴史のある時点で、出現したという考え方です。もちろん、生命それ自体の起源となれば、第一のよそから来たという場合も、ではよその世界でどうやって発生したかが問題になりますが。

池田　いままで一般的に考えられてきたのは、いずれも二番目の場合だね。最初に、旧約聖書の創世記にのべられているように、天地創造説がとられた。この旧約聖書の記述をもとにした神学者の計算によると、いまを去る六千年の

のがあると考えられるのですが……。

池田　たしかに、いままで考えてきたように、宇宙にはさまざまな生物が存在すると考えられる。体の組織それ自体が違うのだから、考え方もおのずからまったく違うだろう。私たちが美しいと思うものでも、他の生物にとっては奇妙至極かもしれない。そういった面で相互の交流は簡単にはいかないでしょう。

人間と同等の高度な精神機能をもった生物がいたとして、まず考えられるのは、自然科学系統における交流です。数学、物理学、化学などは、やはり共通のものがあるはずです。それらを媒介として第一歩の接触が行なわれるかもしれない。現実にオズマ計画というのは、数学の法則を送って反応をみようとしたものだ。しかし、そこから先は難しい。人文科学や社会科学の分野は、よほど似かよった生物でないと理解はできないと思う。

――宇宙人との接触を考えれば、地球人同士というのははるかに互いに理解のしやすい仲間といえます。この点からも人類は、もっともっと真剣に理解しあわなければならないと思います。

原始地球での出来事

池田　このあたりで、話題を、私たちが現実に生を享受している、この地球に移してみよう。いままでのところで明らかになったように、この宇宙には、じつに多様な生命体が存在しうる可能性がある。少なくとも、この宇宙には、生命を形づくる素材がいたるところにあることだけは、ある程度、断言してもよいでしょう。だが、いまのところ、私たちが知りうる限りでは、生物と名のつく生命体が生息し、生を営んでいる場所は、この緑の惑星といわれる〝宇宙船地球号〟をおいて他には見出だされていない。

したがって、地球を舞台にくりひろげられた生命誕生と進化のドラマに、議論の焦点を移してみることにしたいと思う。

さて、私たちが、地球における生物の発生と進化の様相をさぐるにあたって、誰人たりとも否定できない一つの事実がある。それは私たちの周囲には、隣人あり、動物あり、草木あり、肉眼ではとらえることもできない微生物が充満しているということです。これらの生物はどこから来たのか、どうして生まれでたのかということが大きい疑問として出てくる。

――地球にどうやって生命が発生したかということをめぐって、考えられる原因は、次の二つのうち、いずれかになります。一つは、地球以外の他の天体からとびこんできたということ、二番目には、この地球の歴史のある時点で、出現したという考え方です。もちろん、生命それ自体の起源となれば、第一のよそから来たという場合も、ではよその世界でどうやって発生したかが問題になりますが。

池田　いままで一般的に考えられてきたのは、いずれも二番目の場合だね。最初に、旧約聖書の創世記にのべられているように、天地創造説がとられた。この旧約聖書の記述をもとにした神学者の計算によると、いまを去る六千年の

昔、神の手によって宇宙万物が六日間でつくられたことになるという。旧約聖書に限らず、他の民族の神話伝説の多くも、神による天地の創造を説いている。古くは、それが一般に信じられていたのでしょう。しかし人間の知恵が進むにつれて、そうした神の実在そのものについて疑惑を抱く人が増えてきた。

――あくまで二番目の考え方をとるとして、神がつくったのではないとしますと、地球という惑星から、自然に発生したと考えざるをえませんね。

池田　自然発生説だね。

――もっとも古いところでは、アリストテレスが自然発生説を唱えています。でも、今からみなおしてみますと、ずいぶんナンセンスなところもあります。たとえば、ウナギは泥が熱せられると自然に発生する、などといっています。

池田　そうした個々の生命体についての自然発生説は、ずっと根強く続いたわけだが、それがパスツールの実験によって否定されるわけです。おもしろいことに、自然発生説は、現代では、新しい装いのもとによみがえったと考える

こともできそうだね。少なくとも、二十五億年から三十数億年前に、それまで無生の世界であった地球の表面に、原始的な生命が誕生したと、現代の科学者たちは主張している。むろん、アリストテレスなどが、その当時信じていたように、泥から、ウナギとかエビとかタコなどがでてきたり（笑い）、また、草の露からミツバチやホタルが生まれたり、といった次元での話ではなく、科学的推論をふまえての生命の誕生だが――。

――ところで、たとえば原始地球――科学者のほぼ一致した意見にしたがいまして、いちおう三十億年以前ぐらいの地球を想定しておきます――に、他の天体から、原始的な生命がとびこんできて、それが、地球上に定着したということは考えられるでしょうか。この場合の、原始的な生命というのは、たとえば一個の独立した栄養細菌のようなものと考えられますが――。

――原始的なウイルスという説もありますね。

――ええ、でも、現在、私たちの周辺にいるウイルスではありません。種種の学説がありますので、将来、もう少ししぼられてくるまでは、私たちのこ

の対話では〝原始生命〟という言葉を使う以外にありませんが。

――生命体が他の天体から来たのではないかということも、有機物質が隕石から発見されたということから考えても、まったく否定することはできないような気がしますが、少なくともこの地球における生命の起源に関して現代の科学者は、ほとんど問題にしていません。

また先ほどもちょっと出ましたように、他の天体から来たにしても、いずれは始まりを考えなければならないわけで、ここでも、地球で自然に生命は発生したという前提で話を進めてはいかがでしょうか。

ところで、ではどのようにして地球に生命は発生したかという疑問を解くためには、原始地球の様子がいったいどのようであったかが明らかにされなければなりません。現在、科学によって推測されているところでは、その頃の地球は、厚い雲におおわれていたようです。地表にはどろどろに溶けた岩石がひろがり、すさまじいまでの火山の大爆発が、ひっきりなしにおこっていたと思われます。

池田　現在の地球からは、想像もできないほどの激動をくりかえしていたのだね。

――地表に顔をのぞかせた大小無数の火口から立ちのぼった噴煙は、その上空で水蒸気となり雲の層を形成し、またたくまに、雨となってシャワーのようにふりそそいでいたでしょう。その雨がやがて原始の海をつくり、溶岩を冷やして地殻をつくっていく。そうした大気の激動のなかで、激しい雷鳴がひっきりなしに起こっていたと思われます。

池田　原始大気には、酸素は存在しなかったと推定していいだろうね。

――火山の爆発によって大気がつくられたのですから、その成分は、水蒸気、メタン、アンモニア、窒素、硫化水素、炭酸ガスなどであったと考えられています。酸素の存在はまずなかったといってさしつかえなさそうです。

――酸素がありませんと、現在、地球をおおっているオゾン層(注12)もできませんね。

――オゾン層は、太陽光線のなかの紫外線をふせぐ役割りをするのですが、

原始地球には、このオゾン層がありませんから、強烈な紫外線がストレートに地表にさしこんでいたと思われます。

池田　もし、仮りに、このような状態の地球に、どこか他の天体から原始生命とか、また、それに類似した生命体がとびこんできたとしても、生きながらえることは、とうてい不可能だろう。宇宙空間を旅するとなれば、生物の胞子のようなものが推定されるが、一千度にもおよぶ高熱とか、強烈な紫外線とか、現在よりもずっと強い放射線の洗礼をあびては、たちまち死にたえるにちがいあるまい。

――雷の活動もきわめて旺盛ですから、宇宙からの生命の種子が来たとしても、空中放電に貫かれてあえない最期をとげてしまうでしょうね。

池田　ともかく、宇宙空間からの原始生命飛来説について、ひとまず、しりぞけておいてよいと思う。このように、灼熱地獄にも比すべき惑星の状態は、いかなる原始生命の存続をも許さなかった。だが、私たちにとっては、地獄を連想させるような環境こそが、地球上における生命発生のための不可欠の条件

でもあったのです。

――酸素がなく、高温で、紫外線が強烈にふりそそぐ環境は、私たちの知っている生物的生命にとっては、まさしく地獄以外の何ものでもない。ところが、当の原始生命を形づくっている蛋白質とか、アミノ酸とか、核酸とかは、灼熱にもえたぎるところでしか合成されない。ですから、もし地球が高温でなかったとすれば現在の私たちの生命もありえないことになりましょう。

池田　生命発生の起源を、深く探索すればするほど、自然の妙味に感服せざるをえないようです。もう、古典に属するほど一般的になった、オパーリンの学説では、生命発生までのステップを、大略、三つにわけている。第一段階は、無機物から単純な有機物が合成され、第二のステップで、単純な有機物が反応して、より複雑なものになるという。

――具体的には、原始の大気を構成していたメタンやアンモニアが、紫外線とか、空中放電――これは雷のことですが――の助けによって、生命に絶対不可欠な物質である核酸のもとになるアデニンとか、各種のアミノ酸へと合成

されていった過程ですね。

池田　オパーリンによると、原始大気のなかで生まれた、これらの有機物が、雨とともに原始の海にとけこんで、栄養たっぷりのスープになった。その海のなかでも、さらに化学反応が進んで、オパーリンのいうコアセルベート(注13)が形成される。これが、第三段階だが、そこから、ついに、原始生命が完成したとするのが、彼の学説だね。

――原始生命が生まれ出た場所という点について、バナールの説は少しちがっています。原始の海に関係するところは共通しているのですが、彼は、湿った水際で生命が誕生したと主張します。それも、ただの湿った土ではなく、粘土の表面だといいます。

池田　いまあげた二つの学説以外にも、幾人もの科学者や哲学者が種々の見解を出しているだろうが、こまかい部分での相違はあっても、次の二つの点に関しては、ほぼ一致しているといえるのではないだろうか。

一つは、原始地球の表面においては、原始的な生命の発生を促すに十分な、

物質的条件がととのっていたということです。もう一つの事実は、いかなる経過をとったにせよ、ともかく、原始生命が姿をあらわしたということです。現在、地球上に存在する生命が、神の創造によるものでもなく、他の天体から飛来したのでもないとすれば、科学者たちが異口同音に主張するように、原始地球の表面に生まれでたと推量するほかないでしょう。とすれば、無機物から有機物、そして、原始生命への、大略の移行をも認めていいように思われる。

――そこで、いま、科学者を中心にして、哲学者や仏教学者をまきこんで、火花をちらしている一つの問題につきあたります。たしかに、原始地球では、地球型生物をつくるための、すべての材料と、それにふさわしい環境がととのっていました。そして、現実に、生命は発生したわけです。でも、それは、まったく偶然に、たまたま起きたことであって、前の確率の話とも関連することですが、一回限りの現象ではないかとの意見です。

池田　重大な論点ですね。素材と環境的条件は普遍的であっても、そこに起こった事象がまったくの偶然によるとすれば、他の天体でも同じようなことが

起こることは、きわめてむずかしくなる。あるいは、生命が実在するのは、私たちの地球だけであった、ということにもなりかねない。それに対して、生命誕生をひきおこす原因が、単なる偶然だけではないとすると、良好な環境をそなえた惑星に、種々の生物が存在しうる可能性も、ぐんと高くなるでしょう。ところで、偶然説を力説するのは、主に、分子生物学を研究している人びとですね。

――偶然説の根拠は、分子生物学の立ち場からの事実にもとづいています。種々あげられるのですが、そのうちで、最もポピュラーな事実を一つだけのべてみますと、たとえば、私たちの身体を構成している蛋白質は、アミノ酸からできています。そのアミノ酸には、L型とD型という二つの種類があるのですが、おもしろいことに、地球上の生物はすべて、L型のアミノ酸でできているのです。ところが、実験室などで、化学的に合成しますと、かならず、L型とD型のアミノ酸が半分ずつできてくるのです。そこで、考えられることは、原始地球で生まれた原始生命は、ただ一個であり、それはL型アミノ酸から誕生

したものであったというわけです。

池田　その主張に対して、原始地球ではL型とD型の両方の生物がいたが、何らかの事件がおきて、L型の生物が生きのこったとする反論もありますね。どちらをとるか、また、第三の新説がありうるか、となれば、さらに深い議論が必要だろうが、ここでは、そこまで立ち入らないことにして、分子生物学者の主張するように、原始の生命は、ただ一個発生したという仮説を認めたとしても、その現象は、偶然説以外に説明できないものかどうか。

――これは非常にこみいった問題になりますが、宇宙における生命誕生の可能性をある程度、類推するには、どうしてもさけて通ることのできないところですので、簡単な確率計算をしてみることにします。いろいろな計算方法があるのですが、もっともわかりやすいものとして、東大教授の野田春彦氏の説を引用することにします。

くりかえしになりますが、地球上の生物はすべて蛋白質と核酸からつくられています。その蛋白質は、二十種類のアミノ酸によって生成されますが、原始

地球に、この二十種のアミノ酸が全部そろっていたとすることは、かなり納得できます。つまり、ある種類に限定されるとすることの方が、不自然だからです。

池田　二十種のアミノ酸がくさりのようにつながっていって、一つの蛋白質が生まれるのだね。

――先ほどの確率の話と関連してきますが、野田教授の示すところによりますと、いま、アミノ酸が百個つながってできている蛋白質を例題にとります。途中をはぶきますが、望みどおりの蛋白質が一個だけでもつくられるには、一のあとにゼロが百三十個つながるほどの数だけ、種々の蛋白質を試作してみる必要がある、というのです。いわば、蛋白質の試作品です。ひかえ目に計算しても、一のあとにゼロが百個つづくほどの試作品をつくってみて、やっと、私たちの生命を形成している、ただ一個の蛋白質が得られることになります。

こうした計算では、実感がわかないかもしれませんので、重さで示してみますと、10^{75}トン（一のあとにゼロが七十五個つづく数）にも及ぶ試作品のなかで、一

つだけ求めるものがある、というのです。この数字がどれほど莫大な量をあらわしているかといいますと、天文学的数字をもはるかにこえています。つまり、現在推測されている宇宙全体のすべての物質の重さが、なんと、10^{49}トン（一のあとにゼロが四十九個つづく数）にすぎないのです。

池田　おもしろいね。たとえ、材料がすべてそろっていても、もし、でたらめにアミノ酸をつなげていったのでは、宇宙の物質が全部アミノ酸であったとしても、私たちの身体を形成している一個の蛋白質もつくることはおぼつかないことになるわけだね。

――ありえないことですが、地球も太陽も、銀河系も、すべてがアミノ酸でできているとします。それでも、蛋白質が一つでも確実につくられるとはいえないのです。それから核酸ですが、もし、全宇宙が核酸の材料であったとしても、それが、十億年間反応しつづけて、ようやく、もっとも簡単な一個の核酸が現われるかどうかさえもわからないという計算になるそうです。

池田　原始生命となると、核酸とか、蛋白質とかが、さらに高次の結合をと

げないと出現してこない。だから、まったくの偶然説をとると、原始生命どころか、一個の蛋白質とか核酸が、この地球上でできることさえおぼつかない。むしろ不可能といったほうがいいかもしれない。

――もちろん、そうしたきわめて稀なケースが幸運にも地球の場合は早く出てきたという考え方もできないわけではありません。しかし、そうした偶然論を押し通すよりも、この地球そのものに、生命へと向かう傾向性がそなわっていたと考えるほうが自然に思えるわけです。いや、宇宙そのものが、生命への方向をはらんでいたというべきかもしれない。

――野田春彦教授も、あくまで科学者としての立ち場を堅持しながらも、有り得べからざることが一度だけ、何の理由もなく起こったというならば、あとは何の議論もできない。それではどうしても気持が悪いとすると、自然界の物質には生命を作りたがるような傾向があると考えざるを得ないとのべています。

池田　自然が生命を作りたがっているというのは、きわめて意味深い表現で

す。もう一歩進めて、その自然界に秘められた〝生命をつくりたがる傾向〟の意味するところを熟慮すれば、かならず、宇宙存在自体に内包された生命へと向かう根源的な傾向性にゆきあたるのではなかろうか。さらにいえば、大宇宙生命には、生命的存在を生みだし、はぐくみ、創造の道へとかりたてる本源的な内在力がそなわっていたと推察できるように思う。こうした宇宙生命内在の根源的な力に導かれて、この地球においても、原始生命が産声をあげえたのではなかろうか。

私は、野田教授の言葉のなかで、「自然界の物質に、生命をつくりたがる傾向がある」との表現に着目したい。ふつう物質とか、物体とかいえば、生命的存在とは何の関連もないもののように考えがちです。しかし、その物質そのものに即して、生命的存在へと向かう傾向性をみいだしていられるところに、洞察の鋭さがある。

――これと似た考え方をティヤール・ド・シャルダンも述べています。この人のユニークな進化論には、うなずけない部分もあるのですが、次の主張に

は、首肯できるものがあります。たとえば、生命というものはもはや宇宙における皮相的な偶然とみなされるものではなく、宇宙のなかのどんな小さな裂けめからでも噴出しようとする圧縮された蒸気のようなものである、というのです。

池田　譬喩的な表現だが、参考になる思索の結晶が含まれている。

私たちの地球についていえば、ほぼ五十億年前に形成されたときから、三十億年前に原始生命が生まれるまでの、二十億年の間、徐々にではあるが、地球そのものに内在する生命への傾向性が高まっていた。シャルダン流の表現をすれば、生命誕生をひきおこす内在力が、少しずつ充満し、地球の内部に高まっていたといえよう。

――まったくの無生の世界であった原始地球は、地球型生命を生みだすために、二十億年もの年月をかけたのですね。

池田　原始生命を生みだすまでの、この惑星の営みは、けっして無為にすごされたのではない。火山の爆発も、原始の海の形成も、また、大気のなかでの

一つ一つの化学反応が、すべて、生命発生のための長い長いプロローグであったと思う。こうした原始地球自体の営みがなければ、オパーリンの主張する、無機物から有機物へ、さらには、原始生命への過程も、けっしておこりえなかったのではなかろうか。

――地球そのものが、あたかも生命ある実在のごとく、やがては、自己の体内から生みだす地球型生物の生きるべき、すべての条件をととのえていったともいえますね。

池田　そう。ここは、私は非常に重大なところだと思う。シャルダンは、物質はわれわれの目には〝死んだもの〟にみえるが、ある一定の境界をこえると、生命の赤い輝きをおびはじめる、という意味のことを述べている。先ほどの野田教授の発言とも通じるものがあるが、表面的にみれば、無機物も有機物も、たしかに〝死んだもの〟とうつる。だが、メタンやアンモニアなどから、アミノ酸とか、蛋白質とか、核酸などの複雑な有機物が合成されていくにつれて、物質自体が、死から生への輝きをおびはじめる。そして、原始生命に至っては、

赤々ともえる生命の火が、この地球上にあらわれるのです。このように論を進めてくれれば、生命の発生以前の原始地球そのものが、地球型生命を生みだす母胎としての、巨大な生命的存在であると考えざるをえないのではなかろうか。

――地球もまた、たとえ表面的には、単なる物質的存在とうつっても、そのあまりにも巧妙な働きに焦点をあてれば、一個の生命体であるといわざるをえないというわけですね。

池田　いま、科学者たちは、原始地球には、地球型生命を発生させるべき、あらゆる材料と条件がととのっていたと力説している。この事実を認めたうえで、私は、次のように主張したいのです。原始生命をその誕生に導いたものも宇宙内在の生命へと向かう傾向性であれば、地球型生命を発生させるに十分な条件をととのえたものも、同じ根源的な力であったのではなかろうか――と。

原始地球にみいだされる生命発生への条件は、単なる偶然によって、つくられていたのではない。それは、ととのっていたのではなく、原始地球の、二十億年にもおよぶ、営々とした活動が、ととのえたのである。さらにいえば、地

球を、そして、物質を、生命的にそめあげた主体的存在は、当の原始地球であり、その内部にはちきれんばかりに高まりつつあった生命への傾向性ではなかったであろうか。

――これを宇宙的視野にまでひろげると、地球型生命ばかりでなく、他の予想される生命的存在の素材が宇宙のあらゆる天体にありうるという事実は、宇宙そのものの働きによるととれますね。

池田　少なくとも、生物形成の素材というか、原料があり、生命発生を促すにたりる条件が備わっているところでは、それは宇宙内在の生命への傾向力による、というふうにいうことはできるでしょう。

しかし、だからといって、そうした環境を発見できるところに、かならず、予想しうる生命体が誕生しうるか、といえば、そうは断定できない。たとえば、高まりつつあった内在力が、種々の外的作用によって、どうしても、その壁を打ち破れず、やがて弱まってしまうこともあろう。そこに、偶然の働く予地が残されているし、具体的な生命発生の場所とか、時間とかになれば、偶然にお

きるさまざまな事件が大きく介入してくるにちがいあるまい。それにもかかわらず、宇宙生命の営みを、時間空間にわたって視野を広げて考察すると、偶然の介入を許しながらも、生命化への傾向性を断ちきられることはけっしてないであろう。

ゆえに、宇宙生命の内在力が、あらゆる種類の生命体の誕生を準備している領域では、やはり、その環境に適合した生命的存在が生まれでる可能性は、けっして低くはないのではないかと思う。いや、無限の空間領域に広がり、永遠の流転をおりなしてゆく宇宙の全体像におもいをはせるときには、宇宙は、生命の素材にあふれているばかりではなく、各種の存在形態を示す生物にもみたされていると推定できるのではなかろうか。

――これで、私たちの生命の生死流転は、宇宙を舞台に、永劫に続くと考えられる基盤が得られたといえそうですね。

池田　「本有の生死」は永遠の時をきざむ。もし、地球という惑星以外に、いかなる形にせよ、私たちの生命の「我」の住み家がないとすれば、「本有の

生死」の基盤は、その足もとからくずれさるといわなければならないでしょう。この地球も、現在の時点から、ほぼ五十億年のちには、人間生命はおろか、動物とか草木さえも生を保ちえなくなってしまうからです。

だが、もし知的生物を含めて、生命的存在の生きる場が、空間的には宇宙大に、時間的には永劫の未来にわたって保証されているとすれば、「本有の生死」が成立するための、もっとも基本的な条件が、科学的実証をふまえた確証をえたことになるのです。

人類誕生の条件

進化論について

――ところで、原始地球に原始の生命が発生してから、人類の誕生まで三十数億年の開きがあります。この原始の生命と人類誕生とを結ぶものは何か。三十数億年の間に、いったいどのようなドラマが演じられたのか。

いま、地球上には、百万種の動物と、二十五万種の植物があるといわれています。ひとくちに生命といっても、その発現形態はじつに多種多様であるわけです。しかし、私たちが最も知りたい〝生命〟――また、解明しなければならない〝生命〟とは、人間の生命にほかなりません。

無生の原始地球に初めてあらわれた原始の生命と、この人間の生命とは、どのようにつながっているのか――この点について加えられた説明が進化論です。

そこで、この生物進化の過程を辿る方向として二つの道が考えられます。一つは、原始生命から時間の流れに沿って辿っていく方向ですが、これは、最後には、先にあげましたように百万種の動物と二十五万種の植物の誕生の経過を論じなければならなくなる（笑い）。もちろん、すべて解明できたとして、ですが。これでは、あまりにも複雑ですし、焦点がぼけてしまいます。

そこで、私たちの論議のまとは、人間生命にあるのですから、逆に、第二の方向、つまり人類の起源と、その出現の条件といった点に中心を置いて、そこに、それにからまる進化論的課題をとりあげてみたい――このように思います。

池田　賢明な進め方でしょうね。

――アメリカの遺伝学者、ドブジャンスキーが、こういうことをいっています。――進化論には、三つの段階がある。一つは、宇宙進化であり、これは、原始的な生命が出現するまでの段階である、と。

池田　それについては、もう終わりましたね。

――その次が、原始生命が進化をとげていって、霊長類などが姿をみせる

までの期間です。これを彼は生物進化の段階といっています。

――一般に進化論といいますと、ほぼ生物進化をさしているようです。ダーウィンの『種の起源』でも、人類の起源については、ただ、最後に意味深長な言葉がそえられているだけです。「人類の起源と歴史については、さらに多くの光りが投げかけられるであろう」――この言葉でとじられています。ですから、『種の起源』という進化論の原典ともいうべき書物のなかで、えんえんとのべられているのも、生物進化です。

池田　そうですね。ところが、現在の学者たちが、最も頭脳を痛めているのは、一つは、先ほどの原始生命の発生であり、もう一つは、人類の誕生であるわけです。

――それで、ドブジャンスキーの分類でおもしろいのは、生物進化に対して、人間生命出現以後を、人類進化と称している点です。ともあれ、生物の進化もさることながら、人類誕生の場面は、つきせぬ謎を秘めているといえますね。

――ところで、進化論の原典ともいえる、ダーウィンの『種の起源』にまつわって、こんな話があります。この書物は、出版されたのが、一八五九年の暮ですが、すさまじいまでの嵐を呼びおこしたそうです。

池田　むろん、批判の嵐でしょうね。それまでのキリスト教の教義の一つであった、人間は天地創造の最後の日つまり第六日目に、神によって造られたという説に、真っ向から反逆したものだったのですから。

旧約聖書の〈創世記〉には「神はまたいわれた、水は生き物の群れでみち……、地は生き物を種類にしたがっていだせ……、われらに似せて、われらの像のごとく人をつくりたまえり」とあります。ヨーロッパの人びとは、この創世記にある現象が、突如として起ったのは、紀元前四〇〇四年だと信じていたという。

――紀元前四千年と、現代科学が示す三十億年とは、ずいぶんちがいますね。

池田　しかも、十七世紀の中頃には、一人の大主教が、念のために、旧約聖書を読み直して、たしかにこのとおりだと確かめ、不動の確信をいだき直した

という（笑い）。

――このダーウィンの革命的な学説に賛意をあらわした人は、ごくわずかでしたが、そのなかに、みずから、ダーウィンの擁護者を任じた人物にトマス・ハックスレーがいます。彼は、ロンドン・タイムズから『種の起源』の書評を頼まれまして、この書物を一読して感激のあまり、次のように叫んだと伝えられています。「こんなことがわからなかったとは、何という間ぬけだったろう」と――。

そのハックスレーが、一八六〇年の六月、歴史に残る大論戦を展開しています。並みいる当時の科学者たちの主張を打ち破ったところで、オックスフォードの司教であるウィルバホースが登壇し、ハックスレーに向かって冷やかに質問します。「あなたは類人猿の子孫だとおっしゃるが、それはあなたのおじいさんの系統なのですか、それともおばあさんの系統なのですか」と嘲笑したのです。ハックスレーは厳然として答えました。「もし、私の祖先に、あなたのいわれる哀れなサルか、それとも、立派な素質と大きな影響力をもちながら、

真理のまじめな追求者をはずかしめることに専念する人間かの、どちらかを選ばなければならないとすれば、私はむろん、サルのほうをとるでしょう」と。

池田　急所をえぐったとどめの一撃だね。

――しかし、どうやら、ウィルバホースも含めて、当時の人びとには、ダーウィンの主張の真意が良くのみこめていなかった面もあるようです。ダーウィンが、人間の祖先は、サルの始祖と共通の生物から進化してきたと主張していると聞いて、その意味をとりちがえて、人類の先祖は、ゴリラやチンパンジーであると早合点したのでしょう。

現在、地球上に生息している、オランウータンとか、テナガザルとか、チンパンジーなどは、人類とは種を異にする動物であって、当然人間の祖先であるはずもないからです。

――チンパンジーが突然変異をおこして、人間生命に近づいてきたなどといった話は、いまだかつて耳にしたこともありません（笑い）。

池田　ところで、人類と類人猿との共通の祖先というのは、考古学者や人類

学者の説によれば、ドリオピテクスと呼ばれているようだね。

――ええ、時代的にいうと、四千万年前から千二百万年ぐらい前まで約三千万年間にわたって生存していたといわれます。

池田　私たちの祖先は、その時代に、類人猿へとつながる道と訣別し、人類独自の進化を開始したと考えられる。

もし、この分岐、訣別がなければ、人類への開拓の道はとざされたままであり、ホモ・サピエンスとしての現世人類の誕生もなかったであろう。しかし、この分岐、訣別といっても、人間生命と他の生物とが、断絶した存在であり、人間だけが、特別な存在であるという意味ではない。人間生命にも本能とか原始的な衝動がうずまいている。今度は逆に、人間以外の他の生物にも親子の情愛がそなわっているし、ある種の動物においては、私たちのかわす言葉の最も初歩的なものをみいだすことも可能であるという。つまり、人間のなかに動物があり、動物のなかに人間があるともいいうるのです。動物と人間生命は明らかに連続している。ゆえに、仏法の輪廻説では、人間といえども、牛とか馬に

生まれかわることもありうると説くのです。にもかかわらず、人間生命は動物から種々の特質をうけつぎながら、一面では、人間生命と他の生物との相違点を明確にあらわしています。人間と他の動物との差別を示すものは何か――そこに着目したときに、人類の誕生がいつ、どのようになされたかを論ずることができるのです。

――それにしても類人猿と訣別した、その分岐点が何ゆえにおきたかは、進化論上最大のテーマです。

池田　その前に、人類進化のプロセスをひととおり辿ってみると、二百万年ぐらい以前には、オーストラロピテクスが出現し、ピテカントロプス、ホモ・エレクトゥス、ホモ・サピエンスとつながっているようだね。

――ピテカントロプスが、四、五十万年前、ホモ・エレクトゥスが十万年ぐらい以前、そして、ホモ・サピエンスともなれば、五万年以上さかのぼることはできないようです。

池田　ホモ・サピエンス以外は、現在では絶滅してしまって、その骨が化石

として見出されるだけだが、学者たちが、これらの化石人類(注14)を、まぎれもなく人類の先祖につながると確信したのは、二本足歩行とか、道具を使っていたとか、火を使用していたとか、また、言葉を使っていた、などといった事実からの推測ととっていいでしょうね。

――太古の人びとが残した生活の跡とか、頭骨、歯、骨盤などを、科学的に調査した結果からの類推です。ドリオピテクスから少しあとになりますと、直立二本足歩行が定着してきます。オーストラロピテクスは、荒けずりの石器を使っていた痕跡が認められますし、中国のピテカントロプス――北京原人――は火を使用していた形跡がみとめられます。ホモ・エレクトゥスのなかに入るネアンデルタール人は、ムステリアンの石器文化をきずきあげています。また、最初のホモ・サピエンスといわれているクロマニョン人は、みごとな洞窟芸術を残しています。

池田　言語によるコミュニケーションも、おそらく数百万年の歴史を有しているだろうが、言葉、道具、直立二本足歩行、火の使用、芸術などはすべて、

他の生物にはみられない人間生命独自の所作であると断定してもいいね。

――そうしますと、私たちの遠い祖先は、長い人類進化の道程で、こうした人間らしい特徴を、少しずつ自己のものとしていったのですね。

池田　化石人類のなかには、ホモ・サピエンスの直系の先祖ではなく、進化の途中でゆきづまり絶滅していった系統も含まれているかもしれない。この点に関しては、各種の学問の進歩、累積が、解明してくれるでしょう。

しかし、いずれにしても、太古の人類は、他の動物にはみられない精神の働きを発揮させつつ、文化の華を咲かせていたでしょう。その形跡は石器などの物質的証拠でしか辿りえないが、それはあくまでも、部分的な残りかすです。

もう一歩深く、そうした道具の使用や芸術的創造へとおもむかせた生命内在の特質に目をむける必要がある。そこにこそ人類が文化をきずいた源泉があるのです。つまり、人間をまさに人間たらしめたものとは、その生命自体にある特質であり、幾多の先哲がかかげるように、知性、理性、意識、精神などをあげなければならないでしょう。

――ベルグソンも、知性的意識に着目し、人間形成の推進力としています。また「狭義の道具は知性の産物である」とも主張しています。

池田　私も同感です。物的証拠として残るものは石器などの道具です。しかし、大事なのは、それを作った人間の知性です。それこそ、人間の誇る強さだったのです。さらに、外界に対してばかりでなく、人間は、内なる世界に向けて自己意識をもつことによってはじめて人間になりえたと思う。

知性の発動が、道具をつくり、技術をみがき、言語をねりあげていった。さらに付言すれば、カントがいみじくも指摘した、実践理性としての道徳法則も、人間らしくあるための重要な要素と考えられる。『実践理性批判』の結論部分の冒頭にある有名な一節をおもいおこしてもらいたい。

「それを考えること屢々にしてかつ長ければ長いほど益々新たにしてかつ増大してくる感歎と崇敬とをもって心を充たすものが二つある。それはわが上なる星の輝く空とわが内なる道徳法則とである」と記され、少しあとに「第二のもの（道徳的法則）をみるときは、叡智としての私の価値は私の人格によって無

限に高められる。この人格において、道徳的法則は動物性から、そしてまた全感性界からさえ独立な生命を私に啓示する」とある。

かの偉大な哲人は、人間行為の前提となる道徳法則が、先天的に実在することをみぬいていた。しかも、この道徳律が、「動物性から独立な生命を私に啓示する」と明言するのです。

――人間にそなわった〝実践理性〟が、遠い昔の人びとの心にめばえ、精神生活をささえつつ、人と人との連帯を可能にしたのですね。

池田　念のためにもう一度くり返すが、人間的な営みの底には、知性、理性、自己意識などの強力な発現があった。この事実をみおとしてはならないと思う。知性とか自己意識なども、その可能性というか、潜在的なものとしては生物進化の段階において、あらゆる生物の生命的内奥を流れつづけてきたと思う。だが、人間生命誕生までは、本能的衝動などと一体であり、知性としての独自の働きを発現することはなかったのではないだろうか。いいかえれば、生物学的な本能の陰にかくれていた知性の光りが、人間生命の形成とともに、本能の

なかから輝きはじめたのです。知性の光りが輝きをまし、内なる道徳律が姿をあらわすとき、人類は、類人猿との訣別の道をえらびとったのです。

――少し疑問におもえることがあるのですが、人類の祖先が、ドリオピテクスの時代に、人類進化へむかいはじめたときに、すでに私たちと同じだけの知性、理性をそなえていたのでしょうか。オーストラロピテクスやネアンデルタール人でさえも、復元像を書物などでみますと、あまり、知性的な顔はしていないように思えるのですが――(笑い)。

池田　たしかに人類よりも、チンパンジーに近いような面影も残ってはいるね。

しかし、人類学者、フットンが「一個のネアンデルタール人の頭蓋骨をみて、チンパンジーの顔と哲学者の顔とのどちらでも容易に形どることができる」とのべているように、チンパンジーに近い顔だから知性的でないとはいえない。かえって、それゆえにこそ底知れない知性を想像させる場合があるものです。

――でも、知能の発達とほぼ平行すると考えられる大脳の大きさですが、

オーストラロピテクスでは、五百ccぐらいです。チンパンジーで、三百から四百ccですから、かなり大きくはなっていますが、それでも、現生人の三分の一しかありません。ホモ・エレクトゥスで千cc前後、ネアンデルタール人になってようやく、私たちと同じく千五百ccぐらいになります。すると、オーストラロピテクスあたりでは、まだ、知能水準はあまり高くなかったと推測せざるをえないのですが——。

池田　そのとおりでしょう。だから、千万年ほどもさかのぼった時代の始祖たちは、荒けずりの石器とか、また、自然のままの石ころを使用したにすぎなかったのです。しかし、彼らは、少なくとも類人猿とは明確にたもとをわかっていた。

たしかに、かれらの知能水準は、ホモ・サピエンスにくらべれば、比較にならないほど低いものだったでしょう。だが、彼らの生命の内から姿をあらわしはじめた〝知性の火〟は、徐々にではあるが、それ以前の長い生物進化のゆるやかな勢いにくらべれば、めざましい速さで燃えさかろうとしていた。〝知性

の火〃が、勢いをますにつれて、その発現を可能にすべく前頭葉の発育が促されたのではないだろうか。もし、わかりやすい類推の例を出すことを許されるならば、私は、次のような説明を試みたいと思う。

人間の赤ん坊の知能は、表面からみるかぎり、類人猿の子供とあまり変わらないであろう。言葉も話せないし、歩くこともできないし、ただ本能だけで生きているようにみうけられる。しかし、その頭脳のなかには、人間としての未来の可能性はすべて具わっているはずです。いいかえれば、人間的な生命活動を営むための素質は、生まれおちたときに、すべて与えられているのです。

――チンパンジーの赤ん坊ですと、どんなに努力して育てても、やはり、チンパンジーどまりですね（笑い）。

池田　人間は、どんなに未熟であり、野蛮にみえても、人間としての特質をそなえているはずです。オーストラロピテクスの生命にも、知性と道徳の〃人間の火〃が輝きはじめていた。ただ、彼らの脳の構造が、知性の開花をおさえていたのであり、本質的な潜在力は、現代の私たちと比較してもけっしてみお

とりするものではないと思う。

――よくわかりました。だから、大脳容量の増加につれて、知能の水準が高まり、それに応じた文化を形成することができたのですね。

池田　人類進化の様相を注視すれば、以上のように考えざるをえないのです。

人類誕生の条件

――ここで、もう一度、人類の歩みと類人猿との道がわかれていった、そのときにもどりますが、人間生命には、何ゆえに、知性などの〝人間の火〟が輝きをましはじめたのでしょうか。生物の進化について、突然変異とか、自然淘汰とか、適応などといった進化論的な原理がありますが、そうしたものによるのでしょうか。

池田　ダーウィン以来の、伝統的な進化の理念ですね。

――正統的なダーウィニズムでは、生物の進化は、まず、第一段階として、遺伝子のなかに突然変異がおきまして、そこに環境からの自然淘汰が働く。そして淘汰によって選ばれたものが、遺伝を通して、次の世代へと伝えられる、

と主張しています。遺伝子の突然変異は、まったくアト・ランダムにおきますので、環境にうまく適応するかどうかは不定です。大部分の突然変異は、環境によって除かれてしまう。

そのうちに、まったく偶然の出来事ですが、環境にうまく適応するような突然変異がおきることもある。すると、変異をおこしたほうの生物が、元の主人公との生存競争に勝って、ぐんぐん繁殖していくのだとします。この理論を、人類の出現にあてはめますと、私たちの祖先が類人猿とたもとをわかったのは、偶然にも、人類進化へとむかう突然変異がおこりえたからだ、という結論になりそうです。

――ところが、今西錦司博士は、ダーウィンよりもラマルクを評価しますね。ダーウィニズムでは、環境が主導権をにぎっていて、生物の生命がもっている主体的な働きが無視されている。

池田　突然変異体は、あらゆる方向に出現するけれども、そのなかで、よく環境に順応しえた者が、生存闘争に勝利をえて栄えていく。そうすると、一個

の生物が、生きつづけられるか、それとも敗者の憂き目をみるかを決定するのは、環境条件次第だということになるね。

――ラマルクは、徹底的に生物の生命の主体性を強調します。つまり、環境と生物は、たがいに関連し合い、環境が変われば、それに応じて生物のほうも変化していく。ゆえに、進化を進めている主体者は、常に生物自身だということになります。

――ラマルクの考え方に立ちますと、突然変異にも方向性がでてきますね。

――今西博士の説を紹介しますと、もうずいぶんポピュラーになりましたが、〝多発突然変異説〟があります。正確を期すために博士の著者『私の進化論』から引用します。「生物の種は環境の変化に適応するため、まず、突然変異の頻度を高める。次には現われてくる突然変異を、適応の方向に沿うようにする。たくさんの個体がいることだから、この際適応の方向にむかってなにほどかのばらつきが生じてもやむをえない。適応の道にそって同一方向にむかい、小きざみながらも突然変異を重ねていくうちに、種の個体は新しい適応型に変

わっていく。この際も個体によって変化に多少の遅速ができることはやむをえない」と記されています。これで、種をこえるような大きな進化の説明にはなりそうです。

池田　なるほど。一定の方向にむかった突然変異が、連続して多発する。人類への進化の場合も、大脳容量を増加させ、人間性を触発するような突然変異が、連続的におこったということになるね。

――私、今西博士の学説をきいていまして、ふっと想起したことがあります。『ホモ・サピエンス？』という題名の本に書かれていたことです。「？」をつけたところに、著者の心情がたくされている(笑い)非常におもしろい書物です。

その著書によると、人類が誕生した頃は、地球の気温が次第に寒冷化にむかっていたそうです。この寒冷化のため、人類と類人猿との共通の祖先が住んでいた森が縮小しはじめ、食糧もとぼしくなった。

池田　その頃、ヒトの先祖だけが、森をはなれて地上におりたったのだね。

――この著者の考えは別にあるのですが、多くの学者は、気候の変化にともなってやってきた飢餓が、彼らを地上に追いおろしたのだと説明しています。

池田　地球的な規模の気象変動への適応ととれるでしょう。でも、地上には、どうもうな野獣が、わがもの顔に横行していたはずだ。軽はずみに、森からおりると、たちまちにして、肉食獣のえじきになりかねない。

――だからといって、森にしがみついていたのでは、深刻な食糧危機におそわれます。それでも、森の縮小とともに移動していけば、個体数の減少という事態にあいながらも、細々とした生活だけはたもてそうです。こうして、人類の祖先以外の生物は、森に残って、いまでは、オランウータンとかチンパンジーになっているというわけです。

ところが、人類の始祖だけは、生存にかかわる危機にめぐり合って、主体的に、環境の悪条件をのりこえようと試みた。つまり、みずからの意志による〝決断の時〟をもったわけです。

――その決断をしたということが、生物学的に表現しますと、ある一つの

生命体に突如として生じた変異といえるわけですね。人類への第一歩をふみ出す突然変異が、つづけざまに生起し、一群の生物の集団が、未熟ながらも、人間としての輝きをましていった。それが類人猿の道と離れた人類の集団であった、と理解できそうです。

池田　動物性から人間らしさへの決定的な第一歩を、連続的に生起する突然変異としてとらえることも、たしかに可能でしょう。しかし、人間の道への生命自体の躍動は、かつて、生物進化の過程で、数限りなくおきたであろう新しい種の形成とは、ことなる色彩をおびていたのです。

かつての生物進化をおしすすめ、新種への生命の飛躍をおし進めたものは、主に身体的な衝動であり、本能であったと思われます。ところが、動物から人類への進化上における生命の飛躍を貫くものは、単なる動物としての無意識的な本能ではない。生物進化のなかから姿をあらわしつつも、それを凌駕した特質を示す、知性の光りであり、自由なる意志であったのです。

――シャルダン流にいえば〝精神圏〟の形成ですね。

池田　いいかえれば、人類の始祖にうかびあがった〝開拓者の魂〟が、生物進化をのりこえて、人類進化の道を切り開いたのだと思う。

もちろん、この地球上における生物進化の三十億年にも及ぶ長い旅路がなければ、人類進化への扉は開かれなかったであろう。しかし、生物進化の単なる延長線上に、人類進化を位置づけることは、私はけっして当をえてはいないと考える。たとえ、それが、多発連続突然変異のなせるわざであるとしても、生起する変異の質的相違を不問に附すわけにはいかないと思うからです。

――先ほど紹介しました『ホモ・サピエンス？』の著者も、生命内奥に実在する「心」をとりあげ、「天才の狂気」とか、「開拓者魂」とかいったふうに表現しています。「狂気」などというと精神病者とまちがわれそうですが、当然、逆説的な表現です。「殺し屋たちの横行する地上への進出は、第三者の眼には、〝無謀〟と写ったにちがいない」とのべていることからも、他の生物の先祖の立ち場にたった言葉だと思います。

著者の論述にしたがっていきますと、――卓越する能力の持主はひるむこと

をしらなかった。彼は――人類の始祖のことです――まず、武器の発明に力をそそいだ。殺し屋どもの鋭い牙や爪に対抗しうる武器が是非とも必要であったからである。戦闘面が強調されていますが、生存競争の観点からはうなずけるでしょう。彼は、知性をかたむけて苦吟した。そして、天才者のみに閃くひらめきが、彼に、「棍棒」と「石」を教えたのである。だが、それを有効に使うためにはどうすればいいか。二本足歩行という至難のわざを、訓練を重ねて身につけていった――というのです。

池田　うむ。手を自由に動かすために、二本足歩行を企てたという推論は、おもしろいね。

――そのあとに、著者の感想が付記されています。二本足歩行を企てたことは、「驚天動地」の天才的発想であった。以来、それ以上の大天才は生まれていない、と――(笑い)。

池田　表現が、じつにうまい。少し、ドラマチックすぎる感がないでもないがね。まあ、人類生誕の具体的な情景は、著者の仮説に近かったかもしれない。

――このあたりで、人類誕生の条件となったものを整理してみますと、まず、生命発生以来の生物進化が必要であった。

池田　必要不可欠の条件です。

――それから、気候の変化とか、外界からの圧力も欠かせないですね。

池田　森の楽園がずっとつづいていれば、おそらく、〝開拓者の心〟も眠りつづけていたかもしれない。

――でも、他の類人猿たちと同じ条件にありながら、われわれの祖先だけが、人間性を獲得している。知性、理性、倫理、意志、精神といったものが、人間たるべき内的な推進力であり、人の道へと通じる偉大な扉を開く〝鍵〟であることはわかるのですが、人類の始祖たちが、いずこからその〝鍵〟を手に入れたかという本源的な問題は解決されていませんね。

池田　それが最大の謎だね。この問題を解く手がかりはまったくといってよいほど、何もないのだが、間接的な解明のデータはないわけではない。残念ながらいまのところ、太古の人びとの生命の内側をしるべき資料は、学者たちの

間からも、ほとんど示されていないのです。

人間の心は、そのままでは形としてのあとを残さない。大昔の人びとの心にいかなる感情がわきおこっていたか、また、いかなる知識を蓄え、いかなる思想をはぐくんでいたか、などとなると、ほとんど暗中模索といったありさまです。

それにはドリオピテクス、せめて、オーストラロピテクスあたりの資料がほしいところだが、現在、考察の対象としての、ある程度の価値を有するデータは、ネアンデルタール人のものが最も古いと思われる。

――ネアンデルタール人といいますと、「生と死」の章で出てきましたソレッキー博士の業績が光っていますね。

池田　私も、ソレッキー博士の提示している資料を手がかりにしたいと思う。「生と死」のところでもふれたことだが、博士は、中近東イラクにあるネアンデルタール人の遺跡を発掘して、ネアンデルタール人たちが墓のまわりに、野菊やすみれの花を供えていたことを指摘している。

このことから、死に対する何らかの意識が彼らにあったと解釈しているわけです。

本能のままに生きる動物は、死を意識することはない。すべての生物が、死をまぬかれえない存在でありながら、ただ、知性、精神の火をともした人間のみが、来たるべき死を自覚している。

他者の死は、いやでも、みずからの未来を予測させずにはおかないものです。昨日までの友が、いまは生の鼓動を失って何の反応も示さない。あれほど、たがいの情をかわし合った親と子、夫と妻、恋する男女の間をも、死は無残に切り裂いてしまう。死者への愛着が深ければ深いほど、残された者の心は傷み、人の世のうつろいやすさに愕然とするのではなかろうか。

――死ほど、絶対的なものはありませんから――。

池田　太古の人びとも、生と死の実相におもいなやんだにちがいない。「死とは何か」「生とは何か」といった人類永遠の課題は、現代人のみならず、人類の始祖たちの胸奥にも深い影をおとしていたであろう。

一瞬のゆだんが、たちまちにして、彼らの生をうばいさっていった。また、学者の説によれば、平均寿命も三十歳をこえてはいなかったともいう。ひとたび、大自然の猛威がおそいかかれば、集団全員が絶滅の危機に追いこまれないとも限らない。つまり、彼らにとって、死は、現代人には考えおよばないほどの恐怖のまとであり、また、日常生活のなかに深い根をおろしていたのです。

――現代の私たちのように、死のことは忘れて、生に埋没しようとすることもできないでしょうね。

池田　だが、それだけ痛切、深刻な死の自覚であったればこそ、それは、生死への思索を深めずにはおかなかったと考えられます。

死せる者は、いったい、いずこへ去っていったのか。死は、人の生命を〝無〟に帰してしまうのであろうか。それとも、死者には生者の思考をこえた世界があり、死者の国は永遠につづくのであろうか。こうした、太古の人びとの思索の激闘は、彼ら自身の英知をみがき、直観智の光明を強める結果をもたらしたのではなかろうか。

ネアンデルタール人は、死後の世界を信じていた。死は、この世の生をうばい去りはするが、人の生命を〝無〟へとおとしいれるものではない。むしろ、死は、一種の眠りに近いのではないか、と彼らは考えたらしい。

――それは、どのような証拠からでしょうか。

池田　ネアンデルタール人のつくりあげた文化を、ムステリアン文化というが、その名前の由来である南フランスのル・ムスチェの遺跡から、十八歳の少年の墓が発見されている。少年は横むきにねて、ひざをまげ、ちょうど深い眠りに入った様子をしていた。火うち石の剝片をつんだ〝まくら〟までしていたという。

また、ある洞穴では、二人の大人と四人の子供が、東西の方向に並んで、眠ったような姿勢のまま発見されている。周囲には、数々の石器とか、動物の骨なども一緒にうめられていたともいう。このような遺跡の発掘から、いまいったような思考が推測されるのです。

――彼らが、死を眠りに近いと考えていたことはわかりましたが、では、

眠った生命はどのような状態にあると信じていたのでしょうか。

池田　その前に、もう一つ重大な示唆を与える遺跡の話をしておこう。これもソレッキー博士の発見によるものだが、四十歳の男子の骨格について興味深い推論をしている。その男性は、腕の肘関節から下のところが切断されていた。明らかに、現代的にいえば「外科手術」が行なわれたことを示しているという。しかも、重要なことは、四十歳といえば、彼らにあっては、かなりの老人に属するわけだが、このように自分一人では、とうてい生活できなかったであろう老人を、その生のおわりまで面倒をみていたふしがあると、科学者たちは言明している。

――いまの言葉で表現しますと、一種の社会保障ですね。

池田　病弱者とか、老人とか、ともかく、一人では生きていけない人たちを、ネアンデルタール人は、集団の力でまもりあっていったことが推測されるのです。

親と子の愛ならば、動物の仲間にもある。しかし、社会のなかの弱き者を、

すべての人の協力でまもりあうという行為は、かのカントのいう〝わが内なる道徳法則〟がなければ、とうていなしうることではあるまい。

かの人びとの生命には、生死流転の秘密をなんとか解こうとする知性とともに、実践理性としての道徳律が脈打っていた。心の底から、自然のうちにうかびあがる道徳法則――それは、いったい、いかなる実在からわきいだすものであろうか。こうして、太古の人びとの思索は、死を通して未来にむかうと同時に、道徳、倫理の根を求めて、自己の生命の奥深くわけいったのです。

――たしか、「生と死」のところでは、彼らが人間生死の基底にみいだした実在を、ソレッキー博士は、「天」と表現しているとうかがいましたが――。

池田　博士のいう「天」とは、万物をささえ、その底流に脈動する実在であり、大自然の変転をつかさどる実在としての宇宙生命を意味しているように思う。大昔の人びとは、自然の脅威にさらされつつも、その苦難をのりこえる能力を生まれながらにしてさずけてくれた根源的実在への畏敬の念を忘れることはなかったのです。

ネアンデルタール人は、死への思索をバネとして、直観的な英知を、自己の生命と大自然の流転の内奥にさしこんだのではないだろうか。もちろん、彼らには、科学的な分析能力などはなかったであろうし、論理的な思考も未熟なものでしかなかったと思われる。しかし、彼らの体当りともいえる、根源的なものへの肉薄は、むしろ現代の私たちよりも勝れていたとさえいえるでしょう。

かの人びとは、直観的に、「天」なるものの実在を感じとっていた。しかも、ネアンデルタール人は、粗雑ながらも言葉を駆使したというから、みずからの実感や思索の成果を他の人びとにも伝えることができたでしょう。むろん、十数万年後のいまとなっては、博士のいう「天」を、彼らがいかなる言葉で表現したかは知るよしもないが、それでも、彼ら仲間には通じる一つの言葉が使われたであろうということだけは、否定できない事実のような気がする。

――そうしますと、墓を花でかざる儀式はたしかに、死者の冥福を祈る気持ちをあらわしたのでしょうが、その底には生と死をともにささえる宇宙の実在といったものの考え方があり、それが前提となってなんらかの気持ちを捧げ

る行為となったともとれますね。

池田　そうです。それでこそ、死は一種の眠りであると信じた彼らの心情を、より正確に理解することができるのではないだろうか。つまり、死は、みずからを生みだした本源的な生命への帰還であり、無限の過去から、生きとし生けるものの生死流転をおりこんで流れゆく宇宙本源の生命に憩うことであると、心の底から信じていたのです。

――宇宙生命との邂逅（かいこう）への信念は、もう知性や倫理の領域さえものりこえていますね。

池田　そうです。宗教的な心情であり、いや、宗教そのものであるといっても過言ではないでしょう。多くの学者が、ネアンデルタール人の心には宗教的な衝動がうずいていたといっていますが、私にはさもありなんとおもえるのです。

――次に、現在の人類つまりホモ・サピエンスの直接の祖とされているクロマニョン人に移りたいと思います。クロマニョン人は、じつにすぐれた芸術

作品を残していますが、そこに託されているのは宗教的な情想であり、祈りであるといわれています。

池田　クロマニョン人は、アルタミラ洞窟の壁にえがかれたバイソンの絵をはじめとして、多くの絵画と彫刻を残しています。彼らの芸術的な才能もさることながら、数々の作品にあらわれた、複雑な精神生活には目をみはるものがあるようです。

――洞窟芸術は、宗教的な儀式に使われたと聞いています。たとえば、狩猟にいく前に、一種の儀式をおこない幸運を祈ったというのです。

池田　呪術的な儀式だったのかもしれないね。呪術は、幸運への願望をあらわしている。とともに、原始的な形をとってはいるものの、獲物となる生物の生命にみなぎる大自然の力への畏敬の表現であり、それとの関わりを求める人びとの心情がたくされていることもみのがせないでしょう。

呪術だからといって、すぐ幼稚だ、原始的だと片づけるのは誤りです。呪術として表面化した古き時代の人びとの心の底にうずまく情念を無視すべきでは

ないでしょう。

――ネアンデルタール人とかクロマニョン人の生命に宇宙生命の脈動が、彼らなりの方法でうつしとられていたとの考察は、よく理解できましたが、オーストラロピテクスあたりではどうでしょうか。

池田　先ほども言ったように、二百万年ほど以前ともなれば、心の内面を察知できるだけのデータの発見はきわめてむずかしい。ほとんど不可能だとも思われる。

おそらく二百万年以前の人びとの場合、無意識的な衝動によって何らかの形で、宇宙生命なるものの脈動を感じていたことも考えられます。

たとえかすかな光りであろうと、また、いかに微弱な胎動であろうと、〝知性の火〟が姿をあらわしているところには、死に対する自覚が胸をよぎっていく。また、もし、道徳、倫理の内なる法則がめざめていたとすれば、その源を求める知恵が動きだす。この生命の厳とした法則にあてはめれば、人は人となるとき、すでに、宗教的な心情がうごめいていなければならない。

いや、人間生命の実なる相におもいをめぐらせば、人の心に、〝知性の火〟が輝くことと、本源なるものへの肉薄を求める宗教的な心の胎動とは、まったく同時でなければなるまい。ただ、知性、倫理などの発動は、外界に、道具や言葉として表現されるゆえに、後世の人びとが、その証拠を発見することができるのに対して、宗教的な衝動はあくまで内面的な出来事であるために、実証をえることはきわめてむずかしいだけの相違であろう。

――最後の質問になりますが、人類誕生の時点で輝きをましはじめた知性、理性、倫理などと、宗教的衝動との共通の源泉は、どうやら、当の宗教心が帰っていくであろう本源的な宇宙生命自体である、と結論できそうですね。

池田　人間生命の側からいえば、知性などと宗教的心情の胎動は同時です。しかし、万物の底を流れる悠久なる宇宙生命に考察の視点をうつすとき、人の生命にあらわれつつも、瞬時にして帰還を求める宗教心こそが、生命の内奥からの知性の発現を呼びおこす力であり、倫理の法則をわきあがらせる泉であることが明確に理解できるでしょう。

それは、人間の生命において、知性、倫理、良心よりも、宗教的な心情のほうが、より深く、そして、より本源的な位置をしめているからです。いいかえれば、人間が人間としての道を歩むべく、人類への〝扉〟を開く〝鍵〟は、知性でもなく、良心でもなく、じつに、宇宙本源の生命からわきおこる宗教的な衝動であり、生みの親への復帰を希求する生命奥底の宗教心だと推測するほかはないようだね。

私は、先ほど、人間は、知性を駆使することによって人間になるといった。それに間違いはないのだが、ここまで考察を深めてくれば、次のように主張し直さねばなるまい。つまり、人は、宗教心を宇宙生命から強力にくみとることによって、はじめて人となると――。

――もし仮りに、この宇宙空間のなかで、ある生物が、宇宙本源の生命にふれ、そこから、宗教心をくみいだすだけの条件がととのった場合、人間的な生命をえるのでしょうか。

池田　宇宙のいずこにおいても、生きとし生けるものの生死流転の底に、宇

宙本源の生命が息づいているかぎり、その生命にふれるところには、宗教的心情の胎動があり、偉大なる進化の飛躍が促されるはずです。地球上における場合には、最も原始的な生命が姿をあらわしてから、三十億年にも及ぶ生物進化の基盤があった。その底には、たえず、宇宙本源の生命の脈動が波うっていたと思う。

そして、人類の誕生において、宇宙生命の波動は、かつてないほどの高まりをみせ、さまざまの外的な条件をうけいれつつ、しかも、それらの条件に触発されながら、生物進化を人類進化へと飛躍させていった。この事実を、人間生命の側からみれば、宇宙本源の生命への、深く強烈なきずなを結んだことを意味する。こうした生命飛躍、人間的生命誕生への基本的な原理は、たとえ、人びとの探索の手がとどかぬような大宇宙のはてであっても、普遍的なものとして通用するのではなかろうか。本因となる宗教的な力と、さまざまの条件との、密接不可分のかかわり合いのなかから、知性、倫理の〝人間性の火〟をいだいた生命がうぶ声をあげていくのです。

永遠の生命〈1〉

「有情」から「非情」へ

――いまも記憶に新しいことですが、一九六七年の暮れも押し迫ったころ、南アフリカの病院で、世界最初の心臓移植手術がおこなわれました。執刀者は、クリスチャン・バーナード博士です。角膜とか、血管とか、腎臓などの移植はそれまでにも数多くなされていたわけですが、心臓移植には、他の移植手術とはちがった意味での課題が含まれており、そのため、この手術は非常に大きな関心を集めたのです。

池田　心臓移植ともなれば、人間の生と死という根本的な問題が絡んでくるということだね。

――ええ。腎臓の場合ですと、私たちの身体には二個ありますから、一個

を取りだしても、それで、生を断たれるわけではありません。ところが、心臓の移植は、一人の人間の死を前提にしてはじめて成立します。心臓を提供した方の人は、ふたたび、生を営むわけにはいかないからです。そのかわり、新しい心臓を受け入れた生命体は、とだえかけていた生の鼓動をよみがえらせることができます。ここに、心臓移植のねらいがあるのですが——。

池田　死んでまもない人の心臓によって、心臓を病んでいる人を死から救おうという医学者たちの目標とするところはよく理解できます。しかし、注意しなければならないのは、もし仮りに、その死の判定が誤っていて、死をむかえる以前の生命体から心臓を取りだすことがおきたとしたら、これは大変なことだ。しかも、この死の判定ということは、じつはきわめてむずかしい。

——合法的な殺人行為にもなりかねません。

池田　そのとおりです。一方で提供者の死の判定を誤り、そのうえ手術が失敗に終わったという最悪のケースを想定すると、その手術は、提供者と受容者の、二つの死をまねいたということになってしまう。移植される心臓が、まだ

充分に機能を果たせる新鮮なものであることが要求される心臓移植は、まず第一に、人間の死とはいったい、どこで判定されるべきかという問題をあらためて提起しているわけです。そこで、まず、医学では死をどのようにとらえているのだろうか。

――私自身、医学を学んでいますが、じつは、そこのところが、私も疑問なのです。医者が死を知らないというと、不思議に思う人もいるでしょうが、どの医書をひもといてみても、死を定義した個所はないのです。それどころか、どういう現象が起きれば死と考えるか、ということすら明確ではありません。ただ習慣的に心臓の停止、呼吸の停止、それから瞳孔反射が消失すること、これらが死の判定のための条件とされているだけです。したがって、一般の医者は、聴診器で心臓の鼓動を聞き、脈搏をはかり、そして、懐中電灯を点灯させて瞳孔反射をしらべます。すべてが消失していると、死の宣告をします。

――バーナード博士は、脳波をとって、その消失をもって死と考えたのですね。いわゆる心臓死説に対して脳死説と呼ばれていますが。

――皮肉な見方をしますと、心臓がとまってしまったのでは、心臓移植は不可能です。できるだけ新鮮な心臓を得なければならない。そこで人間が死んで、なお、心臓が動いている状態となりますと、脳死説をとらざるをえないのです。

池田　大脳皮質の脳波がいったん消えたとしても、ふたたび正常な生命活動に戻るというケースもありうるでしょうね。

――脳の専門家が、脳死説に反対するのは、ほとんどの人たちが、脳波がフラットになって以後、立派に生きかえった実例を体験しているからです。一つだけ実例をあげますと、東京虎ノ門病院でのデータがあります。脳波がフラットになった患者、十五人のうち、そのまま死亡したのは十人で、あとの五人は、脳波がふたたび復活したというのです。そのなかの二人は、いまも元気で働いているとのことです。

池田　たとえ百人に一人でも、蘇生した実例があったとすれば、その復活の可能性の道をとざすべきではない。私は、そう考えるのが正しいと思う。まし

て十五人中五人、三分の一という虎ノ門病院でのデータを考えるなら、脳波が消失した時点をもって、人間の死と定めるのは、あまりにも早計すぎるといわざるをえません。私には、脳死説は、人間の死についての十分な理解にもとづいているとは、とうてい考えられないね。

――ところで、いま話し合ってきたことは大脳という部分的細胞の死のことですが、ひろく身体全体をみた場合、個々の細胞はたえず生死をくりかえしているわけです。そうした個々の細胞の生死と、私たち自身の生死とは明らかにことなっていますね。

池田　皮膚の細胞などは、毎日入れかわっているでしょう。

――それから、胃腸とか呼吸器の粘膜細胞も激しい新陳代謝をおこなっています。肉体の全部をとりますと、毎日、何千万という細胞が死に、新しいものが生まれている計算になるそうです。もし、六十兆にもおよぶ全身細胞とともに、人間生命が生死をくりかえすとすれば、忙しくて目がまわりそうです。

池田　根本的にいうと、私たちの身体を形づくっている個々の細胞が生死を

くりかえすからこそ、人間生命は生をたもちうるのです。莫大な数の細胞の死が、私たちの生をささえているとも表現できましょう。

――極端な場合には、胃潰瘍とか、癌などは、外科的に除くことによって、かえって、全体の生命をまもる――。

――手足でも、肉腫などの悪性のものができますと、そのつけ根から切りおとしてしまう場合があります。残忍なようですが、そうしなければ、私たちの生を保つことができないからです。

池田　あくまで、人間生命の生と死は、生命全体の問題であって、個々の部分の生死とは別のものである。――この点をまずはっきり認識しなければならない。

したがって、私たちが「生きている」とは、身体を形づくっている細胞とか臓器などの生死を包含しながら、それらの営みを統合し、秩序だてて、全体としての生を創造している事実をさしていると考えられる。いいかえれば、身体を統一する生命自体の働きが、活力にみちて全身をひたしている姿こそ、生き

ていることの証しなのです。

――そうした統一体としての生命体は、その生を維持するため、外界にも積極的に働きかけていきますね。

池田　生命のもつ能動性です。この統一性と能動性は、紙の表と裏のような関係にあり、統一のとれた生命的存在ほど、能動的な営みを持続することができます。

――とくに人間の生命は、精神作用も活発ですね。喜怒哀楽の感情をおりなし、種々の欲望とか衝動のエネルギーがうずまいています。さらにその上に知性とか理性が発達をとげ、知識や思想をうけ入れたり、外界の様相を認識したり、また、自己の生き方を反省したりします。睡眠時は、覚めている状態とはちがいますが、それでも、夢をみたり、寝ごとをいったり、新しい発想がはっと浮かびあがることもあります。意識の部分は眠っていても、その底にある無意識の心が、かえって生き生きと働いている場合があります。

池田　人間の生命における「生」の証しは、色心両面にわたるものです。し

かも、身体と心は、相互に精妙な関連を保ちながら、内的な統一性と外界への能動性を高め、創造的な調和をかもしだしている。こうした「生」の現象を、仏法に説く「三身論」にてらしてみると、細胞を形成し、その生死や物質の新陳代謝をおりこみつつ、全体としての身体を統合し構成していく、その働きをさして、「応身」と呼ぶことができるでしょう。

――そうしますと、「応身」とは肉体である、ということはかならずしも適当ではないわけですね。

池田　そう。肉体そのものというより、生命の物質的側面――つまり肉体を形成し、営んでいる働き自体を「応身」とするのです。細胞、臓器などは、それ自体が一個の生命体です。だから、生と死をくりかえすのですが、人間生命は「応身」によって、これらの生命体を統合して、人間の身体となすのです。

――すると、「報身」とは、知識とか思想とか、記憶そのものをさすのではなくて、知識を吸収し、記憶をとどめ、感情とか衝動をつき動かす心の働きを意味すると考えられますね。

池田　そうです。そして、こうした「応身」、「報身」となってあらわれる生命内在の発動性の中核を、「法身」と名づけるのです。「法身」を現代用語で表現すれば、生命の「我」、もしくは、生命の「核」といえましょう。

天台大師の『摩訶止観』には「境につくを法身となし、智につくを報身となし、用を起こすを応身となす」と記されている。この文章からすれば、生命を客観視して、実体をとらえた場合は「法身」です。つまり、肉体と精神の働きを起こす発動性の「核」を「法身」とするのです。

「報身」は、心法にそなわった智慧であり、「応身」は、色法のおりなす身体活動といえましょう。私たちの生命には、「法身」、「報身」、「応身」の「三身」が、渾然一体となって常住し、ありとあらゆる活動をおりなしているのです。

――「三身論」にてらした場合の「生」の姿はよくわかりました。次に、いままでの考察を基盤にして、具体的な実例に即して、死の問題を考えていきたいと思います。たとえば――医学では植物人間と命名していますが――脳波は消失しているけれども、身体各部の細胞や器官は活動しているという場合、

この人は、生きているのでしょうか。それとも「死」と考えるべきでしょうか。

池田　意識作用をつかさどる大脳自体については「死」というべきだろうが、身体全体としては、まだ「生」の領域にある――ということでしょうね。生と死は、ある時点で、一瞬のうちに入れ替るものではありません。私たちの生命は、生から死へと、徐々に移行していく。もっと正確には、生を営む生命主体の内部から死の影がうかびあがってくる、ともいいあらわせましょう。そうしたメカニズムを理解するための類推のヒントは、自然界の営みのなかにもいくらでも見出せるのではないだろうか。

たとえば、砂漠のなかにオアシスがあったとする。オアシスの中心部には、豊かな水源があり清浄な水が周辺をうるおしている。それによって、木々の緑がはえ、草花が咲きみだれ、小さな動物たちが生を謳歌しているであろう。オアシスの「生」の姿です。ところが、泉からの水の流出がとだえ、ひからびてしまったとする。時がたつにつれて、草木が枯れ、小動物も死に絶え、オアシスはあとかたもなく消え去ってしまう。かつて、オアシスの存在したところに

は、砂漠の熱風が吹きあれるばかりである。いま、オアシスを一つの生命体ととらえよう。水源からの水にささえられて、草木は季節の推移をあらわし、小動物は親から子へと代々入れかわり続いていく。つまり、オアシスという全体の生のなかに、個々の生の営みが保たれていく。

――人間生命との類似点を考えますと、動植物は、細胞とか、器官に相当するわけですね。

池田　水源は、生命の「核」であり、「法身」にあたります。そこから流出する清水は、色心にわたる統合力であり、その機能をつかさどる能動的な働きを意味しています。つまり、「応身」と「報身」です。そうすると、人間生命の死とは、オアシスをうるおし、ささえる水源からの清水がおとろえ、やがてとだえてしまうという現象に比することもできるのではないだろうか。まあ、これも、一つの譬喩にすぎないが、生死を思索する参考にはなるでしょう。

さて、本筋にもどって、植物人間における「三身」について検討してみることにしたい。

――植物人間では、すでに大脳皮質での脳波は、測れなくなっています。いいかえますと、私たちの知性とか感情とかの座である大脳皮質の働きは消え去っています。

――しかし、個々の脳細胞まで死んだわけではないでしょう。

――一つ一つの脳細胞はまだ生きています。ですから、ふたたび人間としての精神活動をよみがえらせる可能性もあるのです。ただ、そうした何億という脳細胞を統一し、連合させる力が失われているのです。

池田　大脳皮質自体についての「応身」の力が消失しているのですね。元気な生命活動を営んでいるときには、とうぜん「応身」の統一性は、前頭葉をはじめとする大脳皮質全域に浸とうしている。ところが、植物人間では、「応身」の統一力というか、発動性が弱まって、大脳皮質までおよばない状態でしょう。

――オアシスの例で説明しますと、源泉の噴出力がおとろえて、生命をうるおす水がとだえかけている。泉から少しはなれたところにいる生物にまではとどかない状況のようですね。

池田　生命の「我」は、それこそ渾身の力をふりしぼって、色心への発動力を高めようとしている。しかし、色心の統一性は、脳幹ぐらいまでしか、その現実の影響力を与えることができない。いわば、植物人間の「我」は、かろうじて脳幹でふみとどまって生きようとしているのです。必死になって「生」の力を回復しようとしているのだと私は思う。ゆえに、脳波が消失した状態の生命は、死に追いこまれつつも、生へむかおうとしている。その生を奪い去ることは、どう理屈をつけたとしても、殺人行為に等しいといわざるを得ないと私は思う。

――私も同意見です。外面的には、死の様相を示しはじめていても、身体内部での「生」への志向を無視してしまうことは許されない気がします。

池田　「応身」は「死」と戦っている。同じように、「報身」も、迫りくる死の影に立ちむかっているはずです。

――植物人間の場合、意識的な働きはとだえていますが、その場合の「報身」とはどのように考えたらよいのでしょうか。

池田　意識の働きは、「応身」の力に支えられた大脳皮質を基盤としてあらわれる。植物人間では、「応身」の力は、脳幹あたりまでしかおよんでいないのだから、意識的な精神作用が顕現する場はすでに失われている。ちょうど植物の生と同じように、いかなる感情も、色心にあらわすすべを知らないであろう。いや、喜んだり、悲しんだり、怒ったりする心の波立ち自体が、意識の領域から消滅し、意識から無意識の底へとしりぞいているのです。

――しかし、意識の世界への波立ちは消えても、無意識界には、意識からしりぞいてきた欲望とか、衝動とか、情念とか、知性の働きなどが、一つの心的なエネルギーとなってうずまいているというふうに考えられます。

池田　そうです。たしかに、欲望とか、感情として意識することはない。植物的な生にまでしりぞいたとはいえ、さまざまな心的内容を含んで、「報身」の働きは、生命の内奥での脈動を放棄することはないのです。さらにいうならば、「報身」の働きが、すべて宇宙へとけこんだあとでも、その生命の奥底には「生」を志向する衝動がみなぎっているであろう。生存への衝動は、生命そ

れ自体の本質的力としてつきまとっているものだからです。ある生命体は、思いもしなかった「生」への衝動に身をやかれる実感を味わっているかもしれない。また、他の生命は、死におもむく自己の身体を凝視して、無念の「思い」にかられているかもしれない。あるいは、生命飢餓感におびえ、見知らぬ世界へと旅立つ不安におののいている生命の「我」もあるでしょう。今度は逆に、あらゆる感情や衝動の嵐がしずまったあとで、充実した自己に満足している生命主体もあれば、生死の恐怖をのりこえて、不動の信念に立脚している者もありうる。

このような感覚は、肉体的な痛みとも、精神的な悩みとも、悲しいとか憎いとかの感情ともことなっている。それは、すべての意識作用が無意識層に沈着したあとでわきおこるものであり、生から死へと移りつつある「応身」と「報身」をひきうけて、生命の奥の「我」が、何者に左右されることもなく、みずからいだかざるをえない実感なのです。「法身」のいだく生命感、とでも表現できよう。

――少し、話がさかのぼりますが、いま、ふっとおもいだしたことがあります。松田道雄氏の編集された書物のなかで『死―私のアンソロジー』と題する論文集があります。そこに、小林勝氏という作家の文章がのっているのですが、「死の幻影」とタイトルがうたれています。死の影を見、それを具体的に感じた体験の記録です。作家だけあって、読みやすく、しかも、じつになまなましく再現しています。

内容は、手術台にのぼりまして、苦痛の果てに現出する情景ですが、身体がこなごなに割れて、すっと飛びはじめるのを感じたというのです。そして、果てしない空間をとてつもない速さでとんでいく。あたたかい地球をはなれて冷たい無限の宇宙空間をとびつづけていく。前方に広がる宇宙空間は、うす青い色から濃青にかわり、黒々とした色につづき、そのきわみに死があると思った――というのです。

池田　この体験は、小林勝氏が宇宙の構造についての天文学的知識をもっていたからこのように感じたのだとも考えられる。これがすべてに共通するもの

だとはいえないでしょう。昔からいわれる三途の川とか、地下の黄泉にくだっていくという話も、おそらく、なんらかの体験的なものが反映されていると思われる。しかし小林氏の体験はそれらを思索するうえで重要な例と考えられるし、現代人にはむしろこの方が感覚的には合っているようだ。

――この体験にも関連しますが、「生と死」のところで、会長のあげられた故ゲッデス卿の実感では、肉体にともなう意識が分裂していくとありましたね。

池田　それを感じている意識がある。この後者の方の意識は意識といっても、表面的なものではなく、生命内奥の「我」のいだく実感と考えたほうがよい。「法身」のいだく実感というか、一種の「思い」が、肉体に即した意識の分裂をつかみとったのでしょう。まず、大脳にともなう意識がわかれ、それから、心臓とか腎臓とか胃腸などがわかれていくのを感じている。「応身」の統一性が失われていくプロセスを、生命の「我」がみつめているわけだ。

――それを小林氏は、身体がこなごなに割れる、と表現したのでしょうね。

――故ゲッデス卿は、より大きな生命の流れに合一していくとのべていました。

池田　人間生命の「応身」の力が衰えることによって細胞や臓器にともなう意識をきりはなしながら、地球と宇宙そのもののなかに流れこんでいくのです。ちょうど、オアシスをうるおしていた泉の清水が、その噴出力の衰えとともに、砂漠の地底を流れる地下流へとしりぞいていくことにもたとえられましょう。「応身」ばかりではなく、「報身」も、「法身」を中心に渾然一体となりながら、そのまま、宇宙生命に合流するのです。

――そうしますと、小林氏が抱いた、無限の宇宙空間をとんでいくとの実感は、宇宙生命に溶け入る自己の様相をあらわしたものと考えられますか。

池田　そう考えられます。生命は、死によって無に帰するのではなく、個体から、さらに広大な地球、宇宙へと合流していくと考えるべきでしょう。その様相は、次のようなたとえから思索すれば、やや明瞭になるのではないかと思う。本書第一巻の「身体と心」の章で、私は、人間生命の状態を、大海にうか

ぶ氷山にたとえました。氷山の海面からでている分野が、意識的な精神作用とそれにともなう身体の働きを示しています。海面下には、無意識の層が広がっています。

さて、死とは、この氷山がとけていくようなものではないだろうか。生命の海に、すっかりとけこんだ状態を、死と想定できましょう。もはや、氷山は、海面上にでていた部分も、水のなかにかくれていた領域も、すべて消失している。だが、無に帰したのではなく、生命の大海と一体となっているのです。

――ところで、小林氏は、そのときの実感を、自分も、地球も、宇宙空間も冷たいとのべています。冷えていくという感覚は何を意味するのですか。

池田　仏法では、あらゆる生命的存在を大別して、「有情」と「非情」とに、分類しています。

「有情」とは、文字通り、情のある存在であり、情熱、情念、感情を有し、意識的精神作用を営む生命体です。人間生命は、この「有情」としての働きをもっとも鮮明にそなえているといえる。これに対し、「非情」とは、意識とか感

情などが生命の奥に埋没した生命体です。植物などは総じて「非情」界ですし、無生物は「非情」そのものです。おそらく、小林氏の生命状態は、「有情」から「非情」へと、移っていったのです。こうした推移を生命の「我」は、冷たくなると実感したのではないだろうか。

ともあれ、私たちの色心は、みずからが「非情」と化すとともに、「非情」としての宇宙――つまり、物理的な宇宙――に合流していくのです。

冷たい地球、冷たい宇宙空間とは、まさに、物質としての星とか、空間を意味していましょう。植物的生をへて、物質にまで還元されてゆく人間生命は、「非情」そのものとして、「非情」の宇宙に合一するのです。

――もう一度、先ほどあげました小林氏の体験にもどりますと、そのつづきがあるのです。

冷たくなっていく自己には、どのような人間的感情も存在しなかった。さびしいとかつらいとか、悲しいとかいった感情は一切消滅していた。だが、ただ一つ残っていた「思い」がある。それは、何ともいえない無念さであった――

というのです。

池田　ほう、すべての情が消滅したあとで、かえって鮮明にうかびあがる「法身」のいだく生命感ですね。

――まさに生を終えんとするそのどたん場で、はじめて愕然として、言いしれぬ無念な思いを抱いて死に突入するほど、凝縮された絶望はほかにはあるまいと思えるのである、とも記されています。

池田　痛いほど良くわかります。つらさとか悲しみとかがなかったということは、それなりに正しい人生を生きた故だと考えられる。しかし、そうした無念さとは、いったいどこから出たものだろうか。

――どうやら、氏は、あの宇宙の涯に到れば、個としての生命は永久に消滅してしまう。生は一回きりだと信じておられたのが、この無念さの根源のようです。

池田　なるほど。どれほど立派に生きた人でも、これで一切が終わりだと信じていれば、後悔の念、無念な思いにとらわれざるをえないということでしょ

うね。まして、人生を中途半端に生きてきた人にとっては、「有情」から「非情」への道は、それこそ、断腸の思いにかきむしられるのではないかと思う。

小林氏が、もし生命が永遠であることを知っていれば、無念さというものはなく、かえって、充実感とか、希望の念に満たされたものになっていたことでしょう。

――たとえば、私たちはいま、永遠の生命について話しあっています。また、他の場所で、生命が輪廻することを学んだとします。こういったことは、現実に、死に直面した場合、無念さをふりはらう力となりうるのでしょうか。

池田　単なる知識としてではなく、自己の生命にきざみつけた思想、哲学は、死の恐怖と対決し、絶望と戦う力となりうる。しかし、真に血肉化した哲理でなければ、「有情」から「非情」への道程でこなごなにくだけ去り、何の力にもなりえないだろう。

――たびたび、小林氏の体験をだすようですが、氏も、自分が獲得し、自分をささえていると思いこんでいた思想が、もし血肉化されたものでなければ、

想像を絶する肉体の破壊の威力の前にそのような借り物はいっさい粉砕されつくす、といっております。

池田　そのとおりでしょう。自分自身の確たる信念と化した体験、思想、哲理のみが、生から死への試練のなかで生き残るのです。もし、私たちが永遠の生命を、自己の骨髄にうちこむことに成功すれば、死と対決するための、これほど有力な武器もないでしょう。

どうか、私たちの永遠の生命への思索が、学者の遊びでも、知識をふやすだけでもないことを、心から願っていきたいものです。

死と生命の「我」

――日蓮大聖人の『三世諸仏総勘文教相廃立』には「此の三如是の本覚の如来は、十方法界を身体と為し、十方法界を心法と為し、十方法界を相好と為す」と記されています。この文の「三如是の本覚の如来」とは、大聖人の教えによれば、私たち自身の「三身」の生命であり、「十方法界」は、全宇宙を意味します。したがって、この文は、私たちの「三身」は、全宇宙生命と一体であるとの意味になります。しかも、この『総勘文抄』に述べられているように、生死不二ですから死の生命の観点から考えることもできるわけです。「生」の立ち場ですと「有情」の「三身」ですが、「死」の生命では、「非情」と化した「三身」も宇宙と一体であるとの意味になりますね。

池田　「法身」も「報身」も「応身」も、宇宙生命そのものなのです。

――具体的に「応身」からいきますと、「非情」としての「応身」は、物理的宇宙に合一していますね。

池田　宇宙自体を「相好」となすのですから、人間生命の「応身」の側面は宇宙の色法と一体になっている。「報身」も宇宙の「心法」となり、生命の「我」としての「法身」も、宇宙生命の「身体」つまり宇宙生命自体と融合している。しかも、宇宙生命は色心不二の当体です。

――ということは、「三身」ともに宇宙生命自体となり、宇宙の流転とともに常住であると――。

池田　だから、「本有の死」と表現するのです。

――その「本有の死」に関して質問があるのですが、たとえば、宇宙にしりぞいて「非情」と化した「応身」の働きを、私たちは認めることができるのでしょうか。

池田　個々の「応身」の働きとして認めることはできないでしょう。たとえ

ば、「応身」には、肉体のさまざまな機能を統合する働きが含まれているからです。

――それから「報身」としては、無意識のなかにうずまいている情念とか、感情とか欲望などを考えることができます。しかし、これらの心的エネルギーは、死の生命にあっては、個々に区別することもできないのではないでしょうか。

池田　できません。すべてが「空」の状態としてとけ合っているのです。

――それでは、私たちの個性自体でもある、生命の「我」に関してはどうでしょうか。ある人の生命の「我」は、火星あたりにあって寒さにふるえているとか、他の「法身」は、金星に定着して暖かすぎて困るとか――。

池田　そういうこともありません。霊魂説では、生命の「我」が、宇宙のどこかを、まるで夢遊病者のように飛んでいるとか、どこかの星に根をおろしたなどというような、またはそれに近い考え方をするようだが、仏法では否定するのです。あくまで、人間生命の「三身」は、宇宙生命の当体そのものなので

す。

――トインビー博士は『死について』という本のなかで、ワーズワースの詩にでてくる「不死の海」という言葉をひきながら、次のようにのべています。

「われわれは人間を〝不死の海〟の表面でもり上ってくだける波か、ふくらんでくだける泡だと考えることもできよう。波や泡のように、人間もそれ自体ははかないものである。（中略）この地球上に精神と肉体をもつ有機体として生きそして死ぬ人間は、永遠な精神的実在のあらわれなのかもしれない」とあります。

池田　そのとおりでしょう。博士によると、究極的な精神的実在とは、宇宙の背後にあり、しかも宇宙それ自体を満たしているものだ、とのことですから、私たちの言葉でいえば、宇宙生命とおきかえることができる。そう考えれば、人間生命を永遠な精神的実在即宇宙生命の「不死の海」からもりあがっては消えていく波頭にたとえることもできるでしょう。

――会長が先ほどあげた氷山のたとえとも軌を一にしているようです。

池田　生命の大海から生じる波とか泡――氷山でもいいのだが――を、個別的な生命体とすれば、波がくだけ、泡が消え、氷山がとけることは、普遍的な宇宙生命のなかに融合することだと考えていいのです。

――「不死の海」に没入した波には、もう波としての個性はありません。つまり、死は、個別的生命が普遍的なものと合一することと考えられます。しかし、私たちの生命が宇宙生命と合一するとして、それは、この波の場合と同じように、個の生命の消滅を意味するのでしょうか。

池田　そこが、私たちのもっとも知りたいところだね。

――ふたたびトインビー博士の言葉をひきますが、『回想録』のなかでは、「人間のなかで、われわれが精神とか霊魂とか称している一面は、人間の生時にははかない個別的な人格であったが、その人間が死ぬとそれは個別的な人格ではなくなる。しかし、究極的な精神的実在として存在しつづける」と論述されています。この文章からしますと、どうも、博士は、個としての生命は消滅するという考え方のように思われます。

池田　たしかに、私たちの生命が、宇宙生命に合一するという側面だけをみれば、死は、個性的生命の消滅とうつるでしょう。いいかえれば、死によって、人間生命の「三身」は「無」に帰するように思われるのです。死における人間生命は、有か無か、と問われれば、「無」であると答えるほかはありません。しかし、仏法では、宇宙生命のなかで「無」に帰したようにみえる人間生命の「三身」を、無ではなく「空」としてとらえるのです。ここまでくれば、いかなる譬喩も「空」としての生命の「我」を、ありのままに説明することは不可能でしょう。

日蓮大聖人の『御義口伝』には、「空は無の義なり但し此の無は断無の無に非ず相即の上の空なる処を無と云い空と云うなり」と記されている。この文を、私たちの「三身」の立ち場から読んでいきますと、一見、無と同じように思われる死後の「三身」は「空」の状態にあり、しかもその生命には、仮諦としての「応身」、空諦としての「報身」、中諦としての「法身」をそなえているということになります。人間生命は、宇宙と一体でありながら、それであってけっ

して消滅したのではない。「三身」をそなえた個の生命は、個としての独立性をもちながら、しかも宇宙と一体なのです。こうした個と宇宙とのあり方を「空」の状態における存在と表現するのです。

――個としての生命の「我」は、死とともに普遍のなかに合一するが、それによって独自性を失うものではない。それが「空」としての存在であることは、おぼろげながら理解できるのですが、もう少し明快に理解できるための手がかりはないのでしょうか。個としての独自性をもつという以上、どうしても、ある空間的に限定された存在を考えてしまうのですが――。

池田　「空」としての生命を、空間的にとらえることは当然できません。だが、私たちは、人間生命の「三身」が「有情」から「非情」へとうつっていく過程に、きわめて重大な一つの手がかりがあると思われる。

――「応身」の力がしりぞき、「報身」の内容をなす感情とか欲望の嵐がおさまるにつれて、次第にうかびあがってきた生命内奥の「我」の実感、つまり生命感のことでしょうか。

池田　そうです。「死」の直前に、くっきりとうかびあがる「法身」の実感こそ、死の状態を示す個々の生命のあり方を知るための、有力な手がかりとなるでしょう。少なくとも、仏法では、生命の「我」の実感を直視して、そこから死者の生命状態を説きあかそうとするのです。

――生命の「我」の実感といいますと、私たちが生きているときは、地獄の苦悶を味わったり、飢餓感に苦しんだり、また、天界の喜びにひたったりします。慈悲をなしえた心の奥からの歓喜が色心を満たすこともあります。ところが、死の状態における生命感というのは、まだ、体験した記憶がありませんので、どうもよくわからないのです。私の生命も生死をくりかえしてきたとすれば、何回も経験したはずなのですが、どうも想いだせないのです。

池田　生きている現在の生命状態を観察することによって、ある程度まで類推することはできます。本書第二巻でも、詳細に考察したように、仏法では私たち自身のいだく生命感を分類して、十の生命状態にくみ立て、十界論を展開している。さらに、十界論にもとづいて、十界互具論も吟味した。

――「自己変革の原理」としてですが、基底部をなすという考え方も明らかになりました。

池田　その基底部という考え方が、死後の生命においても、きわめて重要になるのです。「基調」という言葉を使ってもいいが、私たちの生命は瞬間ごとに十界のうちで、どれかの生命感をいだいている。しかし、少し長い眼でみれば、人それぞれによって、かならず基調となる境涯を発見できるはずです。

――そうした基底部は、その人の生命全体の傾向性をあらわすものでもあるわけですね。

池田　個々の生命には、十界のすべてがそなわっている。だから、私たちは、縁によって瞬間瞬間、十界のいずれの生命感をもいだき、どのような境涯をもあらわしうる可能性をもっている。にもかかわらず、現実には、地獄界を基調とする生命体もあれば、餓鬼界を基調として、たえずそこに戻っていく個体もある。それを生命の傾向性と呼んだのだが、地獄を主たる傾向性とする生命は、ときには苦しみをもたらす縁を選択してでも、みずからを極限の苦悩へとおと

しいれがちです。

さて、私が、この基底部という概念が、死の生命を理解するのに、非常に重要だとのべたのは、私たちの生命が「有情」から「非情」へとうつっていくにつれて、基底部を形成する境涯以外の生命状態を呼びおこす機縁が減少していくからです。

――それは、外界からの縁に反応する力が失われていくからでしょうか。

池田　そうです。瞬間瞬間に移りかわる喜怒哀楽の感情とか、種々の欲望は、外界の縁によって呼びおこされるものが大部分でしょう。だからこそ、たとえば、病苦にのたうっていても、特効薬を与えれば、地獄の苦はすっと消えていく。愛情にうえていても、心ある人の慈悲につつまれれば、愛への飢餓感もいやされるし、知識を学ぶことによって、二乗の境涯を呼びさますこともできる。だが、死の濃影におおわれていく生命主体は、愛をうけようとしても、愛する人の姿さえみることはできない。金銭や権力、地位があっても、もはやそれを受けとめる感情とか欲望さえも、生命の内奥に沈んでいく。そして、死の苦痛

の前には、借りものの思想や哲学もすべて粉砕されてしまうのです。

要約すれば、「有情」としての「三身」の力がしりぞいていくにつれて、私たちの生命は、外界へと働きかける能動性を失っていく。縁に対応する力ばかりではなく、種々の縁を選択する力も消失していくのです。

――つまり、外界の縁に左右されることがほとんどなくなるわけですね。

池田　そうなると、みずからの生命に刻みつけられた境涯が、そのまま生命全体をひたすようになる。地獄界への傾向性を示す生命体は、死のおとずれとともにますます苦悶へとおちこんでいく。餓鬼界を基調としていた生命体ならば、飢餓感はいっそう激しく生命をさいなむことになる。畜生界を基底部として生を終れば、生命の「我」は、たえず恐怖心にさいなまれる暗たんたる生命の境涯を味わわねばならないだろう。

――修羅界の生命の人は、どのような状態でしょうか。修羅は「闘諍」とも「勝他」ともいわれていますが、死後の生命の状態は、おそらく孤独でしょうから、相手を必要とする「勝他」とか「闘諍」とかは、ちょっと理解しがた

いのですが……。

池田　おそらく、負けたときの屈辱感や、われとわが身を傷つけるような苦しみ――そうした生命感だと考えられる。もし、人界とか天界とかの境涯をまっとうした個の生命ならば、死に臨んだときの肉体的な苦痛がうすれゆきさえすれば、「法身」は平静さをとりもどし、欲望をかなえられたときのような充足感が「三身」をおおっていくと思われる。

二乗の境涯がもっとも強い生命の場合には、精神的な満足感とか、三昧境にも似た状態を持続できましょう。菩薩界を基底とする生命にとっては、死によっても尽きることのない慈悲の心に満たされているに違いありません。勇気をもって死と対決し、死さえも克服しうる勇猛心の根拠を、生死の境で身をもって示しきるかもしれません。

――いかなる極限の苦痛によってもくだかれることのない不動の信念と勇気を生みだす哲理とか宗教を、自己の死を足がかりとして説きあらわそうとするのでしょうか。

池田　死におもむく者が、みずからの生命をかけて、生者を動かすのです。他の人びとの苦しみを除きたいとする慈悲心の横溢（おういつ）した生命の「我」にとっては、死は生と同じく、宇宙生命からさずけられた試練の場であり、抜苦与楽の実践の場なのです。このような人は、かならず、みずからむかえようとする死を、宇宙生命のもたらす慈悲の行為であると実感するはずです。

――だが、みずからの死を、宇宙生命の恩恵であると受け取るところまで、慈悲心を深めるには、よほどの生命力が要請されますね。

池田　慈悲と勇気と生命内奥からの智慧の源泉が仏界です。仏界をはぐくみ、強め、基底部として定着さすことに成功した人のみが、よく自己の死をみすえて、それを克服し、さらに生者の救済にと向かいうるのです。たとえ、生前、いかなる慈しみの心をもち、勇気ある実践を行なっているようにみえても、もし、それらが、自己をかざる道具にすぎず、人びとの尊敬とか名誉とか権力をうるための手段にすぎないならば、死は、いっわりの慈悲と勇気をおしげもなく奪い去ってしまうでしょう。

死は、あらゆる人の本性を暴露してやまないのです。装いの思想、哲学、宗教をたたきわり、いつわりの感情と欲望と慢心をくだき去って、生命の奥のありのままの境涯をあらわにするのです。死に際して、一生かくし通してきたみにくい本性を、万人にさらす愚だけはさけたいものだね。逆に、死があらわにした本性が、生者を感動させるようでありたいね。

――私も、そういう生涯をまっとうしたいと思います。死に瀕したときには、他の人びとに助けを求めようとしても、また、生涯の行動を悔いても、もはや手おくれでしょうから、生きている間が大事ですね。

池田　死せる者に、自己変革の力はありません。「三身」の発動性はすべてしりぞき、冥伏してしまっているのだから、自分で自分の生命を変えることは不可能です。

――仏界とか菩薩界ですと、変革する必要もありませんが、三悪道の苦悶が洪水のように自己をひたしはじめると、どのような人でも、救いを求めてうめき声をあげざるをえないでしょう。そのときになって、どのように後悔して

も、苦悶の洪水はさらに強まるのでしょうか。

池田　みずからが基底部としてつちかってきた境涯は、「有情」から「非情」へと入っていくにつれて、一段と強化されるのです。

――ちょうど、雪だるまが坂道をころがりおちる姿に似ていますね。

――それは、基調となる境涯が自己運動をはじめて、雪だるま式にどこまでも強まっていくということでしょうか。

池田　個々の生命自体の自己運動も大きな要素です。外界から他の境涯をひきだすような縁の働きかけも減少し、生命はみずからがきずいた境涯のままに、生から死へとうつっていくのです。しかし、死における基底部の強化は、生命自体のおりなす流転にもとづくばかりでなく、全宇宙との関連においても生じると考えられる。いうまでもなく、個々の生命体と同じく、宇宙生命もまた十界互具の当体です。宇宙には十界のすべてがそなわっている。このことについては「三世間」のところでくわしく論じあったから、ここでは簡単にするが、「有情」を、ひとまず私たちの生命体ととれば、私たちをとりまく「非情」の

環境は国土世間になる。

たとえば、人間生命にとって、地獄の国土とは、「有情」の生存権を奪い去ろうとする環境であり、具体的には、火炎におおわれた大地とか、水爆のさくれつする国土とか、氷点下六十度にもおよぶような極寒の地などがそれに当たるでしょう。しかし、死後の生命は、空間的に限定された状態をとるわけではない。とすると、地獄界を基底部として死をむかえた生命体は、どのような姿で、どのように国土世間を感じているかというと、宇宙生命にとけこんではいるのだが、この宇宙自体がどこへも逃れようのない赤鉄の世界であるかのように感じていくのです。

――そうしますと、日寛上人の『三重秘伝抄』の「地獄は赤鉄によって住す」等というのも、固定された赤鉄をその「依報」、「国土」としていくということではなく、この宇宙、世界を赤鉄と感じていく、と解釈するのでしょうか。

池田　そう考えるべきです。たとえ、人界とか天界などの様相を示している国土であっても、その国土には、他の十界もすべてそなわっているはずです。

ただ、冥伏しているにすぎないのです。同じ、その国土を天界と感ずるか、地獄と感ずるかは生命主体の生命状態によって、みんな異なる。

――私たちが生きているときでも、地獄の苦悶に責められていますと、他の人にとっては楽しい場所であっても、その楽しさを味わう余裕はないばかりか、すべてが苦悶をます縁にさえなりかねません。

池田　その人の生命状態に応じて、環境も十界の変化を示すものです。それでも、生きているときには、地獄界を基調としながらも、種々の縁に対応して、他の境涯をもあらわしうるだろうが、死は、その生命を基底部にしばりつけてしまうのです。

たとえば、地獄界を基調とする生命も、生きているときには、少しは楽しいこともあったに違いない。ところが、死の状態においては、宇宙全体が苦しみの暗雲におおわれたようになり、地獄の責めがとどめようもなくおそいかかってくるのです。いいかえれば、全宇宙が地獄と化し、個の生命を責めさいなむのです。ここまでくれば、自己の生命に地獄を実感するというよりも、宇宙生

命の地獄界のなかに自己を感じると表現したほうが、真実に近いようです。つまり、私たちの生命自体が、宇宙の地獄界の分身となるのです。

――他の境涯についても、同じように推理をすすめられますね。

池田　日蓮大聖人の『曽谷入道殿御返事』にも、一つの例として「例せば餓鬼は恒河を火と見る人は水と見る天人は甘露と見る水は一なれども果報に随って別別なり」と明記されている。人界の生命が水と見、天の境涯では甘露とうつる恒河の水を、餓鬼の生命は、自己を焼きつくす貪欲の火と感ずるのです。これは餓鬼、天、人を代表として述べられているが、この原理は、他の地獄、畜生、修羅また声聞以上の四聖についても、同じことがいえるわけです。

――六道は外界からの縁によって感ずるものですから、能動性を失った死の生命においても感ずるということは理解できます。しかし、声聞以上の四聖はみずから能動的に開拓することによって得られるものですから、能動性を失っている死の生命においては、どのように考えたらよいのでしょうか。

池田　実感し、体得するのです。二乗界の生命の「我」は、死とともに、宇

宙にみいだされる法則そのものとなるからです。つまり宇宙を貫く無常という法則の分身が、二乗を基底とする死の生命なのです。さらに菩薩界に至れば、みずからが融合した国土のすべてが、慈悲をおこなう実践の道場と化すのです。

菩薩の生命は、宇宙生命の菩薩界と合一するはずです。宇宙の菩薩界の体内に入れば、国土にみなぎる抜苦与楽の慈悲力を会得するでありましょう。もし、ある生命が、仏界をはぐくみつつ死におもむけば、宇宙生命の源泉であり、万物をささえる根源の当体に合流するでしょう。そのような生は、宇宙の森羅万象の流転を、仏の所作とみることができるのです。それは、自己の生命が、寂光土としての国土自体になっているからです。

仏界の生命は、死の状態のままで、灼熱の大地の底にも、極寒の氷山の奥にも、荒れ狂う大海の基底にも、さまざまな欲望とエゴが交錯し充満する人間社会のなかにも、四季をおりなす自然の法のなかにも、宇宙生命のかぎりない英知と慈悲の発動性を会得するのです。あとのことは次章にまわすとして、ここまでのところで「本有の死」のあり方の一端を理解していただければ幸いです。

永遠の生命〈2〉

転生の秘密を解く

――前章からずっと気がかりな点なのですが、私たちの生命は、死の状態のままで限りなくつづいていくのでしょうか。それとも、一年後とか、百年後とかに、ふたたび生をうけることができるのでしょうか。

古代ギリシャの悲劇作家ソフォクレスは、「生まれなかったのが一番いい。次にいいのは、この世に生まれたにしても、もとのところへできるだけ早くもどっていくことである――つまり、早死にするのがしあわせだ」と述べています。この言葉に賛同する人もいないとはいえませんね――。

池田　極端なペシミズムですね。しかし、そういう考え方は、なにも、ソフォクレスにかぎらず、仏教でも小乗教には、生死の輪廻を絶って涅槃に入ると

いう思想に認められる。しかし、『法華経』の教えによれば、生死のくり返しは生命の本然の理であり、しかも死が苦の終りとはいえない。これまで話し合ってきたように、もし、生きているときよりも、死後の方が数千万倍も大きな苦をうけるかも知れないとなったら、ソフォクレスの願いもまったく逆転したと思われる。そのときは「死ななかったのが一番いい」といっても無理な相談だから「たとえ死をむかえたにしても、できるだけ早く生へと蘇りたい」と願うにちがいあるまい。

――菩薩界とか仏界とかを基調にしての死ならば、百年でも、それ以上でも耐えられそうです。でも、地獄界や三悪道の苦悩がつづくような死だとすれば、一刻も早く脱けだしたいですね。

池田　それは、すべての人の、いつわらざる心情でしょう。ところが、残念なことに、仏法のみぬいた実相からすると、地獄の責めからは、容易にのがれられないとあります。たとえば、日蓮大聖人の『顕謗法抄』などには、苦しみの極限において死をむかえた生命は、千劫[15]とか、一中劫とか、無量無数劫にわ

たって阿鼻の炎にむせぶ、と明記されている。

――一劫といえば、いろんな説がありますが、短いので約八百万年、一説には千六百万年ともいわれます。その千倍となると、気が遠くなりそうな長さですね。

――一中劫だと、二十小劫ですから、このほうがまだマシですね。それにしても大変な年限です。ところで、この地獄の長さというか、寿命は、文字どおり、時間的長さを示しているのではなく、地獄の苦悩の大きさ、深さを量的にあらわしている、と考えることはできないでしょうか。

池田　死における地獄の生命が、苦悩の極限を、千劫とか一中劫にもわたって体験したと感じとるのです。生の生命にとっても、苦しみの時はきわめて長いものです。まして、死せる生命においては、その基底部となっている境涯のみに縛りつけられ、生きているときのように、一時的にでもまぎらすことはできませんから、苦悶の感覚もさらに増大するでしょう。

――一時間を、百年ぐらいに感じるかもしれません。

池田　私は、時間について話し合ったところで、私たちの生命の「我」が実感する時間を、生命的時間と名づけておいた。死の領域に入った人間の「我」は、生命的時間での長短のみを感じとるのです。それは、苦悩の大きさにも比例するでしょう。

具体的に考えると、たとえば、ある人が、人生七十年の間、地獄の底をはいずりまわるような生涯を送ったとしてみよう。この人が生涯を閉じて、生から死へと移っていった場合、一生の間経験した苦しみの一億倍も、また、それ以上もの地獄の炎にむせぶこともあるでしょう。まあ、このあたりから「千劫阿鼻地獄に於て大苦悩を受く」などと説く経文の意味を察知してほしいものです。

――仏法の十界論からしますと、地獄界とか三悪道と対照的な境涯は、やはり菩薩界、仏界になると思われます。菩薩界とか仏界を基底部として確立して死におもむいた生命は、どのようになるのでしょうか。もし、それが春風に吹かれるような幸福な状態ならば、あまり早くさめてほしくないという気持ちになるだろうと思うのですが――。

池田　仏界を基調とした生命は、生から死へと退いて、宇宙生命自体に冥伏した瞬間、ふたたび死から生へと蘇るのです。なぜなら、仏界や菩薩界の生命は、みずからの幸福のためではなく、人びとを救う利他の使命感に満たされた生命です。したがって、顕在から冥伏、そして顕在化へと、仏の生命は、その激烈なまでの脈動を一瞬もとどめることはないのです。

日蓮大聖人の『総勘文抄』には「上上品の寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り来って身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」とあります。この文章を生命論の観点から読むと「上上品の寂光の往生」とは、仏界をみずからの生命の内奥に確立した人の死をさします。これらの人びとは、たとえ死がおとずれても「須臾の間」に「九界生死」の世界に還ってくるというのです。

――そうしますと、仏の生命にとって、死は瞬間であるといってよいでしょうか。

池田　少なくとも、仏界を基調とした生命の「我」は、瞬時にして生へと蘇ったと実感するはずです。つまり、死の状態における生命的時間は、ほとんどゼロに近いといえましょう。しかも、そうした瞬間の死のなかに、永遠の時の刻みを会得し、永劫の至福を味わいつくすことができるのではないだろうか。

――それで、安心しました。さて、次の質問にうつりますが、地獄界の生命の「我」は、無量無数劫にもわたるような苦悶の状態がつづきます。ところが、仏の生命は、瞬時にして生へと帰ってくる。このような差異が生じるのは、いかなる理由にもとづくのでしょうか。

池田　少々むずかしい話題に入ってきたようだが、重要なところだから、もう少し論理をすすめてみよう。さて、いまの質問に答えるには、その前に、生と死の関連性とか、死から生へと蘇るプロセスを解明しておかなくてはならないようです。蘇生の秘密というか――生死の本質を覚知した人にとっては秘密ではないのだが――詳細な法則を話し合ったあとで、この質問をもう一度とりあげることにしたい。

そこで、まず、日蓮大聖人の『御義口伝』の文から思索の糸口をさぐりだしていこうと思う。生と死の明確な定義が、『御義口伝』に「如去の二字は生死の二法なり」とあり、そのあとの部分に「法界を一心に縮むるは如の義なり法界に開くは去の義なり」と記されています。「去」すなわち死については、もはや説明は不要でしょう。

――一心を宇宙生命と合体させ、空の状態になるのが「去」であり死であるとの意味ですね。

池田　ここにいう「一心」とは、私たちの生命自体ととっていいでしょう。人間生命を宇宙全体に「開く」のが死です。今度は、逆に「法界を一心に縮む」働きを生といい、「如」と称するのです。いいかえれば、宇宙のあらゆる法を、私たち自身の「一心」に凝集し、一個の生命体として顕われ出るのが生であると表現できましょう。

こうした生と死の関連性をよく理解してもらうために、若干の例をあげてみたい。これは、以前にもたびたび譬喩としてあげたものだが、私たちの住む空

間には、さまざまな波長の電波が流れている。スタジオで撮影され、録音された画像とか音が電波として、この空間に流される。ちょうど、私たちの生命の死にたとえられる。

――空の状態ですね。

池田　電波そのものを、人間の五感でとらえることはできません。しかし、性能のよい受像機があれば、放送局で電波にのせたときの画像や音を再生することが可能です。同じように、私たちの生命も、一定の条件がととのえば死から生へと変転することが可能です。

もう一つ、戸田前会長のひかれた、まことに巧みな譬喩をあげてみよう。碁盤にむかって二人の人間が対局している。二人とも名人ならば、一日中思索しても、半局面しか打ちきれない場合も多いでしょう。しかも、生命力の消耗も激しいでしょうから、とても、徹夜というわけにはいくまい。そこで、明日にしようということになって、碁石をバラバラにして、もとのように箱におさめてしまう。次の日、二人の対局者が、また碁盤をかこんで、昨日うちおわった

ところまで、昨日と同じように白黒の碁石を並べる。

――双方とも、その道の達人ですから、ごまかしは通用しませんね。

池田　名人の脳裏には、対局の模様が、くっきりと刻みつけられているであろう。たとえ、碁盤や碁石がなくても、頭の中には、白と黒の碁石の配列があざやかに刻みつけられているはずです。ともかく、並べおわると、そこから、昨日のつづきで対局が開始される。

――碁石を崩したときが死で、碁盤のうえに並んでいるときが生ですね。

池田　この譬喩からも類推できるように、私たちの生命は、死においては宇宙生命へと「開いて」いっても、ふたたび、宇宙の物質を凝集し有情の生命体として顕在化してくる。しかも、その生まれでた生命体は、過去の生存とか、死の状態を通して連続してきた生命そのものであり、個体に刻みつけられた傾向性にしたがって宇宙の物質を集めていくのです。

たとえば、地獄界を基底部にして死に突入した生命が、ふたたび生を享受するとすれば、その生は、やはり地獄界をその基底部としたものとなろう。餓鬼

界の生命ならば、死のあとの再生においても、貪欲の炎に身をやかれる境涯をまぬかれることはできまい。畜生の境涯が支配的な生命体は、その畜生界の生命活動をするのに合致した色心を、みずからつくりだすと思われる。

――修羅の慢心をいだいて死におもむいた人の場合は、来世もまた自我意識の強い、諂曲（てんごく）の生命につき動かされるでしょうね。

池田　人界とか天界だと、理性や良心といった人間的自我にみがきがかけられ、平静な来世を約束されているようなものです。また、二乗界を基調とした生命は、それなりに得た不動の境地に立ち、菩薩界を基底部とした死の生命は、利他の心を深めながら、生へと顕現する時をつくりだしているにちがいあるまい。仏の生命には、生死ともに、慈悲とか英知とか勇気がみなぎり、「抜苦与楽」の行動をとどめることはない。

ゆえに、瞬時にして蘇った仏の生命には、温い血潮が脈うち、正義感にもえた色心がそなわり、あらゆる生命的存在を救うべき智慧の輝きが、生まれながらにしてくみこまれていると考えられる。

――外面的なことからいいますと、たとえば、今世において本能の充足のみを追い求めて、強者にへつらい弱者をいためつける行動に終始した、いわゆる畜生界を基調とした人間の生命が、ふたたび生まれでる場合には、野獣とか蛇などになることもありうるのでしょうか。

池田　いま、人間という身体を構成しているからといって、次の世にも人間として生まれてくるかといえば、かならずしもそうではない。畜生界が支配的である生命体は、その境涯をあらわすのに最も適切な姿をとるであろう。私たちが、現在、地球上でよく知っている生命形態からすれば、やはり、畜生界は本能に動かされて生を営んでいる各種の動物などに結びつきやすいのではなかろうか。

だが、この大宇宙には、私たちの知らないさまざまな生き物の姿があるはずです。そのなかには、姿、形こそ変われ、動物的な生を営むものもいるでしょう。そうした、宇宙のはての生き物に、ぴったりの境涯をきずきあげて死にむかいつつある人間生命も絶無だとはいえないでしょう。

――人間は万物の霊長だ、などといって安心はできませんね。そのおごりたかぶった慢心が、修羅の未来をまねきよせるかもしれませんね。

池田　私たちの、いまの知識からすれば、人間生命に具備した知性の光りや、愛の心情や、慈悲のエネルギーは、来世もまた、人間的生を呼びおこす可能性をおおいにはらんでいることは事実です。

――宇宙のどこかに、私たちと同じような知的生物がいると仮定すれば、そこに転生するかもしれませんね。

池田　ともかく、一つの生命体が現在の生においてつちかっていった境涯は、来世にも貫かれるでしょう。ある人の生命が、死をはさんで、どう持続しているか――つまり、ある人の過去世は誰か、などということは、肉体面の特質からは知り得ないことです。だが、生命自体の本質に鋭い洞察の眼を向けるならば、生死をくりかえしつつ流転する個の生命の連続を、あざやかにみてとれるのではなかろうか。

――いままでのところで、生から死、そして生へと流転する生命の連続性

については、よくわかりました。そこで、死から生へと蘇るところを、もう少し詳細にお聞きしたいのですが、私たちの生命が、冥伏の状態から顕在化するには、どのような条件がととのわなければならないのでしょうか。

――私たちにとって最も関心の深いのは、なんといっても、次の世において、ふたたび人間として生まれてくる場合です。その宿業のいかんによっては、動物とか、また、アミーバなどに転生することもないとはいえませんが、非常にこみいってきますので、ここでは、人間としてふたたび生まれてくるというケースに限ることにします。としますと、発生学上からも、受精現象をとりあげざるをえないのですが――。

池田　卵子と精子の結合ですね。受精という現象に即して、一個の生命が顕在化するのです。

――受精については、くわしいメカニズムなどははぶきますが、成熟した精子が、成熟卵子の表面の一部を裸出させて、そこから進入していきます。精子というのは、ちょうどオタマジャクシのように、頭があり、尾がついていま

す。卵子のなかに突入するとき、尾をきりはなして頭の部分だけが中央に進んでいきます。そして、卵子の核と結合して人間生命に固有な〝精卵細胞〟が生じるとされています。そのあと、受精した精卵細胞が分裂を開始するわけです。医学的に概略をのべますと、以上のようですが、成熟した卵子と精子はともに、一個の生命体ですね。

池田　卵子は卵子としての生命体です。同じように精子も、きわめて小さいながらも、それ自体で立派な生命的存在です。

――そうしますと、人間生命の誕生というか、顕現は、どの時点で可能になるのでしょうか。

池田　医学的見地に立てば、精子の頭部が卵子の核にまで達して、結合した瞬間に、私たちの生命の「我」が顕在化するのです。

――受精した精卵細胞は、卵子と精子との結合したものでありながら、すでに人間生命という別の生命体になっている、と考えてよいのでしょうか。

池田　卵子も精子も、一個の細胞です。卵子には卵子の、精子には精子の特

有な働きがあるでしょう。精卵細胞も、一個の細胞であることにかわりはありません。だが、外観的には、同じように、細胞的生命でありながら、受精した精卵細胞の機能は、卵子とも、精子とも異なっているはずです。

――それにしても、私たち人間の生命といえども、その誕生の瞬間には、たった一つの細胞であるというのは、おもしろいですね。

池田　一個の受精した精卵細胞は、すでに人間生命そのものです。そのなかには、六十兆もの細胞体へと分裂し増殖することによって、肉体と精神の絶妙な働きをつくりだすための、基本的な情報もすべて含まれています。

――それでは、受精する以前の、卵子と精子としての生命はどうなったのでしょうか。精卵細胞という別の生命体に変化したと考えるべきでしょうか。

池田　表面的な現象を追っていけば、そのようにとらえることもできましょう。しかし、人間生命の側から、受精という現象をとらえなおすと、卵子の核と精子の頭部が融合したその瞬間に、卵子および精子としての生命は、この結合によって生じた精卵細胞のなかに冥伏してしまう、と考えられる。精卵細胞

は、卵子と精子の機能をくみ入れ、それらの働きに即しながらも、まったく新しい有情としての脈動を開始するのです。

――でも、精子と卵子の結合という現象がなければ、死の状態で冥伏している生命の「我」は、再生する場を得ることはできないわけですね。

池田　仏法用語を使うと、受精現象は、転生する生命体にとって、その働きを助ける〝縁〟になります。つまり、助縁です。受精現象を助縁としながら、一つの生命体が、死の状態から生へと移るのです。そして、受精の瞬間、宇宙生命自体に冥伏していた人間生命の三身が、その精卵細胞によってあらわれるのです。いいかえれば、宇宙自体を色心としていた死の生命が、一個の細胞に凝集すると表現できましょう。冥伏していた人間生命の三身が精卵細胞に凝集するからこそ、たった一つの細胞のなかに、未来の人間像をきずきあげるための基本的な能力がそなわることになるのです。

――先ほどでてきました『総勘文抄』の文についてですが、そのなかに「身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて」とありました。私たち

の生命に具体的にあてはめてみますと、この部分は、死の生命の「我」が、精卵細胞として顕現することをさしているのでしょうか。

池田　『御義口伝』の「法界を一心に縮むる」という生の働きを、さらに具体的に説かれた文章といえるでしょう。「身を十方法界の国土に遍じ」とは、私たちの生命体は、宇宙の物質によって構成され、環境世界と連続しているとの意味です。

私たちの生命にあてはめてみると、この世界に転生した瞬間の姿である精卵細胞を構成する物質――つまり、元素とか原子をさしているが――は、精子と卵子からひきついだものです。精子や卵子は、両親の身体の一部であり、人間の肉体を形づくる物質と何らかわったものではない。

――医学的にいいますと、転生の場は、母親の胎内です。もっと精密にいいますと、卵管の膨大部と名づけられた部分です。母親の生命は、一個の存在として、その環境とも連続しています。

池田　「依正不二」の原理だね。

――母の胎内に生じた精卵細胞も、母親の身体を通して、自然界とも人間社会とも連続していると考えられます。

池田　宇宙に実在する物質を凝集し、一個の細胞として顕われながらも、国土と連続し、一体です。転生の場はけっして、この宇宙の外にあるのではない。いま、私たちが生を営んでいるこの国土にふたたび姿をあらわすのです。

しかも、精卵細胞は、単なる物体ではない。「三身」をそなえた有情としての姿をとっています。「心を一切有情の身中に入れて」と説かれているとおりです。もっとも、いまここで話し合っているのは、人間生命としての有情だが、他の生物に転生するケースも含めれば、この文章の意味がさらに明らかになるでしょう。

――『総勘文抄』には、この文章のあとにひきつづいて、「内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」と書かれています。ここに説かれている「因縁和合」の「縁」については、人間生命への転生の場合は、受精現象がこれに

相当すると思います。「内より勧発する因」とは、死の生命に内在する発動性をさすのでしょうか。

――死の状態においては、生命の発動性は、冥伏して発現することはできません。だが、たとえ冥伏の状態にあるとはいえ、死の生命にも、さまざまな種類の力がうずまいているでしょう。

――確認の意味も含めてうかがいますが、たとえば、人界の境涯が最も強い生命体の場合、その生命が死から蘇るとき、人界にともなった「如是力」が、主要な働きをなすのでしょうか。

池田　理性とか良心とかを支える、人間らしい欲望が、その生命の内から盛りあがってきて、人間生命として再生するための本源力となるのです。そのほかに、もし畜生界などが有力だと仮定すると、その本能的欲望の力が、再生する生命体の形態を決定するのです。

さらに、二乗の洞察力とか、菩薩界の勇猛心などが加わる場合もありうるのです。こうして、一個の生命自体にうずまく種々の境涯からの「如是力」がま

ざりあって、蘇生のための原動力をなすでしょう。つまり、一個の生命内奥から勧発する種々の力こそが、再生を呼びおこす本質的な「因」となるのです。

――死せる生命体にうずまく総合的な力――つまり「本因」――を、それに相応する「縁」がひきずりだすということでしょうか。たとえば、人間の受精現象が、人界を基底部とした死の生命を生の世界へと導きだすと――。

池田　いや、そうではない。人間生命へと顕在化するための「本因」を宿した死の生命の「我」が、みずからの傾向性に最も適合した卵子と精子の結合をとらえるのです。そして、卵子と精子の結合という受精現象を助縁としながら、一個の生命体が、この世に出現するのです。

この過程を、『総勘文抄』の文章にあてはめてみると「内より勧発」するのは、死の生命体に宿る総合的な「如是力」であり、人間としての生命体をうるための「本因」です。「外より引導する」助縁となるのは、受精という現象です。内から発動する「本因」と、その顕在化を助ける「縁」が、たがいに相応し、ぴたりと一致した瞬間、人間生命としての精卵細胞が生まれるのです。つまり、

精卵細胞は「因縁」が「和合」した結果であり、産物であるといえましょう。

――そうしますと、最初に出てきた問題に戻りますが、地獄界に色づけられた生命が、限りないほどの長期間にわたって死にとどまるのに対して、仏の生命は、死から生へとすみやかに転生していくその理由はなんでしょうか。

池田　地獄界の「如是力」には、蘇生への発動性が、非常に弱いといっていいでしょう。

それとは、まったく対照的に、仏界には、たとえ一瞬の死をむかえても、ふたたび生をとりもどす根源的な力がみなぎっている。『総勘文抄』には、仏界を強化しつつ蘇った生命の働きについて「自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」と記されている。この文章の意味からすれば、あらゆる衆生を利益する慈悲の力こそが、死から生へと発動する最も強大な力であることが明瞭です。地獄の生命には、他に対して慈悲をおよぼすような余裕は、かけらほども認めることはできないでしょう。

――三悪道とか修羅界も、まだ、自己本位ですね。

――私たちの生命が、どれくらい死にとどまるかは、もし転生した場合に、他の生命的存在に利益を与えうるか否かということを基準にすることによって、大略の見当がつけられるということでしょうか。

池田　前にもいったように、地獄の寿命が長いというのは、その生命に感ずる主観としての、いわゆる生命的時間の長さが中心であることを忘れないでほしい。しかし、それにしても、やはり客観的にいっても長くかかるのでしょう。

戸田前会長は「慈悲論」と題する論文で、「そもそも、この宇宙は、みな仏の実体であって、宇宙の万象ことごとく慈悲の行業である。されば、慈悲は宇宙の本然の姿というべきである」とのべられ、そのあとに「宇宙自体が慈悲である以上、われわれも日常の行業はもちろん、自然に慈悲の行業そのものではあるが、人たる特殊の生命を発動させている以上、人間は、一般動物、植物と同じ立ち場であってはならぬ。より高級な行業こそ真に仏に仕える者の態度である」と記されている。

慈悲は、信仰者の本質であり、その行為は、生にあっては、宇宙の本然の姿

と合一しつつ、万物の営みをまもりぬき、死にあっては、新しい生への根源力となりうるのです。また、死の生命に脈うつ慈悲のエネルギーは、その発現に最もふさわしい生命形態を獲得する力にもなりうるのです。こうした意味では、やはり、人間生命は、他の生物に比して、慈悲を行なうにふさわしい色心を保っているといえないだろうか。

――私たちが、仏界を強化すればするほど、転生の力が増すのですね。

池田　人界とか、二乗の境涯に内在する「如是力」も、当然、転生の力、蘇生の力にはなりうるでしょう。本能的欲望なども、転生の力を秘めていないとはいえまい。だが、畜生界とか餓鬼界のみに執着しすぎると、再生した生命形態が、蛇であったり、牛馬であったり、アミーバになることもありうる。

動物も植物も、この地球上において、たしかに、宇宙の慈悲行を助けてはいる。しかし、知的生物としての人間の行為が為す慈悲行にはおよばないであろう。こうして検討してくると、やはり、仏界とか菩薩界が、最も強力な蘇生の力であり、しかも、その生命にとって崩れない幸福をきずきあげる「本因」と

もなることが判明するはずです。

――この項の最後に、もう一つ質問しておきたいことがあります。死にあって、地獄の苦悶のどん底にある生命体は、運命というか宿業にまかせるしか、しかたのないものでしょうか。

池田　死の状態にある生命には、みずから自己を変革する力はありません。実際問題、そのための手段としての機能の発動がないのです。

――たとえばの話ですが、私自身に深い関係のあった人が、どうやら、あまりよい境涯とはいえない状態で死んでいったとします。どのように気をもんでも、もはやどうすることもできないのでしょうか。

池田　仏法では、ただ一つ、死者の生命を変革する方途を確立しています。それは、死者がみずからの生命を変えるのでもなければ、死せる生命が、たがいにあわれみ合うのでもない。生者の行為が、死者の生命に働きかけるのです。といっても、むろん、会話をかわしたり、食物をとどけたりするのではありません。

生きている者の、仏法定理にもとづいた行ないが、死せる当体に、宇宙本源の力を吹きこむのです。つまり、仏界の「如是力」を、死の生命に与えるのです。仏法では、生ける者が、自己の生命の内奥から、慈悲と英知と勇気にみなぎった仏界を汲みだす方途を確立している。このことは、十界論の仏界のところで話し合ったとおりです。

――私たちの仏法的行為が、宇宙森羅万象の本源に達し、そこから、仏の力を噴出させるのですね。

池田　その宇宙本源の仏界を、こんどは、死者にむけるのです。生者の行為が、万物の源流から慈悲のエネルギーを汲みだして、それを、死せる生命へと送りこむのです。こうした、生者から死者への働きかけを、仏教では〝回向(注16)〟とか〝追善供養〟と呼んでいる。

――『優婆塞戒経』という経文には、「若し父喪し已りて、餓鬼中に堕るに、子為に追福すれば、当に知るべし即ち得」とあります。追福というのは、仏界の力を与えることですね。

池田　そのあとに「即ち得」と書かれている。子供の追善の行ないが、父の生命に通じたとの意味でしょう。

――三悪道の苦にひたっている死者に、生者の側から、仏の慈悲力が与えつづけられた場合、どのような変化がおきるのでしょうか。

池田　死せる生命には、自己変革の力がありませんから、みずからの行動を通じて、仏界を汲みだすことはできない。しかし、生者の側から送りこまれた仏界が、その生命の基底部をゆり動かし、傾向性を変えていくことはできる。

生きている私たちの周囲にも、みずから仏界を顕現させることによって、はつらつとした生命力をえて、みごとに地獄界や餓鬼界を脱出した人びとの、変革の姿があふれています。同じように、死者の生命も、三悪道の苦をぬけて、人と天の境涯に至るものもあるでしょう。そして、死の生命に力が満ちあふれてくるにつれて、転生の力、蘇生の力が増加し、自己に適合する再生の縁をとらえて、ふたたび生の生命をうるに至るのです。

――その場合、具体的には、人間的生をうると考えられますか。

池田　他の生命体に利益をおよぼすために最もふさわしい生命形態を獲得することだけは断定できます。そのうえで、転生する生命体に個有な、二乗の智慧とか、菩薩界の勇猛心とか、人間的自我としての理性の光りなどが、万物をまもりぬくための力として使われることになるのです。

ともかく、仏教の〝追善供養〟は、不幸にして、苦悶の死におちいった生命体へとさしのべられた、覚者としての仏の救いであるといえましょう。だが、その救いの手は、あくまで生者の行為にゆだねられているのです。

人生観への反映

――いままで「永遠の生命」をテーマとして、主として現世主義と対比しながら話を進めてきました。また、仏法の永遠の生命観と霊魂不滅説との違いについても論及してきたわけです。そして、かなり明瞭に仏法の永遠の生命観の根拠を確かめることができたと思います。

そこで、この論議の結論として、どうしても触れておかなければならないことがあります。それは、永遠の生命という考え方が、実際の人生の処し方にどのような影響を与えるか、ということです。いくら永遠の生命について私達の主張を述べたところで、そうした生命観が現実の人生に反映してこないのであれば、いたずらに空理をもてあそんでいることにもなりかねないからです。

池田　そう。この問題は本章の話し合いの冒頭に触れられるべきものでもあったといえるでしょう。ここではいままでの論議の内容を踏まえたうえで、現世主義が人生行路にどのような指標を与えるか、また「永遠の生」という同じ考えに立ちながら、仏法の因果の法則と霊魂不滅の考え方では、いかなる人生軌跡の違いを生ずるかということを、対比しながら話を進めていってはどうだろうか。

――それでは、まず現世主義のもたらす人生観ですが、もっとも普遍的なものとしては、快楽主義と悲観主義があげられると思います。この二つは表裏をなしており、この人生を一回かぎりのものとして受け取るとき、もっとも容易に出てくる考え方といえそうです。

池田　生が一回かぎりで、死によって一切が無になるならば、この生をどのように過ごそうと無意味であり、それならできるかぎり生を貪っておこうというのが快楽主義といえる。その反対に、この人生の快楽さえも儚(はかな)いと悟って極端なペシミズムに陥る場合がある。もちろん、それぞれ種々の複雑な発想がか

らまっていようが、普遍的なものとしては、そう考える人が多いようだね。とくに現代人は、快楽主義と悲観主義の二つの発想をかなり濃厚な色彩でもっているようです。体制からの離脱という考え方も、体制そのものが具体的な抵抗の対象としてとらえられているのではなくて、現実社会のどうしようもない虚無感、それをもたらす象徴としての体制を、漠然と考えている場合が多いのではなかろうか。現世主義のもたらす弊害の側面が、深いところで渦巻いているように考えられるね。

しかし、ひとくちに現世主義といっても、底の浅いものと深いものがある。この世の生を一回かぎりのものと考えても、そう認めたうえで、なおかつ貴重に生きる、というより、であるからこそ大切にし立派に生きようと努めている人もないではない。みずからの仕事が子孫末代、ひいては人類全体に寄与する何ものかがあると信じて、全生命をなげうってでも自己の使命に直進していく人がいる。死を恐れるのは生あるものの本能的発想だが、それ以上の価値を自分の仕事に認めているのだね。

――哲学者、あるいは真理の探究に一生を捧げた人びと、また医学等をもって人びとを救うことに真摯に生き抜いた人びとのなかには、そのような境涯にまで至った人もいます。たとえば岸本英夫氏は、「世界を忘れ、人間を忘れ、時間を忘れたかのような境地に没入するとき、豊かな特殊な体験が開けてくる。永遠感とも超越感とも絶対感ともいうべきである。この輝かしい体験が心に遍満するとき、時の一つ一つの刻みの中に永遠が感得される。現在の瞬間に永遠が含まれる」といっています。現在の一瞬を大事にすることにより、そこに永遠のものを見いだすことができ、みずから永遠のなかに生きていることを感得できる、と一つの境涯を吐露しているわけです。

池田　明治の文豪、高山樗牛も、ニュアンスは違うが、みずからの仕事のなかに、自分が生き続けることができると信じ、それを全うすることに命をかけたのだね。たしかに、その真摯な人生への態度は立派であるし敬服に値する。またその結果得た境涯も、一つの確たるものがあったことはうかがえる。しかし、恩師戸田先生も言われていたことだが、それは人生への態度としては素晴

らしいことかもしれないけれども、普遍的な人生観としては納得しがたいものがあるといわざるをえない。それぞれの境地に達した一握りの立ち場の人たちはそれで満足できても、庶民の感情としては、特殊な境涯と思われる。やはり二乗の境涯の一つとして感じられるわけだ。

――大多数の人びとにとっては、そのような崇高な考えをもとうと思うよりも、現実社会における種々の煩悩のおよぼす力に影響されるほうが先ですからね。

池田　そう。それは、根本的には生死の本質を直視し、乗り越えていないからです。一回かぎりの生ということを明確に認識するようになればなるほど、煩悩の火は強いものとならざるをえない。押えようとすればするほど、ますます欲望は強くなり、理性や良心を吹き飛ばしてしまうものだ。結局、一回かぎりの生だから立派に生きるということは、貴重な尊い発想であるにはちがいないが、煩悩多き人間に、死を乗り越えさせるだけの力をもっていないという以外にないようだ。

――また、たとえそのように割り切っていたとしても、いざその場に直面すると、その執着が異常なほど高まっていくということも考えられますね。子供のとき、夏休みが終わり近くになり、もう夏休みは来年までこないのかと思うと、無性に寂しく感じたことがありますが、それとは比較にならないものがあるのでしょう。モンテーニュは「凡人にとっての特効薬といったら、それは死を考えないことである」とさえいっています。

――それから、そうした考えをもつ人の特徴として、死の恐怖を極端に強く考える場合と、逆に死の誘いに負けやすい人もいるようです。みずからを抹消することに強い誘惑を感ずる。いわゆる「死の衝動」というものが、本来人間に具わっているのですが、それは裏返していえば、じつは生命の魔性の一つではないかと思うのです。

池田　文学者などでも、死の誘惑に負ける人は多いようだね。利己、貪欲という生命の魔性は、第六天の魔王の働きだが、それは私たちの日常生活を振り返ってみると、あらゆるところに巣食って生命を破壊する働きを示している。

その最たるものが、生命を殺傷することです。他人を殺す、あるいはみずからを抹消するというのは、この働きの最たるものです。

――みずからの仕事の完成を、死をもって明瞭にするとか、老醜をさらすことを恥辱と考えて、みずからを死に誘うというのは、かえって自己の生の価値を狭め、また断ち切ってしまうことになりますね。

池田　仏法では、このような「一回かぎりの生」という考え方を「断見」といって、片寄った考え方として破折し、無限輪廻の思想を打ち立てたのです。しかし、ひとくちに永遠の生命といっても、そこには千差万別があり、発想によっては、かえって生を粗末にすることさえある。

――たとえば、死後に天国といったものを設定すると、それで現在の生が充実するかというと、逆の場合も起こり得る。生を充実させることよりも、死への傾斜が強くなってしまうわけです。念仏の極楽往生の考え方がよい例ですね。西方に人類の理想とする桃源郷を設定して、それを渇仰させることにより仏法への心を起こさせようとして、かえって現実世界を「穢土」と卑下せしめ、

民衆をして死を希求させてしまいました。念仏がもっとも広まった時代に、自殺者が急増したという事実がそれを物語っています。

――それから、先ほど話の出ました「断見」に対して「常見」という考えも、この種の偏見ですね。未来世においても、人は人に生まれ、犬は犬に生まれ、麦は麦として生を受ける。したがって、いかなる善業を積んでも、来世に善処に生まれることはないという考えが「常見」ですが、もしそうならこの世で努力をしても同じことだという、一種の諦観あるいは安易感が生み出され、結局、現在の生を貴重なものとして開発していく作業への発条（バネ）とはならないわけです。このようなところから破折されているのでしょう。

池田　それは、根本的には生命の輪廻を、平面的なものとして考えているのです。平面上に書いた円のように、その上をぐるぐる回るのが輪廻ならば、いつかはまったく同じ所にもどってくる。ということは、現在の自分と同じ姿、境涯の自分が再現されることになる。とすれば、努力も何も必要ないではないか――ということになりかねない。ニーチェの永劫回帰の思想では、そこのと

ころをどう乗り越えるかに苦慮したわけだが、私は生命の輪廻というのは、そのような平面的なものとする考え方ではなく、もっと立体的なものであると考えたい。円のように回転はしながらも、上下に展開する「らせん」のようなものとでも表現すればよいだろうか。永遠の生にはぐくまれながらも、そこに発展性を帯びているのです。その立体的、動的な永遠の生命観をもたらす軸となるのが、因果論ではないだろうか。

つまり、輪廻という考えに立ちながらも、みずからの生命のなかに、因果の法則が貫かれていると説くことによって、現在の因が未来に果として顕在することを知り、現在の生を大切にし、しかも前向きに生きていくことができるのです。現在の生と断絶したところに未来の生があるのでもなければ、まったく同じ平面に未来の生が再現されるのでもない。現在の生の処し方の一つ一つが重要な因となって未来の生を決定し、醸成していく。しかも全体として把握するならば、永遠の生という雄大な輪環を形作っているのではないかと思うのだ。このような永遠の生命観に立てば、人生観はどのように開けてくるだろうか。

――まず第一に、死というものを「本有」の現象として引き受ける勇気が湧き出ることです。それはけっして死を忘れようとするのではなく、またいたずらに恐怖するのでもない。生死ともに本来そなわっている生命輪廻の一つの現象と悟ることによって、かえって従容として生にも死にも直面し対決することができると思います。

第二に、そのゆえに、現在の生をより大事にし、また自己の責任のもとに生きることができる。現在の自分の行動が未来の生を決定づけつつあるわけですから、自分をみがき、充実させ、宿命を転換しようとする生き方となってあらわれてくる――。

――また利他の実践に生きることが、みずからの生命の形成にも不可欠のものとして、切実になってくることもいえます。国土世間を変革し、寂光土に仕上げていくことが、そのまま未来の自己を守ることになるわけですから――。

池田　それだけではない。現在の作業の一つ一つがみずからの栄養分となって蓄積され、それが現在の生の終わりによって雲散霧消してしまうのでなく、

そのまま蓄積されて自己を拡大させていくのだから、現在の生を最高に謳歌して生きていくことになる。

それから第四番目に、煩悩との戦いだけれども、煩悩を煩悩として見つめ、それと対決し、冥伏させていくこと、さらに進んで、かえって煩悩を自在に駆使し、生命の昇華に用いていくことも可能になってくる。快楽主義やペシミズムに陥ることを防いでくれるわけだ。しかもこの生命観をもつことは、けっして一部の知識階級しかなしえないなどというものではなく、すべての人びとが、このような生命観に立脚することによって、確たる人生観をもち、現実のこの人生を謳歌しながら、なおかつ真摯に歩みを進めることができるところに、仏法の永遠の生命観の優れている所以があると思う。同じ生命の永遠観でも、霊魂説などにおいては、その生命の軌道は不可逆的なものであり、その意味においては一回かぎりの生と変わらない考え方のものもある。そしてそこでは、現在の人生と死後の世界に決定的な差別を設けてしまうため、どうしてもこの人生における営為が「仮(かり)」のものとして受け取られる場合が多い。そうなると、

現在の人生に処す力強い原動力とはなりにくくなるのです。

――仏教の永遠の生命観というと、非常に虚無的な色彩が濃く、死の準備のための思想という受け取り方も一部にあるようですが、そうではなく、この現実の人生を最も深い意味で楽しみ切って生きていく道を教えた宗教である、ということを認識する必要がありますね。

池田　そのとおりです。たとえば、浄土宗等においては、この世は穢土であり、人生は一切が無常であると説いて、西方十万億土の極楽往生を教えた。そうした現世をはかないものとする思想が、仏教を暗いものとして受け取らせた要因の一つとなっていたでしょう。しかし、『法華経』の「衆生所遊楽」の一句をみても分かるように、この世界は、本来衆生が、悠々と生を楽しみ遊戯しきっていくべきところなのだと教えている。それにはただ永遠の生命観を、死を迎えるための方便の教えとみるのではなく、幾多の生老病死との対決の後に勝ち取った真実の生命観であると確信し、その前提に立って現実社会と取り組み、その無限の展望に立って、現在の利他の作業に汗していかねばならないと思う。

その確たる人生基盤を構築したとき、一つ一つの苦難が底知れぬ生の歓喜をもたらす栄養源となり、自己の完成、社会の変革に尽くす汗の一滴が、そのまま不動の人生行路を切り開く水源となっていくのです。私たちはこの対話を終えるにあたって、この雄大な生命観をすべての人びとの胸中に息づかせていくことが、病める現代文明を蘇生させ、来たるべき二十一世紀を、生命躍動、生命勝利の世紀としていくカギとなるという揺るぎなき確信をもって、今後もその至高の作業を貫いていくことを誓い合っておきたい。

注

1 **ネアンデルタール人**　ほぼ十数万年前に生息していた〝旧人〟で、ヨーロッパをはじめ、アジア、北アフリカなどでその遺跡が発掘されている。ドイツのネアンデルタールではじめて遺骨が見出されたので、この名がつけられた。多くの学者は、現代人の直接の先祖にあたる主流に属すると考えている。

2 **ゾロアスター教**　紀元前六世紀初め、ゾロアスターを教祖として成立したイラン民族の宗教。拝火教ともいわれる。光の神アフラ・マズダを最高神と立て、全宇宙の創造者として一切の善をつくりだす。これに対抗する神ダェーヴァは凶神を意味するという。死後には、霊魂の不滅が信じられていた。信者は死後、讃歌の家に往き、不信者は虚偽の家にいく。前者は天国、後者は地獄である。世界の終末には、善神の勝利におわると説く。

3 **業**　善悪を問わず、種々の行ないを仏教では業という。そしてその業は蓄積されて、その生命主体の苦楽の果を決定すると説く。いかなる人といえども、現在受けている

苦楽は、みずからが過去に蓄積した業によるのであり、生命内在の因果を説く仏教独特の因果論の基礎となっている。

4 **四門遊観** 釈尊が太子のとき、東門を出て老人を見、南門を出て病人を見、西門を出て死人を見て老病死の苦を悟り、北門を出て沙門に会い、翻然として出家の願いを起こしたという。

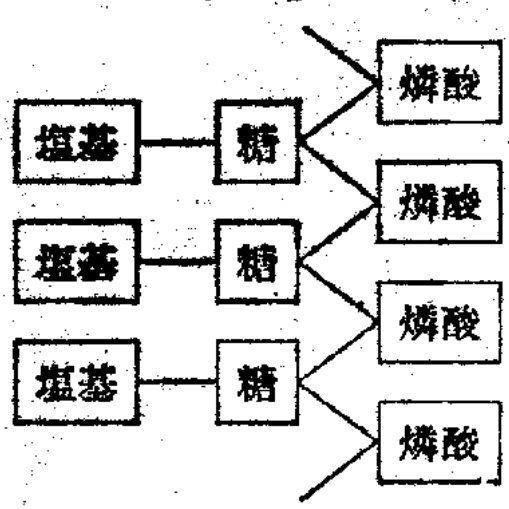
5 **四苦八苦** 四苦は生老病死の四つ。八苦はそれに加えて愛別離苦（愛する者と離別する苦）怨憎会苦（怨憎のものと会う苦）求不得苦（求めても得られぬ苦）五盛陰苦（五陰＝色・受・想・行・識＝が盛んな故に受ける苦。生命活動あるゆえに受ける種々の苦）の八つ。

6 **諸行無常** 諸行とは一切の現象。森羅万象は変転するものであると説く仏教の考え方。一切の現象のどれ一つとして常なるものはなく変転するのに、それに執着する心を起こすゆえに、種々の苦が起こるとした。ただし、変転する一切の現象から離れるのではなく、その奥に常住の法ありと悟り、その法を基底としていくことを指向したのが、この諸行無常の元意である。

7 **苦集滅道** 四諦といい、苦は人生の苦、集は苦の因、滅は苦を滅すること、道は苦を滅する修行法。修行者はまず苦を観じ、次にその苦の因を観じ、さらに苦を滅することを観じ、最後に苦を滅する道を観ずる、と『倶舎論』に説く。

8　核酸とピリミジン　核酸にはDNAとRNAがある。二つの核酸の構造はともに、糖—燐酸—糖—燐酸……という骨核の糖の部分に、プリンやピリミジン塩基がついている。（下図参照）

塩基がDNAではアデニン（A）グアニン（G）シトシン（C）チミン（T）の四種類であるのに対して、RNAにはTのかわりにウラシル（U）が入る。また、DNAでは糖がデオキシリボースであり、DNAではリボースとなっている。



9　二重星・多重星　二個以上の恒星が近接しているもの。太陽は単一の恒星であるが、星によっては二つ以上の恒星の実距離が小さく、共通の固有運動を示すものがある。これらは互いに力学的に作用しあっているため、軌道が太陽のような単一の恒星とは異なる。

10　バーナード星　へびつかい座にある九・五等星。六光年ほどの距離で、アルファケンタウリについで太陽系から近い星となっている。

11　八熱地獄・八寒地獄　拘束された最極の苦に種々あることを八熱八寒をもって例示したもの。八熱地獄は等活（鉄の棒等で打たれる）黒繩（墨繩で測ったままに罪人を切る）衆合（山が罪人を圧す）叫喚（熱鉄であぶられ罪人が叫喚する）大叫喚（叫喚の大なるもの）焦熱（炎熱の苦）大焦熱（焦熱の大なるもの）無間（または阿鼻。最

極の苦であり詳くは説かれない。間断ない苦)。八寒は種々あるが、『涅槃経』に阿波波、阿吒吒、阿羅羅、阿婆婆、優鉢羅、波頭摩、拘物頭、芬陀利の八を説く。いずれも寒苦に責められ罪人が発する声などを名づけたもの。

12 **オゾン層** 地上十キロメートルから五十キロメートルの高さにある。オゾンの密度がその上下にくらべて甚しく大きい層である。オゾンは、波長2,200～2,900 Å(オングストローム)までの間の光を吸収する。太陽光線のうち、この範囲の波長の光りは、オゾン層において著しく吸収される。

13 **コアセルベート** 原理的には、親水性コロイド溶液が、ある条件のもとで、二つの液相に分離する。つまり、コロイドに富む液相と、コロイドにとぼしい液相にわかれ、そのうち、前者をコアセルベートという。

14 **化石人類** 地球上には、過去、二千万年ぐらい以前から、各種の人類が生存していた。彼らの生存の証拠は、遺跡から発掘される頭骨、歯、道具などである。つまり、化石としてのみ知られる人類の先祖である。

15 **劫** 古代インドで用いられた非常に長い時間の単位。種々の計算の仕方があり、八百万年、千六百万年、三億年、十二億年等がある。また数えることが不可能であると説いた経もある。

16 **回向** 回向は回転趣向の略で、仏道修行により得た功徳を他の者に施し与えること。

著者略歴

昭和3年1月，東京都に生まれる。46歳。富士短期大学経済学科卒。現在，創価学会会長，日蓮正宗法華講総講頭。昭和22年，19歳にして戸田城聖前会長に会い，その逝去の日にいたるまで師事。昭和33年6月，創価学会総務。昭和35年5月，創価学会第三代会長に就任。

著書に「人間革命」(第一～八巻)「私の人生観」「私はこう思う」「わたくしの随想集」「女性抄」「私の提言」「科学と宗教」「立正安国論講義」「私の釈尊観」ほか多数がある。

生命を語る　第三巻

昭和四十九年三月　十　日　初版印刷
昭和四十九年三月二十五日　初版発行

定価　七五〇円

著者　池田大作

発行者　島津矩久

発行所　株式会社　潮出版社
東京都新宿区南元町一四―一
電話東京(03)357―七一二一(代)
振替東京六一〇九〇番
郵便番号一六〇

(乱丁・落丁本はお取り替えいたします)

印刷　明和印刷株式会社　　製本　牧製本印刷株式会社

© 1974 Daisaku Ikeda　　Printed in Japan